

する時であるから、この傾向を阻止する事なく、寧ろ獨立自治の精神に適當なる刺戟を與へ、これを善導して行かなければならない。

### 青年期と結婚期の退行作用

青年期は一般に學校を離れて實社會に入る時期である。學校に居る頃には學校生活が樂だとも思はなかつたが、愈々社會に出て見ると學生時代ほど樂しかつた時期はない。そこに退行的心理が働くのである。然し何時までも學校に居る譯に行くものではない、學校や先生方の恩を忘れないのは結構であるが、餘りこれに固着し過ぎてはならない。學問をするのは學校に限つたものではない、また教師は學校にばかり居るものではない、社會の人も、路傍の人も、心して交際すれば皆な教師なのである。徒に低徊して、一日遅れば一日の損であるから、適宜に轉向しなければならぬ。次に就職して經濟的獨立を得た後に登るべき階段は、結婚と言ふ階段である。結婚は極めて重要な事であつて、階段と言ふだけでは物足りない、寧ろ人生の峠であると言つた方が適當である。言はゞこれは人生の分水嶺であつて、各人の運命はこゝで大體決まるのである。今まで華かな夢を描いて居つたものが、愈々結婚と言ふ峠を越えると、自分の生れたなつかしい父母の家も見えなくなり、所謂幻滅の悲哀を感じて、多少退行的となり回顧的となるものである。殊に結婚後の生活において、經濟的精神的氛圍氣

等が激變するやうな場合には、特にこの傾向が甚だしい。然し如何に憧れても我々昔に歸るといふ事は出來ないのであるから、寧ろ一日も早く新しい境遇に善處して、より良き運命を開拓して行かうと努力する方がよい。

### 壯年期と老衰期

壯年期や圓熟期などには餘り退行作用は見られない。たゞ時に事業に失敗したとか、失業したとか、配遇者を失つたとか、大病を患ふとか、急に植民地に行くとか言ふやうな特殊の經驗を有する場合には、退行的となつて人生の悲哀を感じたり、故郷が戀しくなつたり、また今まで忘れて居つた昔の友達が懐しくなつたりするものである。最後に老衰期に達し體力が減退して、到底社會の荒波に對抗して生活して行く元氣がなくなると、本格的に退行を始めるやうになる。彼等は先づ實生活の第一線から隱退し、そして退行して昔に歸り、子供らしくなり、遂には永遠の眠に就くのである。



## 第三篇 感情別に觀たる家庭教育

### 第二十一章 緒言——感情とはどんなものか

#### 感情と人生生活

人間は感情の動物であると云はれて居るが、全くその言葉の通りで、我々は朝起きるから夜寝るまで、食事をする時にも手紙を書く時にも、人を訪問する時にも、遊ぶにも働くにも、感情を交へずにする事は出来ない。また女も男も、子供も大人も、裁判官も教師も、軍人も家庭の主婦も、貴賤貧富の別なく、凡そ生きとし生ける人間は感情を有し、感情によつて動いて居るのである。然しかゝる事實を認める事を潔きよしとしない人々も少くない。多くの人の中には自分こそ理智的生活を営んでゐると思つて居る人もある。然し仔細に考へて見れば科學者の生活でも、理性はたゞ外見だけであつて、その根本を流れて居る日常生活の主流は、感情に由つて支配されて居る事を發見するのである。殊に子供達の生活は理性が弱く感情的色彩が濃厚であるから、その教育や指導の任に當る者は、彼等の感情を理解し、これを利用し善導して行かなくてはならない。

かく人間の生活にとつて最も重要であり、また根本である感情の研究が、總ての學問の中で最も幼稚である事は一種の皮肉である。學問發達の過程を見ると、最も古く研究されたものは最も人間生活に遠い天文学であつた。バビロン、アツシリヤの昔において既に日月星辰等の天體を對象とした學問が發達して居つた。次に物理学や地理、地質學など、吾人の棲んで居る地球に關する研究が始まり、またこれに次いで數學殊に幾何學などが發達した。更に降つて礦物植物動物などの研究が進められ、最後に人間を對象とする學問が暫く始められたのである。人間を對象とする學問の中でも、最も早く發達したのは生理學で、心理學は一番後に残された科學であつた。また心理學の中でも、記憶とか智能とか學習過程などの研究は比較的早く發達したが、感情の研究はその最後に取り残されたものであつた。従つてこの方面の智識は現在においても非常に貧弱である。

#### 感情の効果

人間が感情的であると言ふ事は、屢々悪い意味に用ゐられて居る。例へばあの人は感情家だと云ふ事は決して褒めて言つた言葉ではない。然し感情と云ふものは前にも述べた通り何人にもあるものであり、また感情それ自身は決して悪いものではない。否な感情があるからこそ、人間が器械と違つて貴いのであると言ふ事も出来るのである。自然は人間



に感情を與へ、吾人はこの感情に由つて或る物を恐怖して危害より免れ、ある者を愛撫して喜び楽しみ、また或る事物に對して、忿怒の情を發してこれを防禦し征服して自分の生を完うするのである。人間最高の創造であると言はれてゐる藝術も感情の産物であり、また愛國心も親孝行も宗教も道徳も、感情なくしては存在しない。感情はまた吾人の精力を増大し、その能率を増進する上に缺く事の出来ないものである。而して能率の増進は、吾人が生れながらにして賦與された精力を集中することによつてなされるのである。これを腕力について云へば、人が苦心の結果十五貫乃至二十貫のものを擔ぐ事の出来るやうになるのは、元々無いものが出て來たのではなくて、主として生來の腕力を集中する事による。英國の或る學者の計算に據ると、人間の體力の總和は、男子においては約百二十貫内外で、女子においては約百貫であると言はれて居る。處が實際にはその十分の一位の力しか出ないのは、これを統一し集中しないためであると考へられる譯である。我々は大地震などの如き非常時に際しては、驚くやうな智慧や力が出る事を經驗するのである。これ等も矢張精神統一の結果に外ならない。而して人間には神経系統と言ふものがあつて、複雑極まるその行動を統一するのであるが、多種多様な細胞や機關から成る人體を統一して行くには、神経系統だけでは不十分である。この不十分を補ふために感情があり、感情の發動によつて、精力の集中を援けるのである。

例へば母が病兒を看護する時に、平常時に考へられないやうな、強い忍耐力が出るのは、その行爲の背後に愛の感情が働いてゐるからである。その他戦ふにも事業を起すにも、總ての場合において感情の支援が必要である。然し感情にはよい方面ばかりでなく悪い一面もある。即ち程度を越えた偏頗の感情は、物事の判断を誤り、徒に精力を浪費し、自からを害ひ他人を傷つけるものである。

### ズリツク女史の實驗

獨逸のズリツク女史は自分の關係して居る小學校の生徒について、感情に關する興味ある研究をして居る。女史は小學校四年の生徒約四十名の内から、最も人氣のあるもの五人と、最も嫌はれて居るもの五人と、都合十名を長い間かゝつて自然に選び、或る日この十名を呼んで、一人置きにクラスの前に立たせ、豫て用意してあつた簡単な動作——例へば左の手を上げて、掌を外側に向け、中指を曲げよと言つたやうな動作を十種類ほど、號令に應じてやらせたのである。女史はこの試みをするに先だつて、好かれて居る子供達五人を特に呼んで、十回の中五回は替る／＼故意に間違ふやうに打ち合せておいた。而して残りの三十名の生徒達は、これ等の十名の人々の動作を注意し、號令と異つて居つた場合には、一回毎に一點づゝ減點するやうに命ぜられた。その結果はどうであつたかと言ふに、好かれて居る生徒が間違つた場合にはこれを看過し、これに反して嫌はれて居る生徒達のやつたのは、間違つてゐないにも



拘はらず、間違つたと誤認して減點して居つた事が明かにされた。然も誤認の率が非常に高く、全體の約四割に及んで居つたと言ふ事である。これは兒童の愛憎の感情が、評點に及ぼした影響を知るに最もよい實驗である。また同女史は教師達が生徒の綴方の採點について、數年間に亘つて調査した結果、同じやうな結果に到着したと報告して居る。即ち教師の好きな生徒の誤りは無意識に看過し、嫌ひな生徒の採點に當つては、不當に苛酷で屢々間違つて居ないものまで、間違つて居るやうに誤認して減點してゐる事實を發見したのである。かく客觀的事實でさへ、感情に支配されて見誤るものであるから、思想とか記憶とか言ふ主觀的方面の場合には、一層その批評や判斷の誤る事は寧ろ當然である。吾人の判斷には、先づかくあればよいとか、かくあつてほしいとか言ふ様な無意識的願望があり、その先入感情が主となつて物事の判斷をするのであるから、勢ひ偏頗にならざるを得ないのである。殊に感情の強い人の批評や判斷は、他人の批評であるよりも寧ろ自己の有する先入願望や、自分の有する缺點や偏見などの暴露である事が少くないのである。

感情には、交感神経の興奮に基づく緊張性の恐怖や忿怒や嫉妬などの感情と、主として迷走神経の興奮に基づく弛緩性の愛情との二種がある。前者の感情が發動する時は、心臓の鼓動を高め血を強め、従つて精力を浪費し心身に害を及ぼす。この種の感情の強い人はどんなに榮養をとつても

瘦せてゐるのはこれがためである。また競技などに臨む場合にも、餘り感情が勝ち過ぎて、一ヶ月も前から感情を尖らせて取越苦勞をしたり、試験などの場合においても緊張し過ぎる結果、精力を無益に消耗し、實際の場合に臨むと體力が續かないために不覺を取るやうな事がある。また感情家は事件の過ぎ去つた後まで、一ヶ月も二ヶ月も思ひ切らず、執念深く感情に固着するため、精力を無意味に消費しその結果神経衰弱となり、不眠症に襲はれたり、病氣になつたりする事さへある。

### 感情の種類

感情を大別すると、前述のやうに緊張性のものと、弛緩性のものがある。更に感情はその由つて來る刺激の如何によつて六つに分類する事が出来る。第一は生理的感情である。この感情は内臟諸機關の生理的刺激に基因して起る感情である。例へば息苦しい時の感じや、饑餓、疲勞、退屈などの諸感情はこの部類に屬する。この生理的感情は最も早くから現はれるものであつて、初生兒の感情の大部分は、生理的感情であると言つても差支へない。第二は本能感情と言つて、本能が外部から刺激を受ける場合に起る感情である。この感情は最も顯著であつて、普通感情と言ふのは本能感情を言ふのである。恐怖や忿怒や嫉妬などの諸感情は、この部類に屬し、生理的感情に次いで早く現はれる感情である。第三は感覺的感情である。この感情の刺激となるものは、五感から受ける主として美醜の感覺である。例へば事物の色彩や形態などに



對する、視感覺や、音調より受くる聽感覺による調和や不調和の美醜感、審美感情を言ふのである。第四は智的感情である。これは前記の諸感情より一層高尚な感情であつて、その刺戟となるものは、觀念や概念などのやうな智的要素である。例へば或る過去の思想的追憶や、また將來に對する豫想や、歴史や文學や哲學や、骨董品などに對する感情であつて、感情と言ふよりは寧ろ趣味と言つた方が適當な溫和な感情である。第五は道德感情である。これは對人的社會感情であつて、その刺戟は主として社會より受くる道德的標準や批評である。例へば社會的標準に戻つた場合に起る悔悟の念とか羞恥の情とか、また社會的賞讃を目的とする同情愛憐の感情等はこの部類に屬するのである。第六は宗教感情である。宗教感情の因つて起る刺戟は、神とか佛とか言ふやうな、人間以上の實在者から受けるものである。この感情は發達の順序から言へば最後に現はれるものであつて、敬虔とか、信仰とか、歸依などの諸感情がこれに屬する。

### 部分感情と全身感情

次に感情を更に部分感情と、全身感情との二つに分ける事が出来る。部分感情と言ふのは、部分的刺戟から起る感情である。例へば生理的感情について言へば、饑餓の感情の如きは、胃腸の部分的刺戟から起るものである。また感覺的感情の場合についても同様であつて、繪畫を見て美しいと感ずるのは、主として視覺から受ける部分的刺戟から受ける部分感情である。これに反して道德感情や、宗教感情などは、特定な内臟機關や、特殊の本能や、感覺などに限定される事なく、知情意の綜合的刺戟に對する反應である。従つてこれに伴つて起る感情もまた部分的でなくて全身性である。部分感情の場合には、同時に二つ以上の異つた感情が起る場合がある。例へば嫉みの感情と、憐みの感情が同時に、同一人の心に起るやうな事がある。また醜美の感情や快不快の感情が交々起る事もあり得るのである。然し全身感情の場合には決してさう言ふ事はあり得ないのである。寧ろ全身感情は相矛盾する部分感情が起つた場合に、これを統一する必要上起る感情であると言ふ事が出来るのである。前節において述べた六種類の感情は、始めの四つ即ち生理的感情、本能感情、感覺感情、智的感情は部分感情に屬し、道德感情と宗教感情とは全身感情に屬する。然し同じ部分感情にも種々の程度がある。例へば生理的感情は最も部分的に起り易く、智的感情は全身感情に非常に接近して居る。また全身感情の中でも、宗教感情は道德感情より高く、その綜合力統一力は道德感情より強度である。故に道德感情において統一が出来ず、なほ不安を感ずるやうな場合には、宗教感情によつて調和し、統一を計らなければならぬ。兒童の感情は部分感情が強く、従つてその生活には矛盾が多い。その發達の有様を見ると、先づ生理感情から、本能感情、智的感情へと進み、教養の結果道德感情や、宗教感情へと躍



進し、以て部分感情を制御して行くのである。

### 感情の分類

尙ほまた感情をその強弱の度や、その継続時間の長短によつて區別する事が出来る。弱い感情が比較的長く継続する場合には、これを氣分と言ひ、更に一層長年月に亘つて継続する時は、氣質と言つてゐる。普通氣分は一日乃至數日間継続し、生理的感情又は本能感情のやうな部分感情の支配を受ける事が多い。これに反して氣質は永続的であつて、多くの場合に智的感情や道德又は宗教感情などの支持を受けて居るものである。また感情をその強弱によつて區別すると、弱い感情を情緒と言ひ、強い感情を感動又は感情と言ひ、更に一層強くなると感激又は激情と言つてゐる。また感情を簡單感情と、複合感情とに區別する事が出来る。簡單感情と言ふのは字の如く、一つの感情のみの場合を言ひ、複合感情と言ふのは、種々の感情が複合して出來た複雑な感情を言ふのである。

## 第二十二章 感情はどうして起るか

### 原動力としての感情

人間の行動ほど千變萬化で興味深いものはない。彼は泣いたり、

笑つたり、歌つたり、戀したり、喧嘩をしたり、結婚式を挙げたり、葬式を営んだり、銀行を建てたり、家屋を建てて鐵柵を繞らしたり、戦争をしたり、慈善病院を建てたりするのである。よく人生を芝居の舞臺で踊る役者に譬へるが、見やうによつてはさう言はれぬ事もない。然しこの一見多種多様な行動も、仔細に檢すれば、その表現の形式こそ異れ、その中に終始一貫して流れて居る、或る一つの原動力のある事を知るのである。抑も人間を動かす原動力は何んであるかと言ふと、智識でもなければ理性でもなく、實に感情そのものである。英語で感情の事をエモーションと言ふ文字で現はして居る。エと言ふのは内から外に向つて發動する状態を現はし、モーションは活動とか行動とか言ふ意味の言葉である。即ち感情は人間の内から外に向つて働きかける原動力である。恰も機械に發動機があつて、動力を供給してこれを運轉させて居るやうに、感情と言ふ發動機があつて、人間を動かして行くのである。

### 感情の所在

かく人間の生活に密接な關係のある感情と言ふものはどうして起るのであるかと言ふ事は、前述の様に心理學においてはかなり六ヶ敷い問題であるが、順序として説明して置かねばならない。一體感情の起原は長い間の謎であつて今日でも全部解つたとは言へないのである。次に述べる感情の起原論は謂はゞ著者の説であつて、この方面に多少新しい光



明を與へ得るものであると考へてゐる。昔は人の原動力の所在を腹であると考へて居た。それで偉い人の事を、あの人は腹が大きいと言ひ、悪い人の事をあの人は腹が黒いなどと言つたものである。その後人の心は腹でなくて、胸にあるものであると考へ、人の心を胸三寸とか、胸中などと言ふ言葉で現はした。その後だん／＼上に昇つて今日では一般にこの原動力の所在を頭腦であると考へるやうになつた。然し人間の原動力の中心を身體の一部に限定する事は困難である。考へやうによつては、全身がこれに關與して居るとも言ふ事が出来る。殊に頭腦や心臓などと深い關係を有して居るのは當然であるが、その内でも最も緊密な關係を有するものは腹であると言つて差支へはない。古人が意志の所在を腹にあると斷定したのは、蓋し長い經驗から得た結果によるものである。

### 感情の起原及び定義

人間の腹が原動力である感情の發源地であると言はれるのは、腹部にエモーション感情の發動と密接な關係のある、交感神経が澤山ある事と、副腎と言ふ臓器があるからである。先づ副腎と感情との關係を述べて見よう。人間の腹は横隔膜によつて胸部と腹部に區別されて居る。その横隔膜の直下で、腎臓の上端に恰も腎臓の帽子のやうな形をした小さな三角形の臓器がある、これを副腎と言つてゐる。而して吾人が外部から刺戟を受けるか、または體內に何等かの衝動を感ずると、この副腎は直ちにアドレナリンと稱する液を分泌する。この

アドレナリンが肝臓を刺戟して、グリコゲンから葡萄糖を遊離し、これが心臓を経て血液の内に注ぎ込まれる。かくしてアドレナリンや葡萄糖が血液に混入すると、交感神経の機能が亢進し、種々な生理的變化を惹起することになる。例へば血管の攣縮を起し、その結果血圧が高まり、脈搏が増加し、その他唾液や胃液の分泌や呼吸の状態などにも、幾多の影響を與へるのである。かくの如く内外から起る刺戟のために、體內に起る生理的變化が神経に反響し、感覺される事によつて茲に感情が起るのである。著者は感情を定義して「感情とは身體の内外より來る刺戟によつて起る、生理的變化の内部感覺である」と言ふ。即ち感情は生理的變化を前提として起る内部感覺である。従つて生理的變化が起らない場合には、全然感情は起らないのである。内部感覺と言ふ言葉は外部感覺に對した言葉である。視覚や聽覺などの感覺は外部感覺であつて、直接外部の刺戟を反映するものであるが、感情は内部感覺であつて、直接外部の刺戟に由つて起るのでなくて、外部から受けた刺戟が、一旦生理的變化を起し、その生理的變化が感覺されて初めて感情となるのである。例へば子供が犬を見る場合、先づあれは犬だと言ふ事が視覚によつて感覺せられ、それが身體に何等かの生理的變化を與へると、その生理的變化が感覺されて初めて感情が起るのである。従つて子供が犬を見ても、何等生理的變化を伴はない場合には、感情は起らないのである。而して感情の強弱や種類は、



刺戟物の如何にあるよりも、その刺戟が如何なる生理的變化を起させるかによる。同一の犬を見て、或る子供は恐れ、或る子供は親しむのはこれがためである。

### 感情の個人差の原因

前述のやうに感情は主觀的であつて、人によつて各々その受ける感じを異にする。その原因には種々あるが先づ第一に、感情の強弱は神経の素質如何によつて生ずる。或る人は亢奮し易くて感受性に富み、或る人は鈍感でスローモーションとなるのは、その人の神経や細胞組織の感受性の難易に由るのである。次に感情の種類は、刺戟の起る神経系統の如何に由つて生ずる。元來、感情は大體その種類に従つて、亢奮を受ける神経系統を異にし、又、その結果として起る生理的變化を異にするものである。例へば前章において述べた生理的感情について言へば、それは主として脊髄の外錐體道や、これに連る交感神経に關係し、また智的感情は大脳皮質や錐體道などに深い關係をもつて居るのである。また同じ本能感情でも恐怖の感情は交感神経の亢奮に關係を有し、愛情は迷走神経や副交感神経に關聯して起るのである。處が同じ感覺的刺戟が、人によつて異つた生理的刺戟となり、前述の犬の例のやうに、同じ犬を見ても或る人は交感神経の亢奮を受けて恐怖を感じ、或る人は迷走神経の亢奮を感じて、親しみを覺え愛情を感じるのは何故かと言ふと、それは全く過去の經驗に基づいてゐる。普通の場

合には兒童は犬に對する好奇心はあるが、これと言ふ先入感情を有して居るものではない。従つて犬を見ても必ずしも怖いとか可愛いとか言ふ一定の感じは起らないのである。處が過去において犬に咬まれたとか、ひどく吠えられたとか言ふ經驗をもつ場合には、それに相當した生理的變化を伴ひ、恐怖心を起す事となる。これが原因となつて、その子供が再び同様な犬を見る場合には恐怖を感じ、或るやうになるのである。かく過去の經驗の結果或る事物(客觀的經驗)と或る感情(主觀的經驗)が結びつく事を、感情の條件化と言ふ(第二十四章参照)。上述のやうな譯で感情の個人差は、各個々人の感情が、異つた條件によつて結びつけられるためにも起り得るのである。

### 感情行動化と激化

恐怖や忿怒のやうな、緊張性感情は、主として副腎の分泌物たるアドレナリンが直接間接に交感神経に作用し、その結果、身體及び内臟諸機關に起る、生理的變化の内部感覺の一種であることは既に述べた所であるが、一度感情が發動し、それが原動力となつて行動化されると、内部に起る生理的變化は相關的に激成され、その結果、感情が愈々激しくなる。例へば目前に猛犬が現はれた場合に、恐怖を感じて逃げたとすると、逃げ出したと言ふ行動によつて、呼吸や血液や脈搏などの状態に甚だしい變化が起り、その結果愈々恐怖感情が激しくなるのである。ジエムスやランゲなどに言はせると、人の感情は行動に由つて起るもの



である、と言つてゐる。即ち前述の猛犬の場合について言へば、怖いから逃げたのではなくて、逃げたから怖いのだと言ふのである。この説をそのまま肯定する事は出来ないが、然しその中には多少の眞理を含んで居る。即ち犬を見て怖いから逃げるのであるが、更に逃げ出したために一層怖くなるのは事實である。忿怒の感情にしても同様であつて、忿怒の結果手出しでもして、殴り合ひを始めるやうな場合には、憤懣の情が愈々激しくなり、遂には心にもない傷害を他人に與へたりする事がある。故に感情の激化を防ぐには成可く直接行動をさけ、已むを得ない場合には他に適當なはけ口を見出す事が必要である。

### 感情緩和の方法

前述の様に、感情は行動化に由つて激成される事も事實であるが、同時に感情は行動に移される事によつて緩和される事もある。人間を自動車に譬へて見れば、感情はガソリンのやうなものである。即ち自動車を運轉してガソリンを多量に消費すると車は自然に止まつて仕舞ふが、それと同じやうに人間の感情が發動して精力を消費すると、自然に緊張が去つて感情が緩和してくるものである。例へば戀愛が結婚によつて稀薄となり、忿怒の情が起つた時に、ガラス瓶を投げつけて割つたり、また風船玉を踏み潰したりすると、その感情が緩和するのはそれがためである。故に感情の強い子供に、過激な労働を課して、その精力を消費さ

せる事によつて、或る程度までその感情を減殺する事が出来るものである。北米マサチューセツト州の片田舎に腕白盛りの少年が居つた。頗る精力旺盛の少年で、學校に行つては喧嘩ばかりして居るので、周囲の困り者であり憎まれ者であつた。或る日彼の母が學校に呼び出されて、種々と相談したが、別に取り立てて悪意をもつて居る少年でもないと言ふ譯で、試験的に毎朝學校に行く前に、タンクの水を汲ませる事にした。所がその結果、少年の腕白が全く直り、喧嘩が止み級中の模範少年となつたと言ふ事である。

### 感情の指導

一般的に言へば感情は行動への準備である。即ち忿怒の感情は鬭争への準備であり、恐怖は逃走に必要な缺く可からざる豫備行爲である。若し忿怒の感情に缺くる處があれば、争鬭の結果勝利を得る事が不可能であり、恐怖の感情が強く起れば逃走が敏活に行はれ、身體を危害より救ふ事が出来るのである。かく感情は行爲の準備であり、行爲は感情を強めると言ふやうな譯で、行爲と感情との間には密接な相關關係が存在してゐる。この事實は家庭教育において、感情の指導上多くの暗示を與へるものである。子女の生活を樹木に譬へて見れば、感情は根であり、行爲や努力は感情と言ふ根に生ひたつ幹であり、立身出世は花であり果實である。感情のない行爲は恰も根のない切花にも等しく、到底果實を結ぶ事は出来ない。また感情が根幹で



あり、行爲の原動力であるとすれば、これをせきとめる事は不可能であり、有害である。恰も筍が春の陽氣にはぐくまれて芽を出さうとする時瓦や石で壓迫されると、曲つて生え出すやうに、激潮たる感情のみなきつて居る、青春の子女の感激に富んだ心を抑へつけると、その結果、彼等の性格はひねくれ、身體は虚弱となり、感情は病的となる。若し強ひて壓迫すれば、根を斷たれた草木の如くに枯死して仕舞ふのである。故に既に屢々述べたやうに、青春の感情は適當の方法で捌け口を與へてやらなければならぬ。これに反して感興の少しも起らない事をやらせるのもまた不自然である。これは恰も根のない挿木に花を咲かせ、實を結ばせようとする類で、勞多くして効が少い。然もかゝる不自然が今日、學校においても、家庭においても盛んに行はれて居る状態である。その結果、子女は學業を怠り、父母、教師に反抗し、神經衰弱になるのである。何事にもあれ或る事を勉強させ努力させようとするには、先づその事に對する興味を湧かせ、感情を起させる事が先決問題である。馬を河に入れても必ずしも水を吞ませる事は出来ない。それと同じ様に、子供を學校に入れさへすれば勉強して偉くなるものとは言へない。従つて父母や教師の第一の仕事は、何を教へるかと言ふ事ではなくて、如何なる興味を起させ、如何なる感情を兒童の心に打込むかと言ふ事にあるのである。私達が兒童に數學や修身を教へる時に、私達は單に數學や修身を教へる丈でなく、

數學プラス感情、修身プラス感情を與へようとするのである。而してこの場合に教へる數學や修身の事實より、これと共に與へる感情や興味の如何がより大切なのである。如何に立派な事實を教へても、これに對する正しい感情と興味とが與へなければそれは失敗である。

### 感情の表出

感情は身體内部の生理的變化を起す丈でなく、外部にも必ずそれに相當した身體的表出を伴ふものである。例へば羞恥の感情が起つた場合には、顔面の神經が刺戟されて、毛細管が充血し、所謂赤面を呈し、恐怖の場合には、反對に毛細管の緊縮を來たして、血液の循環を悪くし、その結果顔色が蒼白となつたり、悪寒を催したり、冷汗を出したりする。臆病な人の手足が冷たいのはこれがためである。それと同時に、身體より熱の發散を防ぐために、毛孔を閉鎖させるので、立毛筋が緊縮し、毛孔が立つて皮膚が所謂鳥肌となる。また忿怒の場合にも、ほゞ同様の表出を見る事が出来るのである。昔の物語などの中に、怒髪天を衝く、と言ふやうなことが書いてあるが、これは強ち無實の事ではない。感情はまた消化液——唾液、胃液、腸液——の分泌に強い影響を與へる。兒童が怒つて居る時にX光線をもつて胃を透視して見ると、胃液の分泌が著しく減少し、これに反して平靜な時には、胃液の増加がはつきりと見えると言ふ事である。兒童が怒つた後に渴を訴へるのは、唾液の分泌が減少して口が乾くからである。眼球もまた



感情によつて變化を與へられるものである。例へば性愛の感情が起ると、眼球に光輝が加はり、潤ひを増し、瞳孔が收縮して細くなる。よく小説の文句に、愛人の眼を形容して「星の如く輝き、三日月の如く細く潤つてゐる」などと描寫するが、萬更の作り事ではない。これに反して恐怖や忿怒の場合には、涙腺の分泌が減少し、瞳孔が擴大するのである。驚いた場合を誇張して、眼を丸くして驚いたとか、また背を裂いて怒つたとか、眼の色を變へてどうしたとか言ふのは、この邊の消息を言ふのである。また恐怖や忿怒の際には、氣管支が擴大して、呼吸が荒くなり、性愛の場合には反對に氣管支が細くなり、呼吸を殺すのである。よく亂暴な人間の事を、鼻息の荒い奴だなどと言ふのはこれである。かく喜怒哀樂その時々感情は、必ず何等かの身體的表出を伴ふものであるから、父母は注意して兒童の表情を觀察し、その感情の動靜を察知し、これを適當に指導しなければならぬ。次章で此の感情の指導について稍々詳細に述べて見たい。

## 第二十三章 感情の昇華について

### 感情教育の重要性

人間生活の根本が感情であるとするれば、教育の根本はその感情の教導

でなくてはならない。感情の教導は從來情操の教育と言つて、智育體育と共に教育の一部分のやうに考へられて居つたが、これは所謂認識不足であると言つて過言ない。感情の教導は單なる情操の教育でなくて、智育にも體育にも深い關係をもつて居るのである。不良少年少女は勿論、學業の不良兒童も、多くは智能の問題であるよりは、感情の纏れがその原因となつてゐる。即ち頭が悪いから學業が不良だと言ふのでなく、不平不満があるから、精神の集中が出来なくなり、その結果勉強に身が入らなくなるのである。従つて彼等の學業を改善してやるには、彼等と父母や兄弟や、教師やお友達などとの間にわだかまつてゐる、嫉妬心や恐怖心などの感情を平常に復してやるやうにする事が大切である。また體育についても同様であつて、健康な體の基礎は、正しい感情の上に立たなければならぬ。如何に運動をしても、心配をしたり思ひ惱んだりして居つては健康を保つことは出来ないのである。オリンピックの選手が早逝したり、世界的庭球選手が自殺したりするのはそれがためである。かく考へてくると感情の教導と言ふ事が、非常に重要なものとなつてくる。然も感情の教導は決して簡單に行くものではない。從來この方面を閑却したと言ふよりも、寧ろ無視して居つたかの觀があるのは誠に遺憾である。遲蒔ながら將來は一身この方面の開拓に努力して行きたいものである。



## 感情發生の順序

感情を指導するには、兒童の感情の發生状態を知らなければならぬ。申すまでもなく、成人の感情と兒童の感情とは異つてゐる。また同じ兒童でも、その年齢に従つて時々刻々に感情は成長し變化して行くのである。先づ初生兒の感情を見ると、非常に漠然として居つて、その表出が不明瞭である。既に述べたやうに最も早く現はれるものは、主として生理的感情である。例へば饑餓に對する不快の感情や、退屈や苦痛などに對する感情であつて、生後直ちに現はれる。元來、兒童は快感より不快や苦痛に對する感覺の方が早く且つ強く現はれ、愛情のやうな弛緩性の感情は、恐怖や忿怒の如き緊張性感情の發動より遅くまた弱いのである。嬰兒は生後數日たつと、恐怖に對する感情を認める事が出来るやうになり、大きな聲がすると驚いて身を慄はせ、不安や寂寞になると泣き叫ぶのを見る。忿怒の感情は稍々遅れて現はれるやうである。更に生後二三ヶ月たつと、快樂の感情を表現することが出来るやうになる。生後十ヶ月前後の兒童はお母さんや、兄や姉などに對しては嬉し相な笑顔をし、見知らない人に對しては、はにかんだり恐れたりする。生後滿一ヶ年頃になると、殆んど總ての本能感情が強く現はれて來て、その生活が本能的となる。滿二才前後の兒童は、自我の發見と共に、嫉妬心と言ふ新しい感情を得る事になる。この頃から兒童の生活はだん／＼複雑となり、滿三才頃になると、一方においては友

に對する友愛の情を現はすと同時に、他方において嫌ひなものに對しては強い敵愾心を感じるやうになる。彼等は一面において、小鳥や犬猫などの家畜を非常に愛撫するかと思ふと、他面においては蟲や小動物などを手ひどく虐待し、慘忍性を示すのである。幼兒期及び乳兒期の感情を一言で言へば、簡單感情であり、部分感情であつて、感情と感情との間に統整もなく、衝動的であり、且つ幼稚である。

五六才から七八才になると感覺が次第に發達し、感覺的色彩を帯び、音楽や繪畫などの美醜に對する審美感情が現はれてくる。また幼兒期に現はれた本能感情も、この頃になると一層強くなるが、一方においては羞恥心などの道德(社會)感情が現はれ始めるために、本能と本能との間に徐々に統整が出來てくるのである。更に少年少女期の終り頃から、青年期の始めにかけて、智的感情が著しく發達し、詩や思想などに對する藝術的な感興が湧くやうになり、この頃になると誰も思想家となり、詩人となるのである。また生殖腺のホルモンの分泌に伴うて、性愛と言ふ感情が新しく加はつてくる。かくして彼等の感情は愈々複雑なものとなり、所謂多情多感となるのである。青年男女ほど感じ易いものはない。彼等は木の葉が落ちたと言つて笑ひ、鳥が飛んだと言つて泣き、事毎に感情をいら立たせる。その結果彼等は惱みを感じ、さまざまな煩悶を経験する。これと同時に、この



悩みや苦しみに並行して、これに統整を與へ解決を與へ、慰めを與へるための宗教的感情も芽生えてくるのである。

### 現代青年の悩み

前述のやうに青少年は、満ち溢れるやうな感情をもつて居るのである。而して彼等の指導は、この感情に適當な捌け口を與へてやる事である。今日唱へられて居る思想の善導も、青年の訓練も、その重要點はこゝにあるのではあるまいか。機械文明の發達、文化の進歩と共に、近代人はそのあり餘る感情を、思ふやうに發散させる事が出来なくなつて來た。これが現代青年の悩みの根本に横はつて居る問題なのである。原始人は少しの物資を得るにも、川に釣り、山に狩り、思ふ存分山野を跋渉し、時には外敵の襲撃に曝らされ、或は恐れ、或は闘ひ、これによつて狩獵本能や恐怖や、争鬪本能や好奇心などを満足させることが出来たのである。處が文明は吾人の生活より不安を奪ひ去ると同時に、興味をも奪ひ去つた。電話一つかければ、居ながらにして肉も魚も衣服も得られる世の中となり、電車や自動車が發達して歩行の必要は少なくなり、家庭でも學校でも社會でも、秩序と靜肅とのみが要求される時代となつた。現代社會と青年の生活とが、びつたりこないのは、こゝに原因があるのである。そこで強い者は反逆し、弱い者は神經衰弱になる。勞働争議や、共產主義運動などにしても、單なる經濟問題や、思想問題と

のみ見る事は出来ない。その背後に現代の青年男女が無意識的に欲求してゐる、争鬪心や、冒險心を煽る強い魅力がひそんでゐるからである。

### 感情指導の原則

次に感情指導の原則とも言ふ可き事について述べて見よう。人間が感情の動物であるからと言つても、感情を勝手氣儘に満足させる事は出来ない。

感情には好ましい感情もあれば、好ましくないものもある。従つて感情を指導する上において大切なのは、善い感情を發達させ、悪い感情を發達させないやうにする事である。さうするにはどうすればよいかと言へば、發達させようとする感情に刺戟を與へてやり、發達させまいとする感情を刺戟しないやうに注意する事が必要である。手でも足でも使へば太くなり發達するやうに、感情でも同様であつて、刺戟を與へれば成長發達するのである。例へば母性愛のやうな感情は、最も好ましい感情の一つであるが、これを發達させるには、母子間の愛情が大切である事は勿論であるが、同時に人形を與へるとか、小鳥や家畜などの愛護をさせると言つたやうな刺戟によつて、その發達を助成し、愛憐の情や同情の念を養ふ事が出来るのである。これに反して嫉妬心などのやうな、好ましくない感情は刺戟しないやうに注意する事が肝腎である。それがためには子供を公平に取り扱つてやり、お菓子を與へるにも褒めるにも公平を期し、假初めにも偏頗な取扱ひをしてはならない。



かくする事に由つて兒童の嫉妬心を全然なくする事は出来ないまでも、これを發達させないやうにする事は出来るのである。

感情の指導上心得て置く可き第二の點は、個人差を成る可く少なくする事である。感情は主觀的であつて、個人によつて各自相違のある事は既に述べた所である。さうかと言つて餘り違つて居つては共同生活に不便である。人の悲しがる時には同情し、人の喜ぶ時には共に喜ぶやうな感情をもつて居る事が、圓滿なる社會生活にも、個人の幸福のためにも必要なのである。故に感情教育においては、出来る丈けこの個人差を少くし、共通な感情を養成する事を努めなければならない。それがためには、兒童をして團體生活に親ましめ、共通な経験をさせる様に指導しなければならない。近來學校教育においても、社會教育においても、團體的訓練が重んぜられるやうになつて來たが、家庭教育においては、今でも家風や傳統に囚はれ、やれ自分の家は士族であるとか、資産があるとか言つて、徒に自家の特異性を高調し、兒童に階級意識を與へ、有産者は無産者を蔑視し、無産者は有産者を敵視したりする傾向があるのは、聊か時代錯誤の感があるではないか。

### 感情制御の方法

感情を緩和し、これを適當に指導するには、感情の種類によつて各々異つた手段をとらなければならない。例へば生理的感情の場合について見れば、

饑餓から來る不快不満の感情を満足させるには、何より先きに食物を與へる事が肝腎であり、疲勞倦怠の感情に對しては、休息睡眠が第一に必要である。また恐怖や忿怒や嫉妬心の如き緊張性本能感情を緩和させるには、外部より受ける刺激から遠ざかる事も一方法であるが、また體内的には下腹に力を入れて、腹部を壓迫し、交感神経や副腎のアドレナリンの分泌機能を制限する事も一方法である。昔から丹田と言つて、下腹部に力を入れて膽力を鍊り、氣を落付けて精神修養をしたのは、上述の理由に基いたものである。大抵の強い感情でも十分間も丹田に力を入れて居ると、自然に冷靜に復してくる。故に何か重大な事を計畫し、六ヶ敷い事を考へる場合には、先づ下腹部を壓迫してから始めると、頭部の血が下り、頭腦が明晰となつてよく考へられる様になる。昔の人は丹田に力を入れて腹で考へたが、今の人は智慧を以つて、何事も頭丈けで考へる傾向がある。一時非常に流行した岡田式靜坐法なども同じ原理に基くものであつて、感情の制御に由る一種の精神統一の手段に外ならない。

### 感情の昇華作用

人間の本能と下等動物の本能とを比較して見ると、種々な點において異つて居る。人間の本能を満足させる目的物や手段を見ると、下等動物の場合におけるよりも遙かに範圍が廣い。例へば食慾にしても、人間の食慾を満たすための食物は、穀物



は勿論魚類、肉類、野菜類等多種多様に亘つてゐる。また料理にしても、日本料理もあれば、支那料理もあり、西洋料理もある。彼は燕の巢も食へば、卵の腐つたのも食ひ、筍も食ふと言ふ工合である。これに反して下等動物になるほど、その範圍が制限され、或る動物は或る食物、他の動物は他の食物と言ふ風に限られて狭くなるが、人間の場合には取捨選擇の範圍が非常に廣い譯である。感情についても同様であつて、動物においては感情を満たす手段は狭いが、人間の感情を満たすには色々な方法や手段がある。例へば忿怒の感情を満足させる手段にしても、戦争もあり、喧嘩もあり、また自分の内にある罪惡と戦ふ事によつても、スポーツによつて相争ふ事によつても、社會惡と闘ひつゝ社會改良に従事する事によつても満足させる事が出来るのである。かく人間の感情を満足させる手段は非常に廣汎に亘つて居るのであるから、兒童の感情を指導して行くには、多くの手段の中から特に社會のためにも、自分のためにも有意義な手段を選んで、これを満足させる事が肝要である。前記の忿怒の例について言へば、喧嘩や戦争は成る可く避けて、スポーツとか、社會事業などに向けてやるのである。これはたゞに忿怒ばかりでなく、性愛でも、嫉妬でも同様な工夫をすることが出来る。かく感情満足的手段を適宜に選擇し、無意義な事や有害の行爲を避けて、社會的有意義な方面に向けてやる事を、感情の淨化又昇華作用サブライムションと言つて居る。次に感情の昇華手段の主

なるものを述べて見る。

### 昇華の手段としての藝術

兒童や青少年の感情を満足させ、昇華させる方法として、第一に藝術に指を屈する。藝術の中には繪畫と音樂とがある。更に

文學の一門がある。吾人は先づ繪畫について考へて見る。

繪畫は單なる自然の描寫ではなく、作者自身の自然に對する感情や理想の發表であると言ふ事が出来る。また青年男女は現實の世界において發表する事を許されない、種々なイデオロギイを繪畫を通じて自由に表現する。こゝに繪畫と感情との深い因縁がある。繪畫は實にその人自身の現はれであると言ふ事が出来る。この事實は幼少の頃の繪を見てもよく分るのである。人形が欲しい時には人形の繪を畫き、然も自分の好きな顔や形に仕上げ、自分の好きな模様の着物を着せ、電車の欲しい子供は電車を畫き、自動車が見れば自動車の繪を畫くのである。また篤信の佛教徒が釋尊の像を物したり、敬虔な基督教徒は聖母マリヤを畫いて、その信仰生活の感激を現はすのである。かく成年者も子供も、繪によつて感情を現はし、慰めを得る心に變りはない。故に家庭教育においても、今後一層繪畫をとり入れ、一面においては繪畫を通じて兒童の感情の方向を知り、他面において繪畫を通じて、兒童の感情を自由に自然に發表させるやうにしたいものである。



## 音楽

次に音楽について考へて見よう。音楽にも繪畫と同じく、或はそれ以上に私達の心の奥底に觸れるものがある。陣太鼓の音を聞けば、戰鬪的の氣分が起り、葬式のドラの音を聞けば、自然に哀愁の情が催してくる。音楽ほど人間の感情を動かすものはない。また人が樂を奏で、歌を歌つて居る時ほど楽しいことはない。なぜ音楽がかく人の感情を動かすものであるかと言ふと、元來人間には血液の循環にしても、呼吸にしても、體全體がそれ／＼一種のテンポ（速度）とりズム（音律）をもつて運行して居るのである。そこで一定の樂が奏でられると、そのリズムやテンポが吾人のもつて居るリズムやテンポを誘導して、これに變化を與へ、その變化に伴ふ生理的變化をも惹起し、その生理的變化が内部感覺に上つて感覺されて初めて感情となるのである。殊に血液の運行が感情に最も深い關係を有して居るやうである。脈搏は平均一分間七十二拍内であるが、音楽のテンポも大體においてメトロノーム（拍節器）七十二拍内外のものが平常の感情を起し、それ以上早い音楽になると、脈搏もそれにつれて多少亢進の傾向を示して急迫の感を起し、それ以下のテンポになると脈搏が緩慢に傾いて、靜寂な感情を與へるのである。その他メロデーの如何によつて種々の感情を誘發する。かく音楽は人間の生活に深い影響を與へるものであつて、私達が流行歌を歌ふか、或は上品な歌を歌ふかによつて、我々の感情や性格に大なる感化影響を及ぼすので

ある。從來の日本の家庭は、歐米の家庭に比較すると音楽を利用する事が遙に少ない。將來の家庭はこの點に深い考慮を拂ふ必要はあるまいか。家庭を修養の樂園とするためには、もつと／＼高尚な音楽が家庭に取り入れられねばならない。而してそのテンポもメロデーも、その時その人の場合に應じて選擇されなければならない。幼兒を眠らせる時の歌と、目を覺ませる時の歌とは自から異つて居らねばならない筈である。

## 遊戯

よく現代人は機械を作つて、却つて機械の奴隸となつたと言ははれて居るが、確に我が日常生活が機械文明の壓迫を受けて單調となり、倦怠を生じて居ることは否めない。この疲れきつた我々の生活に、慰安を與へるものが遊戯である。遊戯は鬱勃として居る感情のよきはけ口である。人が我を忘れて精一ばいに遊んでゐる時ほど楽しい時はない。近頃文教の當局を始め社會一般がこの點に目覺めて、公園を作つたり、スポーツを奨励したりして居る事は、誠に喜ばしい現象である。遊戯はたゞに感情にはけ口を與へるばかりでなく、協同一致の精神を養ひ、德育の立場から見ても望ましいものである。これを各々の遊戯について見ると、マ、こと遊びは社交心を満足させ、或る程度まで食慾にも満足を與へ、人形遊びは母性愛を發動させ、愛憐の情を養成し、鬼ごとは兒童の冒險心や競争心などに満足を與へ、野球は青年の名譽心や競争心を飽かしめ、



協同心を培養し、キャンプ生活や登山などは、現代人に原始生活を味はしめ、文明の羈絆より吾人を解放し、様々な快感を與へるものである。前にも述べた様に、遊ぶと言ふ事は決して怠ける事ではない。人間は長幼男女の別なしに時々遊ばなくては生きて行かないものである。たゞ問題は何をして遊ぶかと言ふ事と、どこで遊ぶかと言ふ事と、誰と遊ぶかと言ふ三つである。何をして遊ぶかと言ふ事が重要な事は申すまでもないが、どこで遊ぶかと言ふ事がまた實に大切である。同じ遊ぶのでも家庭で遊ぶのと、街路で遊ぶのと、クラブで遊ぶのと、カフェーで遊ぶのとでは、その教育價值において雲泥の差がある。トランプや麻雀も、家庭で親子兄弟同志でやれば、必ずしも悪いものではない。これに反してどんなに高尚な遊戯でも、家を外にして遊び歩く事はよくない。家庭が遊びの庭であり、父母兄弟が遊び仲間である場合にあつては、遊戯は感情の昇華の手段として百パーセント有効である。

### 芝居と小説

芝居を見たり小説を読んだりする事も、また感情の轉向昇華の一方法である。よく女は泣くために芝居を見に行くと言はれてゐる。そんな事は馬鹿々々しいと言へばそれまでだが、女性の心理を深く知れば必ずしも馬鹿々々しくはない。女性にとつて見れば、自分と同じ様な運命の下に虐げられて居る弱者に對して注ぐ涙は、やがて自分自身を憐れむ涙

であり、慰安でもあるのである。また讀書が我々の感情に満足を與へる事は今更申すまでもない。然しどんな書物が必要であるかと言ふ事は、年齢により、その人々の心の情態によつて同一ではない。幼兒は架空的なお伽噺を喜び、兒童は冒険記や怪談などに強く心を牽かれる。また少年少女等は偉人の傳記や歴史的な讀物を耽讀し、青年男女は小説を多讀する。然し芝居や小説に向つて感情のはけ口を求めるのは、餘り望ましいことではないから、出来れば避けた方がよい。かゝる傾向を示すのは、感情のどこかに多少病的な所のある證據であるから、父母はよくその原因を究め、より健全な遊戯や藝術に、彼等の興味を仕向けてやらなければならぬ。

### 宗教

最後に藝術でも、スポーツでも癒やす事の出来ない苦しみ、悩みの感情に豊かな慰安を與へ、これを人間の世界から天上の世界へと引上げてくれるものは、宗教である。シユライエルマツヘルは、宗教の本質は感情だと言つて居るが、味ふ可き言葉である。勿論宗教は單なる主觀の所産ではなく、飽くまで實在に對する態度であるが、人間に關する限り信仰と感情とを離して考へる事は出来ない。宗教が人間の心に訴へる所のあるのは、宗教が感情に深い關係を有し、これを満足してくれるからである。また宗教には宗教音楽があり、優雅で嚴肅な儀式があり、また無限の愛や恐怖の對象となる實在者があつて、それ／＼吾等の感情の對象となつて居る。宗教によ



つて、よしそれがこの世で満足する事が出来ずとも、必ずや來世において満たす事が出来ると言ふ確信が與へられ、その信仰が發しては慈善となり、人類愛となり敬神となり、永生の希望となるのである。宗教ほど吾人の感情を満足させ、昇華させるものはない。然し一口に宗教と言つても一律には行かない。或る宗教は智的に傾き、或る宗教は感情的である。同じ感情的宗教の中にも恐怖の感情に訴へる宗教もあり、愛の感情を高調する宗教もある。また中には全然迷信的なものもあつて、妖怪的存在を信じたり、グロテスクな儀式に由つて感情を満足させたりするものもある。精神衛生の見地から見れば、恐怖や忿怒などの緊張性の感情に訴へるものより、愛情の如き弛緩性の感情に訴へるやうな宗教を信仰する事が望ましいのである。

## 第二十四章 感情の固着、移動及び條件化

### 感情の固着とその結果

感情の固着と言ふ言葉は比較的新しい言葉である。これは兒童の感情が幼少の頃或る特定の人や、特種な事物に固着し停頓して、その儘進歩も發達もしないで、成長の後まで残存する状態を言ふのである。感情が何物かに固着し

て居る場合には、その感情が自由に發動する事が出来ないため未發達の儘残される事は勿論、その行爲までも子供らしくなり、物事の考へもまた幼稚であり、變則となる事を免れないものである。感情固着が行爲となつて現はれる場合に、外形から見ると習慣的行爲と類似して居つて、一見區別のつけ難いものであるが、その内容においては非常に異つて居る。即ち普通或る行爲が習慣となるためには、その行爲を何度も繰返せばよいのである。然るに感情が他の人や事物に固着して、一定の行爲となるには、必ずしも行爲を反復する必要はない。それはかゝる行爲の背後には強い感情が働いて居るために、その行爲が一種の強制的な力をもつて吾人に迫つてくるからである。若し前者を單に習慣と見るならば、後者は習癖と言つた方が適當である。悪い習慣があつた場合にこれを直してやる事も可なり困難であるが、感情の固着からくる習癖的行爲や思想を矯正する事は一層難事である。例へば幼少の頃何かの事で、子供の恐怖感情がお父さんに固着して仕舞ふと、その後少し位父が優しくしてくれても、中々この感情を緩和する事が出来ないので、それが一生涯つき纏ひ、成長するに従つて忿怒の感情をも交へるやうになり、父に對する反抗となり、左傾思想にかぶれたりする事がある。かゝる場合にこれを改めさせる事は決して容易な事ではない。從來思想は思想で導けと言つて、彼の理念に訴へたり、思想的論争を試みたりしたが餘り効果はなかつた。なぜなれば



彼の反抗心も左傾思想も、單なる行爲や思想ではなくて、その背後には強い感情がわだかまつてゐるからである。故に彼等の思想を善導するには、先づその根柢に横はつて居る固着感情を解消し、矯正してやらなければだめである。

### 感情固着の原因

感情が固着する原因には種々ある。先づ第一に、自己の欲求や感情が満たされないと感じた感情の固着が起るのである。例へば幼児の頃もつて居たお菓子に對する強い欲求が、家が貧しかつたために満足する事が出来なかつたり、繼母の虐待を受けて思ふ存分食ふ事が出来なかつたりすると、そのまゝお菓子に固着して仕舞つて、一生お菓子に對する強い魅力を感じるのみか、總ての食物にまでこの感情が固着して、彼が青年となり、大人となり、自から働いて収入を得るやうになると、愈々飲食に耽り、それがため健康を害し身を過るやうになる事も少くない。また強い感情を特定の人や事物について経験した場合にも、感情の固着を起す事がある。例へば巡査に叱られたり威かされたりした場合に、兒童が強い恐怖心を経験すると、その恐怖心が巡査に固着し、遂にそれが性となつて一生巡査を怖がつたり、また幼少の頃犬に吠えられたり、咬まれたりした経験があると、恐怖心が犬に固着して成長の後までも犬を怖れるやうになるものである。

前にも述べたやうに感情の固着が起ると、その方面に關係ある兒童の思想や行爲が停頓して、進歩しなくなる。これを前述の例について見ると、兒童の欲求が食物に強く固着すると、自然に利己的となり、四才になつても五才になつても、長じて青少年女期に達しても相變らず利己的で、食物に對して子供らしい振舞をなし、一向進歩發達をしないのである。かゝる場合に父や母が子供の自我的傾向を矯正する目的で、無理矢理に食べ物を人に分けてやらせたりすると、却つて食物に對する彼等の感情が強く固着して、愈々自我的となり、非社交的の性格を現はし、また吝嗇となつて反對の結果を生む事が少くないから注意しなければならない。

### 險の母

感情の固着で最も普通に起るものは、母を對象とする場合である。母を對象とする感情の固着は多くは愛情であり、それにも二つの場合がある。その一つは母が子供を愛し過ぎるために起る場合である。これは屢々母一人子一人と言ふ様な家庭や、夫婦間の愛情に不満を感じ、その缺陷を満たすために父母の一方が子女を溺愛する場合などに起るのである。子女の愛情が母に固着して仕舞ふと、母以外の人に愛を感じなくなり、お友達が出来ないのみか、依頼心が強く、成長の後も結婚を嫌ひ、言動もどことなく子供らしく、不幸な結果を招くことが少くない。第二の場合は、反對に、幼い時に母と別れたり、母が病氣だつたりして、母の愛を充分味ふ事が



出来なかつたために起る場合である。長谷川某と言ふ小説家が四才の頃に愛する母と生別し、爾來四十餘年の間一日も母の佛も忘れる事が出来なく、遂にその愛着の情は、別れた母に固着し、一念が凝つて「喰の母」と言ふ小説となつたと言ふ事である。また有名な畫聖レオナルド・ダ・ヴィンチの物語なども、愛情を母に固着させた好き實例である。レオナルドは北部伊太利の或る湖畔の一寒村に呱呱の聲をあげた。彼は私生兒であつたと言ふ事である、従つて彼の幼時は全く母の手一つで育てられた。處がレオナルドがまだ四才の頃、生母は或る家庭的事情のために愛兒を祖母に托して、遠く旅立ち、その後彼は愛する母に一生涯再會の機會がなかつた。後に残された幼きレオナルドは、母戀しさに冷たい淋しいその日／＼を送り、母の愛に飢えて、臍ろに憶えてゐたその面影を一生涯忘れることが出来なかつたのである。かくして彼の愛は完全に母に固着し、四才の時生別した母を慕ひつゝ、生涯を獨身で通した。かのモナ・リザと言ふ世界的名畫は、彼が幾十年の間喰に宿して居つた、母の似顔だと言はれて居る。

### 感情の移動

次に感情の移動と言ふ事について考へて見よう。元來感情の固着は愛情に限られたものではなく、同様の條件の下にあつては、恐怖心でも嫉妬心でも總ての感情が固着して病的となるのである。殊に恐怖や憎悪の感情は最も固着し易いものである。假りに

幼少の頃何かの事で髭の生えた巡査に恐怖の感情が固着すると、その後彼は、その巡査だけでなく彼れに似た總ての人を怖がり、遂には巡査のサーベルまで恐れるやうになるのである。かく感情がその原因たる最初の對象から、離れて他のものに移つて行く事を感情の移動と言つて居る。感情の移動は屢々際限もなく發展するものである。例へば前述の髭の巡査に恐怖感情が固着した場合、この子供が小學校に入學した後、髭の生えた先生が居たとすると、彼の恐怖心がその教師に移動し、その先生を恐れるのみか、その教師の教へる數學なり、英語なりに移動し、その結果學業成績が不良になるのである。また小さい時に、子守に無理な取り扱ひを受けたとすると、その子供の憎悪心がその子守に固着するばかりでなく、神經質の子供になると、その子守の着てゐる白いエプロンまで嫌ひになり、更に進むと白いエプロンを着た人は、誰れ彼れの差別なく憎悪するやうになり、また極端に神經質の子供になると、その感情がお辨當にまで移動して、白いエプロンをかけた婦人の儘へたお辨當まで嫌ひになつたりする。俗に「坊主が憎けりや袈裟まで憎い」と言ふのは、この邊の消息である。かく兒童の感情と言ふものは複雑であつて、それが學業や健康などに種々な影響をなすものであるから、單に學問が出来ないから、素質が悪いのだとか、父に反抗するから不良だなどと簡単に片づける事の出来るものではない。



### パブロフの實驗

最後に感情の條件化について述べて見よう。感情が或る特種の經驗を通じ、他の事物や人間と結びつく事を感情の條件化と言つてゐる。これは感情の固着とほゞ同様な心理状態である。たゞ多少異なる所は、前者の場合には感情が導火線となるが、後者の場合には偶發的の同時律によつて結びつく事が多いのである。感情の條件化と言ふ事は、今から二十餘年前に、露西亞人のパブロフが發表した有名な研究である。その大體を紹介すると、パ氏はこの實驗に犬を使つた。先づ彼は犬に食物を與へると同時にベルが鳴るやうな装置をし、毎日犬が空腹を感じる頃食物を與へて、それと同時にベルを鳴したのである。すると犬は食物の刺激に反應して、澤山の胃液や唾液を分泌した。彼はその都度或る特種な装置をもつて、この犬の分泌する唾液の量を計算して見た。そして彼が何回も、食物を與へると同時に、ベルを鳴して居ると、遂には食物を與へなくも、たゞベルを鳴らしただけで食慾を起し、殆んど食物を與へられたと同じ位な、唾液や胃液の分泌を見るやうになつたのである。かく食慾がベルの音と結びつき、その一方だけの刺激によつて、食慾の亢奮を感じるやうになる事を、食慾がベルの音によつて條件化されたと言ふのである。

**ワットソンの實驗**　ワットソンはパブロフの研究を人間に應用した人である。彼は條件とし

て白兎を使用した。初め初生兒に白兎を示しても別に恐怖するやうな態度を示さなかつた。ところが前にも述べたやうに、幼兒は高い音響を恐れるものである。そこでワットソンは幼兒に白兎を示す度毎に、強い異様な音響を聞かせて驚かせて見た。かくすることが十數回に及ぶと、幼兒の恐怖心は、たゞに音響に對して起る丈けでなく、白兎を見たばかりでも、恐怖するやうになつたのである。この状態を恐怖感情が白兎によつて條件化されたと言ふのである。從來子供は闇を恐れるものだと考へられて居つたが、ワットソンは實驗の結果これを否定し、小供は必ずしも闇を恐れるものではなく、小供が闇を恐れるのは、經驗の結果であつて、小供の恐怖感情が暗夜によつて條件化される場合に限ると言つて居る。例へば暗夜に雷鳴を聞いた時など、子供の雷鳴に對する恐怖心が、闇に條件づけられて、遂に暗夜を恐れるやうになるのだと彼は考へるのである。兒童の日常生活を見ると、かゝる例は決して少くない、子供が病氣をする毎にお醫者を呼ぶのは普通である、處がこれによつて病氣に對する不快と苦痛の感情がお醫者さんと結びついて、醫者を怖がるやうになる。その他この種の實例は限りもなく擧げる事が出来る。かくして初めは單純な恐怖心や、愛や、忿怒の感情が種々に分化せられ、條件化されて多種多様の感情や性格となつて行くのである。殊に幼少の頃は條件化され易く、生後數時間たつと條件化が開始される。故に家庭教育においては、早くか



らよい條件を與へ、悪い條件を避けるやうに指導し、總ての感情が好ましい健全な條件と結合されるやうに努めなければならぬ。

### 條件化打破の方法

萬一兒童の感情が好ましくない條件を得た場合には、成る可く早くこれを打破してやらなければならない。悪い條件化(惡癖)を打破する第一の方法は、置換法と言つて、從來と全然異つた條件と置き換へる事によるのである。前述のワットソンの實驗の場合の白兔の例について見ると、白兔と強い音響とが結びつけられて、白兔を怖がる子供があるとすればそれを矯正するには強い音響の代りに、子供の好き相なレコード(音樂)と置き換へ、白兔を見せると同時に、そのレコードをかけてやり、全然變つた條件をもつて刺戟し、これを何度も繰り返すと、これまでの條件であつた強い音響が、徐々に白兔から分離し、白兔に對して新しい感情が結びつけられ、白兔を見ても恐怖しないのみか、却つて快感を覚え、白兔を愛撫するやうになるのである。また雷鳴と暗夜の場合でも同様であつて、激しい雷鳴の時には、必ず電燈をつけ、蓄音器でレコードを聞かしてやるとか、お伽噺をしてやるやうにすれば、自然に暗夜に對する恐怖心が取り除かれるのである。

感情の條件化を打破する第二の方法は接觸法である。接觸法と言ふのは、第一の置換法とは正反對に、寧ろ條件となつて居る刺戟を度々與へ、これに慣れさせる事によつて、その感情に打ち勝つて行く方法である。例へばこゝに犬を恐れる子供があつた場合に、犬を遠ざけずに、寧ろその犬に屢々接近せしめ、これに慣らすと、それによつて恐怖心を取り除く事が出来るのである。第三の方法は抑壓法である。この方法は最も不健全なものであるが、然も世間ではこの不自然な方法が可なり一般的に用ひられてゐる。この方法は兒童の感情を強制的に壓迫するやり方である。前記の例について言へば、暗夜を怖れる子供の恐怖心を無理に抑壓したり、忍耐させたり、所謂鍛鍊によつて矯正しやうとするのである。この方法は一時効を奏するやうに見える事もあるが、決して根本的治療法ではない。故に家庭教育においては、惡癖矯正の方法として、成る可く第一の置換法か第二の接觸法によるやうにし、第三の抑壓法に訴へない事が望ましい。以上の外、感情にはコンプレックス凝固と言ふ現象があるのであるが、こゝには略する事とする。

## 第二十五章 恐怖の感情とその指導

### 人生と恐怖

吾人の生活において最も執念深くつき纏つて居る感情は、怖れると言ふ事であ



る。程度の差こそあれ恐怖心のない人はない。男も女も何物かを怖ぢ、まだ西も東も分らない幼児も、白髪の老翁も等しく恐怖心をもつてゐるのである。また対象の差こそあれ恐怖のない時代はなかつた。未開人も文明人も、昔も今もこの點は同様である。また將來も恐らく全然恐怖心のなくなる時代はないであらう。恐怖がかく人生における一般的な事實である以上これが指導を等閑に附する事は出来ない。或る學者は、教育の任務は「恐る可きものを正しく恐れ、恐る可からざるものを恐れないやうに兒童を教導することにある」と言つて居るが、味ふ可き言葉である。野蠻人は雨を恐れ暴風を恐れ山を恐れ川を恐れ、病氣を恐れ、火を恐れ、恐れなくてもよいものまで恐れたが、現代人は恐れなければならぬものまで恐れなくなつた。而して恐怖に關する正當なる智識と訓練とは家庭教育の重點であり、主として母の任務である。

### 恐怖の種類とその影響

恐怖には用心するとか、警戒するとか云ふやうな軽い程度のものもあれば、驚き戦くと云ふやうな強い恐怖心もあり、その中間のものもあり、更に病的な恐怖症と云ふやうなものもある。恐怖はまたその対象の如何によつて、客觀的恐怖と主觀的恐怖とに分けることが出来る。客觀的恐怖と云ふのは犬を恐れるとか、火を恐れるとか言ふやうな、過去において實際經驗した實在に對する恐怖心である。これに反して主觀的恐

怖心とは實際存在しないものに對する恐怖であつて、幽霊を恐れるとか、鬼を怖がるとか、まだかかつた事もない病氣を恐れる類で、多くは父母のお話や、自分の想像、妄想等の産物であつて、不健全な感情である。幼兒の恐怖心を調査して見ると客觀的恐怖は比較的少なく、主觀的恐怖が非常に多い事は注意に値するのである。

兒童が新しい事物に遭遇した時、見慣れない犬に會つたとき、また未知の人に接するときなど、多少危惧心を抱いたり、警戒をすることは當然であつて、また必要なことである。かゝる態度は個人をして自然注意深くさせ、危害や失敗を免れ成功に導く所以である。然し程度を越えた恐怖心殊に主觀的な恐怖心は、精神的にも身體的にも有害である。恐怖は吾人の精力を浪費させ、能率を低下させる。びく／＼し乍ら學習して居る兒童の學習能力が低下するのはこのためである。故に家庭においても學校においても恐怖心に訴へて勉強させる事は能率の點から見ても、精神衛生の點から見ても避けなければならぬ。事務員や労働者の能率工程などを調査すると恐怖心を抱いて居る場合には、間違ひが多かつたり、製品が粗悪になつたり、工程が遅くなると云ふやうな事を發見するのである。恐怖心を抱いて居る子供は臆病で、競争心に乏しく一寸とした事に對してもうろたへ、何事につけても消極的で、お友達も出来ないものである。また強い恐怖心をもつて居る兒童は概し



て成人後ドモリになるやうである。獨り言を言ふ時や、本を讀む時などはドモらないが、人前に出ると急にドモるやうなのは必ず心の底に劣等感や恐怖心が有る證據である。

家庭教育においても、學校教育においても、親と子との間に恐怖心があつたり、教師と生徒の間に多少でも畏怖の感情が挟まつて居つては、眞の教導や感化は絶対に出来るものではないと言ふ事を記憶しなければならぬ。兒童が如何に兩親に服従し、また生徒がどんなに勉強しても、かゝる服従や勉強はたゞ單に懲罰を免れるための手段に外ならないのである。

### 恐怖に伴ふ生理的變化

前にも述べたやうに、感情と言ふものは内外の刺戟から受ける生理的變化の内部感覺であるから、感情の起る以前に必ず何等かの生理的變化が起つて居らなければならぬ。恐怖心の起る場合の生理的變化の状態を見ると、先づ副腎のアドレナリンの分泌から始まるやうである。それが肝臓に注がれて、葡萄糖を遊離し、兩者は共に心臓を経て血管に送られるのである。それが交感神経を刺戟して亢奮せしめ、血管の攣縮となり、血壓の亢進を誘致し、血液内の凝固素を増加せしめるのである(この凝固素と言ふのは蛋白質の纖維素であつて、忿怒や恐怖を経験すると急に増加し、俗に言ふ、血が濃くなつて、怪我をしても出血を早く止める効力を有して居るものである。故に怒つて居つたり、恐怖して居る時に傷

を受けても出血が少ないが、不意打をくつた時には、凝固素が少ないために出血が甚だしいものである)。また毛細管を縮小させるために、皮膚の色が蒼白くなり、眼の瞳孔が擴大したり、立毛筋が収縮して毛穴を立たせたり、唾液や胃液の分泌にも影響を與へる。故に恐怖が長く繼續すると、身體の疲勞を來たし消化器系統に故障を生じ、便秘を起したり、營養不良の原因となるのである。またレヤードが鼠によつて實驗した所に據れば、靜かな場所に飼つて置く鼠と、騒がしい所で飼育した鼠と、更に絶えず威嚇されつゝ飼育された鼠とでは食慾において五パーセント乃至二十五パーセント、發育においては十パーセント乃至三四十パーセントの相違が生ずると言ふことである。かく恐怖は身體と深い關係をもつものであつて、心配性の人や恐怖心の強い人の體が虚弱なのはこれがためである。よく街頭で電車や自動車や犬などに氣を配りながら、おど／＼してお母さんに手を引かれて歩く子供を見ると病身のものが多い。かゝる子供に醫療を施してもその効果は一時的であつて、永久的の治療は精神衛生により、彼等の心にある無用の恐怖心を除去することにある。

### 家庭教育と恐怖心

初生兒の恐怖心は屢々述べたやうに非常に單純であつて、大體において支持を失ふことに對する恐怖心と、大きな音響に對する恐怖心の二つが考へられて居る。一般に人間は自分の存在に危害を加へるやうな事柄は、何事によらず恐れるので



ある。見慣れぬものを恐れたり、病氣や死を恐れるのはその現れである。かく比較的單純な恐怖心が環境の影響を受けて、先きに述べたやうに或は條件化の法則により、または移動の法則に従つてそれからそれへと發展し、複雑化されて行く。また恐怖は模倣によつて生ずることがある。子供は單に父母の言葉や作法を模倣するばかりでなく、父母の感情をも模倣するものである。母が犬を怖がるのを見て子供が無意識的に犬を恐れ、姉や兄が暗闇を恐れると、自然に弟妹は闇を恐れるやうになるのは感情の模倣によるのである。また父母の暗示によつて恐怖心を生ずる場合がある。両親が絶えず、あれは危ないから觸つてはいけなとか、あそこは危険だから近づくなとか、あのお菓子を食べると病氣になるとかいふ様に、一から十まで心配したり注意したりすると、仕舞にはその暗示を受けて自然それらのものを恐れるやうになる。最も有害なのは幼兒の無智につけ込み、恐怖心を濫用することである、小供達が親の言ふ事を聞かなかつた場合に、一々丁寧に説明して母の考を了解させるやうな努力をとらず、却つて頭から言ふ事を聞かなければ人攫さらひにやるとか、そんなおいたをすると巡査に話して縛つて貰ふとか言ふ様な事を不用意に言ふことがあるが、それがどんなに幼きものの心を毒するか分らないのである。斯かる子供は物心がつく頃になると、母を信用しなくなつたり、種々な病的な不安や恐怖に襲はれるやうになる。また両親が子供に對して高い希望

や理想をもち過ぎると、兒童は不安を感じるものである。ミルトンは「希望のある處に恐怖あり」と言つてゐるが、學校の成績や、運動競技や、立身出世などにしても、餘り父母が關心をもち過ぎると、兒童の不安や恐怖の原因となるから注意しなければならぬ。

兒童に恐怖心の原因を與へるのは主として小學校入學前であつて、全然家庭教育の責任であると言つてよい。然もそれが知らずくの間、家庭の雰圍氣によつて幼き人々の心に不安や恐怖を植ゑつける場合が多いのである。例へば家庭生活が不規則で、授乳の時間なども一定せず、今日は三時間毎に乳を吞ませられたが、その翌日は五時間経ても授乳されなとか、また睡眠の時間やその他の生活様式が不規則であつたり、また屢々轉宅したり、轉校したりすると、恐怖とまでは行かなくとも、恐怖心の基である一般的不安の氣分を與へるものである。また父母の氣分が絶えず動搖し、或る時は大變機嫌がよいかと思ふと、その次の瞬間には急に怒り出したり、また父母間の喧嘩口論が多かつたりすると、子供は不安にかられ引込思案となり、臆病な子供となるものである。子供の躰などにしても両親の氣分任せで昨日は或る事に對してひどく叱られたが、今日は同じ事をして一向叱られなかつたり、昨日は早く就寢したと言つて褒められたかと思ふと、その翌日は早寢ばかりして居ると言つて、叱責されると言ふやうな事であると全く子供は自信を失つて仕舞ふのである。また



父母が不用意の言葉の中に、子供が多過ぎて困るとか、極端な場合には、「お前のやうな奴は死んでくれた方がましだ」などと言ふ事が、どんなに彼等の氣分を害し、不安定だと言ふ感じを與へるか分らない。子供を育てる場合には、不斷に彼等は兩親の大切な子供であるといふ印象を與へ、假初めにも餘計者扱ひにしない様に注意が必要である。その他子供を褒めたり、くさしたりする事も、可なり幼い人々の心を惱ますもとなるから、輕々しく言ふことはならない。また家庭の生計が貧しいとか、父や母が他人と争つて居るとか言ふ場合にも、兒童の心に恐怖心を植ゑつけるものである。私の知人に二三十人の職工を使つて、或る製造工場を營んで居つた人がある。處が數年前約三ヶ月に亘る執拗な勞働爭議が始まり、果ては兒童の學校への往復を脅かしたり、學校へ惡宣傳のピラを撒いたり可なり酷い目にあはされた。それ以來その工場主の二人の子供は、社會に對する強い不安や恐怖の感を抱くやうになり、その結果學業成績が低下し、その一人は病氣となつて、某中等學校を途中で廢めて仕舞つた。

### 恐怖と夢

恐怖はたゞに醒めて居る時ばかりではなく、寢て居る時でも經驗するものである。よく夢で悪者に追ひかけられたり、幽霊が出たりして、一晩中、齒を喰ひしげつたり、泣いたりして苦悶することがある。怖い夢を見る子供は大概頭から蒲團をかぶつてゐるもの

である。故に頭を夜具の中に入れて寢る子供には特に注意をしなければならぬ。睡眠中恐ろしい夢を見る事は安眠の妨害となり、覺醒時の恐怖と同じく身體を疲勞させ、睡眠の目的たる休息をする事が出来ないから極力避けるやうにしなければならぬ。活動寫眞を見たり、青少年雑誌で讀んだ怖い物語や、臆病の癖に子供達がよく聞いたがる怪談などが睡眠中に現はれて悪夢となるのである。子供の夢は比較的單純である。多くは現實夢と云つて、平素心に思つて居る事を見るので、例へば遠足の前夜に、遠足の夢を見たり、お菓子が食べたいと思つて眠ると、お菓子を食つた夢を見たりする。故に時折どんな夢を見るかを子供に尋ねて、彼等の抱いて居る恐怖の對象や、不平不満を知つて置くと、兒童の指導上參考となるものである。

### 幼時の恐怖心

屢々述べた通り、生れたばかりの初生兒は耳も聽えず、眼も見えない。従つて音響や暗黒などに對する恐怖心は起らない。而して彼等が最初に經驗する恐怖は支持を失ふことに對する恐怖である。この恐怖心は子守などの不注意な抱き方が原因となることが多い。またお母さんが赤坊を抱いて急いで二階から降りてくる場合などに、何んにも知らない赤ちゃんは落されるのではないかと云ふやうな恐怖を抱いて、母の腕にしがみつくことがある。また裸にしてお湯をつかはせる時、兩手をふら／＼させたりすると身震ひして怖がるものである。



この種の恐怖は意識こそしないが一生涯つき纏つて、成人の後臆病者となり、殊に高い處に登つたり、電車などに乗ると眩暈を感じる原因となる。生後一週間乃至十日位で、初めて耳が聽えるやうになる時がまた非常に大切である。この頃の幼児に激しい語調や、突然大きな音響を聞かせると驚き恐れて泣き出すものである。ワットソンが幼児は強い音響を恐れると云つて居るがその通りである。授乳の時間を計るために目覺し時計をかけて置いたのが、急にチリ／＼と乳兒の耳邊で鳴り出すときの彼の驚きは、到底成人には想像は出來ない。かく一寸とした不注意が原因となつて一生の禍根を残す事がある。また視覺が發達して明暗を識別し、色彩の感覺が具つて來ると、愛兒達はあの可憐な眼を丸くして、周圍の事々物々に對して一種の驚異の眼をもつて見張るやうになる。殊に彼等は急に近づくものを恐れるのであるから、生後一ケ年迄位の幼兒の取扱ひは丁寧にしなければならぬ。稍々生長して二三才になると強い好奇心が現はれ、何事に對しても新しいものには特別な注意を拂ふ様になる。好奇心と云ふものの中には知りたいたと云ふ智識慾もあるが同時に、無智に對する不安の念をも伴つて居る。あれは何かしらと、ぬき足さし足で近づいて行く子供の心には、確かに多少危懼の念が含まれてゐる。さう言ふ場合に周圍の人があれ危いとか、怖いとか云へば子供の好奇心は直ちに恐怖心に變つて仕舞ふのである。これは一面において兒童の好學心を殺ぎ、他

面においては總てのものに對する不安の態度を助長させ、一寸とした暗示に對しても驚き怖れるやうになるものである。故に両親や教師は何事に對しても出來る丈け丁寧に説明してやり、危険なものに對しても、なぜ危険であるかと云ふ譯を親切に話して聞かせる様に指導しなければならぬ。

### 闇に對する恐怖

幼兒は生後一ケ年半位経ると屢々暗闇を恐れる様な態度を示して來る。四五才の頃になるとその傾向が一層甚だしくなり、それが八九才の頃から徐々に減退して行くのである。然し子供の恐怖の中で闇に對する恐怖ほど一般的のものはない。その原因は前にも述べた様に生後の不注意な取扱ひに由るものもあるが、先天的の原因も働いて居る。未開人野蠻人が敵に襲撃されたり、猛獸に危害を加へられるのは暗夜であつたのである。兒童の闇に對する恐怖心はその遺物であると考へる事も出来る。また暗闇を怖がる心理の内には確かに無智に對する不安もある。闇に覆はれた藪や森のうちに、何か潜んで居るかも知れないと云ふ危懼が伴ひ、その危懼の心が發して闇に對する恐怖心となるのである。また暗闇に對する恐怖は種々な聯想の結果として生ずる事もある。例へば晝間見た怖い犬が出て來やしないか、幼年雜誌で讀んだ怪物が住んで居たと云ふ所は、あの森ではないかと云つた様な聯想が子供を臆病にするのである。暗闇に對する恐怖心は、安眠を妨げ精神的にも肉體的にも非常に害があるから成る可く早く取除かな



ければならない。それには暗闇を美化して、よき聯想をもたせる様に教導しなければならぬ。例へば子供達に、神様はなぜ夜をお創りになつたかと云つた様な事を話して聴かせる事もよい。「私達が夜寝る時窓掛けや戸を締めると同じに、神様は夕方になると私達がよくおねんねの出来るやうにお空に黒い幕を張つて下さいます。すると小さいお星さまが優しいお眼々を醒まして、私達が寝て居る間一晩中よく見守つて居てくれるのです」と云つたやうなお話をし、よく晴れた夜など子供と一所に散歩して、お空の星座や天の川などを指し示して、成る可く夜に親たしませるやうに指導すれば、自然暗闇に對する恐怖は消失して仕舞ふものである。

### 病氣に對する恐怖

病氣に對する恐怖も決して珍しくはない。父母が子供の病氣を恐れる餘り、神經過敏になり過ぎて、あれを食べてはいけないとか、これを飲むと病氣になるとか、だれそれは肺病の血統だから遊んではいけないと言つたやうな注意を與へると、いつの間にか病氣に對する恐怖を得るのである。病氣と言ふ字は氣を病むと書くが、全くその文字の通りであつて、丈夫な人でも病氣になりはしないかと言ふ心配や、暗示を與へられると事實病氣になるものである。いま三四人のお友達が連絡をとつて、或るお友達を病氣にしようと相談をし、各自がその人に會ふ度毎に同じやうに、「まああなたはどうかさつたんですか、お顔色がお悪いです

ね、お熱はありませんか」と尋ねると、初めの間は「いえそんな事はありません」と答へるであらう。すると二時間も経てから第二のお友達が「まああなたはどうかさつたんですか、お顔が眞蒼です、お熱はありませんか」と心配相に言ふと、今度は前と變り、少し氣懸りな顔をして、「私は何んともないと思つて居るんですが、さつきも誰それに、同じ様な事を言はれたのですが、事によると……」とそろ／＼心配をし始める。かくしてあと二人のお友達が同じ様な暗示を與へる事によつて、夕方まではそのお友達を完全に病氣にして仕舞ふ事が出来る。それに反して三四人のお友達が協同して、病氣のお友達に反對の暗示を與へる事によつて病氣を軽減する事も出来るのである。よく病人を見舞ふ時に心配相な顔をして同情の言葉を發するが、時と場合によつてそれが必ずしもよくない事がある。時には寝てゐる病人に向つて「まああなたは病人の様でない、顔色がよくて……」などと言ふ暗示を與へる事が、血液の循環をよくし、病氣全快の端緒になる事が少くない。殊に小供は非常に暗示を受け易いから、そのお菓子を食べるとぼんぼが痛くなりますよなどと言はれると、その通りお腹が痛くなつたり、外へ出ると風を引いてお熱が出ますよと言はれると、本當に熱の出る事がある。心配性なお祖母さんやお母さんに育てられた子供が病身で、比較的放任主義の家庭の子供が却つて丈夫なのはそのためである。著者の知人某が數年前チブスをやつた。彼は元來取り越



し苦勞をするたちの人であつたが、特にそれ以來消毒や衛生の事を八釜敷く言ふやうになり、御飯に蠅が一匹たかつて、その御飯を食べないと言ふほど極端な潔癖家になつた。それが子供達に傳染して、非常に神経質な子供となつて困つて居る事を知つて居る。こんな例は決して珍しくはない。例へば子供が轉ぶと、何んでもないのに、あんよが痛かつたかと勞る。すると子供は大して痛くもないのに、痛いと言つて泣き出すのである。少し位の腹痛に、やれお醫者さん、やれお藥などと騒ぎ廻る事が却つて兒童の精神衛生によくはないものであるから、母親は平素その邊の事をのみ込んで子供を指導し、それでも腹痛を訴へるやうな場合には、冷靜な氣持ちで醫師の診斷を求めるとすればよいのである。

### 家畜及び人に對する恐怖

子供の恐怖の對象の中に動物と人間とがある。子供が蛇を怖がる事などは已むを得ないとしても、牛や馬や犬や猫を恐れるのはよくない。殊によく犬を怖がる子供があるが、それがどれほど子供の將來を不幸にするか分らないのである。先日も三人連の小學校一二年位の生徒等が歩いてくると、途中で一匹の犬に出會つた。するとその内の一人が、顔色を變へて怖がり、うろ／＼して居るのを見て自分は氣の毒に思つた。早く彼の恐怖心を矯正してやらなければ、この少年は將來必ず病人になるであらう。前にも述べた

やうに、元來子供は家畜を好くものである。それが一寸とした偶然の經驗や、父母の不注意の暗示などによつて、反對の結果になるのであるから、不自然な取扱ひや、悪い暗示を取り除いてやれば無用の恐怖を除去することは困難でない。また子供は人を恐れる事がある。幼い時近所に自分より力の強い意地悪の兒などが居ると、絶えず壓倒されて、いつの間にかその子供を恐れるばかりでなく、その子供に似た他の子供をも恐れ、それが成人すると、非社交的となり、引込思案の人となるのである。子供が人を恐れる他の原因は人前で笑はれたり、嘲けられたりする事である。母親がお客様さんの前で、謙遜のつもりで子供の缺點やいたづらの事を披露したり、嘲笑したりする事が原因となつて、だん／＼他人を恐れるやうになり、遂には人前に入るのをいやがるものである。人を怖がる子供の特徴はドモリになる事である。従つてドモリの根本治療は恐怖心を除いてやる事である。また女の子が男の子を恐れる事も決して珍しくない。一般に女子の柔和に引替へて、男子は亂暴であつて、程度の差こそあれ、女子は多少男子を恐れるものである。それが甚だしくなると將來家庭の圓滿を缺き、家庭の不幸は勿論、結婚の後生れてくる子女にも影響するから、男女の間の恐怖感に成る可く早く取り去るやうに注意しなければならぬ。



## 第二十六章 忿怒の感情とその指導

### 忿怒と恐怖

幼兒の生活において恐怖に次いで最も早く現はれる感情は忿怒である。生後一ヶ月位の乳兒が空腹の際に泣き叫ぶのは確かに忿怒の感情の現はれである。忿怒と恐怖とは心理的に多くの類似點がある。兩者とも緊張性の感情であつて、自分に加へられんとする危険や妨害に對する防禦的態度であつて、異なる點は前者が積極的であるに對して、後者は消極的である事である。また恐怖の場合には、近づいてくる危険や妨害を逃避せんとする態度であり、これに反して忿怒の場合には、危険を防禦し進んでこれと戦ひ、相手を逃避せしめんとするのである。而して同じ人が同じ事物に對して或る時は恐怖し、或る時は忿怒すると言ふ様に、異つた態度をとる事がある。例へば幼い頃には怖がつて居つたものに對して、だん／＼年をとり自信を増してくるに従つて忿怒の感情を發するやうになり、また從來忿怒を感じて居たものに對して、健康が勝れなかつたり、老衰などするために何んとなく不安を感じ、恐怖する様になる事がある。恐怖と忿怒との間には心理的類似點がある丈でなく、生理的變化に於いても兩者の間に多くの類似點がある。

る。忿怒の場合における生理的變化を見ると恐怖の場合と殆んど同様であつて、アドレナリンの分泌は勿論、グリコゲンの遊離、血管の攣縮、血壓の亢進、血液内の凝固素の増加、脈搏及び呼吸などの増進、立毛筋の緊張、瞳孔の擴大、唾液胃液の分泌の減少などの變化を誘發してくる。従つて忿怒の感情が起ると精力が集中せられ、能率を増進するが、その結果血液内に毒素を生じ、疲勞の原因を招き、長く忿怒を續けて居ると身體に異狀を來たし、時には心臓麻痺などの原因ともなり、精神衛生上極めて有害である。

### 忿怒より憤憤へ

忿怒を發生的に見れば、原始的の感情であつて、多くの場合において争闘本能に附隨して起るものである。人間の一生を通じて見ると満二才の頃が最も怒り易い時代である。スタンレー・ホルの說に據ると、これは幼兒の生活が未開人の生活に相當し、争闘的であるためであるとされてゐる。然しどんなに文化が進歩しても争闘心や忿怒の感情のなくなる事はない。忿怒の感情は、愛情や社交性に對立し易い感情であつて、性格教育においても、その取り扱ひは決して容易ではない。殊に怒り易い子供や、強烈な争闘心をもつて居る子供は、他人に迷惑を及ぼすのは勿論、自分の身心をも害ふものであるから、これを適當に統整し、指導しなければならぬ。それだからと言つて争闘心の少ない子や、忿怒の感情の薄い子供も必ずし



も褒めたものではない。人間には時に不義に對して忿怒を感じ、正義のためには敢然として争ひ闘ふ勇猛心が必要である。従つて忿怒の感情や、争闘心の指導はこれを壓迫する事にあるのでなくて、これを昇華し、怒るのも闘ふのも、單なる私利私慾を離れ、正義正道のために怒り闘ふ、所謂義憤に導く事にあるのである。

### 忿怒の種類と指導

忿怒には種々の程度と種類とがある。不快とか窮迫とか言つたやうな極めて軽いものもあれば、激怒と言ふやうな熱狂的のものもある。また外向性忿怒と言つて、一寸とした忿怒の情でも直ちに表現され、蹴つたり、喚いたり、亂暴するものと、内向性忿怒と言つて、心には怒つて居つてもその感情を外部に現はさないで、心の中で主觀的に怒りを感じて居るものがある。外向性の忿怒は、その持続時間が比較的短かいが、内向性の忿怒は長く続き、その取扱ひが外向性のものより六ヶ敷いばかりでなく、精神衛生の點から見ても悪性である。兒童の忿怒と年齢との關係を見ると、大體において外向性の忿怒は、幼時に最も多く、それが年齢と共に徐々に内向性に傾き、成人にいたると著しく内向的となる。幼兒の生活を見て居ると、一寸とした事にも不快の感情や忿怒の情を現はすが、その持続時間が短く、いま怒つて居つた子供が、すぐ笑ひ興すると言ふ様な有様であるが、十四五になると外部に現はす事がだん／＼少

くなり、内訶して氣むづかしくしたり、すねたりするやうになる。從來嫉と言つて居るのは、主として忿怒の感情を壓迫する事にあつた。その結果兒童は外見的には「大人しく」も見えるが、その反面には内向的となり、屢々性格に表裏を生じたり、陰險になつたりする傾向があつた。

古來怒ると言ふ事は最も不道德であると考へられて居た。家康の家訓にも怒りは敵と思へと教へ、キリストは人を怒る事は殺人に等しい罪だと教へて居る。また實際の方法から見ても、忿怒は犯罪に最も密接な關係を有して居る。人に傷害を與へるのも、盜むのも、殺人も左傾も、その他多くの不良行爲も、直接間接に忿怒の感情に關係して起るのである。またジェムス・マニングの言つた様に忿怒は行動に現はす事によつて激化する事も事實である、例へば初めは不快とか窮迫とか言つたやうな軽い忿怒の感情でも、それが強い妨害に會ひ、行動化して喧嘩口論となると、だん／＼激しくなり、更に手を出して殴り合ひにでもなると愈々激化して、思はぬ怪我をしたり、また他人に傷害を與へたりする事がある。故に忿怒は成る可くその初期において適當に制御し、先から先へと複雑な發展をさせないやうに努めなければならない。

### 忿怒の原因とその指導

忿怒の感情を指導するには、その感情のよつて來る所以を知らなくてはならない。初生兒が初めて經驗する忿怒は屢々自由の束縛



に對してである。例へば嬰兒の襁褓が堅過ぎて足の自由が妨げられたり、着物が窮屈のため手が自由に動かせなかつたりすると、怒つて泣き出すのである。かゝる場合に彼等を宥めるには、衣服や襁褓を緩くしてやればよいのである。また生後數ヶ月を経ると、這ひまはつて手當り次第に物を握つたり、舐めたり、弄んだりする。かゝる場合に側に居る母なり、子守なりがこれを妨害したり、無理に取りあげたりすると、怒り出すことがある。それが度重ると、遂には癩かんが出て、所謂癩癢もちになるのである。更に幼兒期においては、最も強い本能である食慾と關聯して、忿怒が起る。お乳の呑み足りない内に急に離されたり、また空腹になつても授乳されなかつたりすると怒つて泣き出すのである。空腹になると怒りぼくなるのは子供に限つた事ではなく、成人でも同様である。兒童を注意深く觀察してゐると、一日中最も怒つたり、喧嘩をしたりするのは午後の四時から六時までの間で、次は午前の十一時から十二時までの間である。これは何れも空腹と疲勞を感じる時間であつて、これによつても空腹と忿怒との間に密接な關係のある事が分る。空腹が原因で怒る場合には適當なる食物を與へ、疲勞が原因で怒る場合には休息を與へ、安眠させてやればよいのである。また兒童は嫉妬が原因で怒る場合も少くない。兒童の毎日の生活を見ると、父や母を中心にして、兄弟姉妹各々その愛を獨占しようとして争つて居る様に見える。故に若し自分が不公平な取扱ひを

受けたと感じたやうな時には、強い嫉妬心が起り、それが忿怒となり、兄弟喧嘩の種となるのである。所有慾もまたしばしば憤激の種となる。子供等は玩具の奪ひ合ひは勿論のこと、新聞でも、廣告でも、鉛筆でも、繪葉書でも、何んでも取りつこをするのである。故に兒童には成る可く早く自分の物と、人の物との區別を判明させ、自分のものを大切にすると共に、他人のものを尊重するやうに指導しなければならぬ。それがためには兒童各自に自分の玩具や本などを整理する箱か、子供筆筒を與へてやつて、争を少くするばかりでなく、所有權に對する明確なる意識を與へるやうに指導しなければならぬ。その外兒童は種々の欲望や興味をもつて居る。而してその願が妨害されると怒り出すのである。例へば兒童が一生懸命に泥をこねて泥人形を作つて居る時に、突然に理由も言はずに母親がいきなり中止を命じたりすると、子供は怒つて泣き叫ぶ。勿論母から見れば、着物を汚すから泥こねは甚だ悪いのであるが、然し三四才の幼兒達には、なぜ着物を汚すのが罪惡であるかと言ふ事は理解出來ないのである。また父母が怒りばかりつたり、癩癢もちだつたりすると、いつの間にかそれが子供に傳染して癩癢もちとなるものである。よくお父さんがお役所から歸つてくると、お風呂が熱いと言つて怒り、またぬるいと言つて怒り、お茶が濃いと言つて怒り、薄いと云つてまた怒り、箸の上げ下げにもぐづぐづ言ふやうな事がある。またお母さんはお母さんで、朝



から晩まで子供や女中の缺點を見つける事を仕事にして居るやうだと、その感情が子供達に感染して、癩癪もちの子供になるのである。或る教師の所へ生徒の母が尋ねて来て、自分の娘の反抗心の強い事や、癩癪もちの事を訴へて、どうか學校でそれを直して頂きたいと願つた。するとその教師は言下に「あなたのお嬢さんの反抗心や癩癪を矯正するには、先づあなたのお嬢さんを直すより外はありません」と言つて歸したと言ふ事を聞いたが、誠に以て適切な忠言である。また既に述べたやうに、少女期になると急に獨立自治の精神が發達し、行動にも思想にも自由を要求するやうになる。その時若しそれがひどく妨害されたり、壓迫を受けたりすると彼等は大に憤慨する。長い間父母や教師の言ふ事を鵜呑みにして居つた彼等が、初めて自から思索するやうになつたその時の彼等の喜びと、自尊心とは我々の想像を許さない物である。處がその自尊心や、喜びを無慙に蹂躪されて仕舞ふことになる、彼等が失望し、憤慨するのも無理ではない。また兒童の忿怒は彼等の健康に大なる關係がある。一般に病弱な子供は怒り易い(忿怒するから病弱になるのである)。殊に胃腸の如き消化器系統の弱いものは忿怒し易い傾がある。また便秘も忿怒の原因とされてゐる。その外に多少熱のある時や、睡眠不足の時などにも、怒り易くなるものである。故に子供が平素より怒り易くなつた時には、身體の故障に注意し、その忿怒を壓迫するよりも、その身體的原因を除去し

てやらなければならぬ。要するに物には原因があり、それが結果となつて現はれるのであつて、忿怒には必ず忿怒する原因があるのである。或る時は前に述べた原因が二つも三つも重複する事もある。例へば空腹の時に嫉妬心が起り、それに所有本能が加はると言ふやうな譯で、その原因を知る事は決して簡單ではないが、何れの場合においても父母は冷靜な態度をもつて、これに應じ、出来るだけその原因を發見するやうに努め、速かにこれを除去してやるべきである。

### 忿怒制御の方法

忿怒を制御するには前に述べたやうに、多くの場合その原因を知つてこれを満足させてやる事であるが、然し時と場合によつては、彼等の要求を無條件に許してやつてはならない。或は彼等の忿怒を無視して知らん顔をして居る事も必要であり、或は彼等の注意を他に轉向させてやる事も一方法である。例へば彼等が玩具を欲しがつて泣いて居る時に、小鳥の籠を見せてそれに注意を轉じさせるとか、お菓子を食べたがつてぐづつて居る時は、散歩に連れて行つてやると言ふ風に注意を他の興味に轉するのである。然し最も普通で最も簡単な方法は、何んでも彼でも彼等の言ふ通りにしてやる事であるが、これがどれ位兒童を害し、彼等を我儘にするか分らない。例へば四五才の子供に毎朝顔を洗はせる習慣をつける事にしても、兒童がぐづつて中々洗はない時、母がこれを無條件に許してやると、その次から顔が洗ひたくない時



には、必ずぐづつたりして決して洗ふものではない。また玩具が欲しい時にちだんだを踏めば直ぐ買つてやると言ふやうなやり方をする、兒童はそれに味をしめ、何時でも自分の目的を達するために、正當な努力を拂はず直ぐ怒りだし、忿怒を自分の目的遂行の手段とするやうな卑怯な態度を覺え、不健全な性格をもつやうになるものである。故にかゝる方法は極力避けなければならない。これに反して注意を他に轉向させたり、無視したりする事は多くの場合において有効である。

## 第二十七章 愛情とその指導

### 愛情教育の重要性

感情の中で最も高尚なものは愛である。人間と動物と異つて居る所以は、一つには人間には愛情があるが、動物にはそれが無いことにあるのである。人は何時も誰かを愛さずには居られない。長幼男女の分ちなく、彼は何かを愛し、また誰かに愛されて生活して行くのである。若しこの愛情の生活が満足されず、歪められる場合には、健康を害し、性格が偏屈となり、總ての生活において不自然状態を示すに至る。人間が愛する人を失つた時や、失戀した時ほど痛々しいものはない。彼は生きた屍に等しい者である。これに反して愛情の

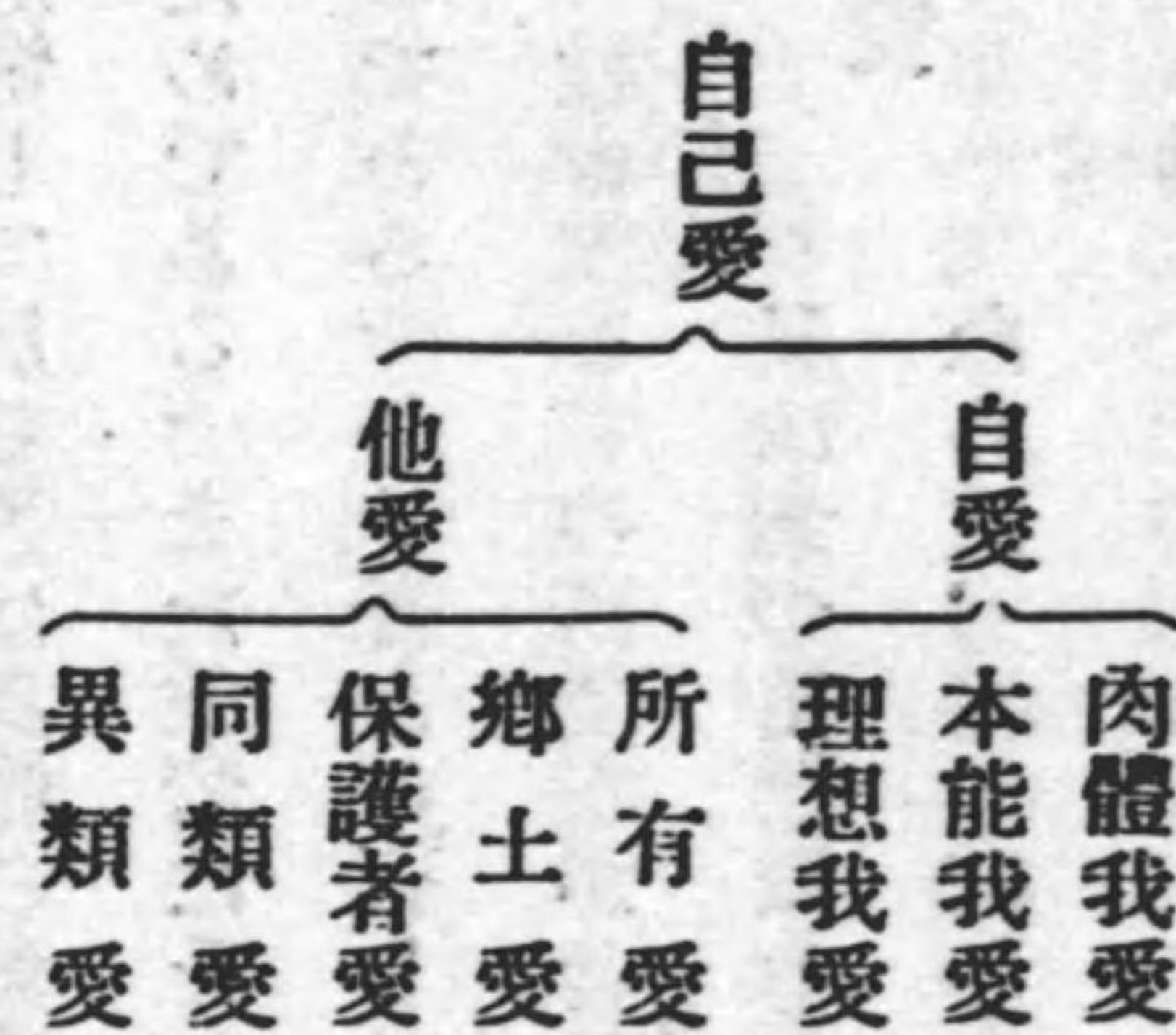
生活が圓滿に行はれて居るものは、何時も元氣潑潑として幸福な生活を送つて行く事が出来るのである。而して兒童の愛情の生活を圓滿に發達させて行くやうに指導して行く事は、家庭教育の任務である。

生理的方法から見ると、恐怖や忿怒の感情と愛情とは種々の點において異つて居る。例へば前者は交感神経の興奮に基づき、緊張性であるに反して、後者は迷走神経や副交感神経の興奮によるものであつて、身體を弛緩させる効果を持つてゐる。従つて恐怖や忿怒の後には何んとなく疲勞を感じるが、愛情の發動は血液の循環をよくし、心身の爽快を覺えしめるのである。屢々忿怒したり、絶えず恐怖して居る人は身體の健康を害し、愛情に富んだ人は自然にふとつて、福々しくなるのはこれがためである。また愛情はその發生的内容においても、恐怖や忿怒などの感情よりも遙かに複雑なものである。今日吾人の有して居る愛情を分析して見ると、少くともその内に自己愛、性愛、母性愛、社會愛などの諸要素が含まれ、それ々の發展を辿つて居るのを見るのである。

### 自己愛

私は先づ自己愛を發生的順序に従つて述べて見よう。それに先だつて分り易くするために、次の様な表を掲げて見た。





自己愛と言ふのは、字の如く自分自身を愛する愛である。而して自己愛を大別すると前表の如くに、自愛と他愛とになる。自愛と他愛とは一見矛盾するやうに見えるが、實際は決してさうでなく、自愛が徐々に發達すると他愛となるのであつて、兩者の間には不離の聯絡がある。或る人が言つた様に、人間は根本的に利己的なものであつて、自己の幸福が生活の根本動機である。而して彼は自分が愛されたいために他人を愛したり、また自分を保護してくれる人や、愛してくれる人を愛するのである。かく彼の他愛も、その根本は至つて功利的のもので、自愛の延長であると言ふ事が出来るのである。自愛を細別すると肉體我愛、本能我愛、理想我愛の三つとなり、それら順序によ

つて發達して行くのである。一番早く現はれるのは肉體我愛と言つて、自分自身の身體若しくはその一部分を愛する愛である。兒童が自分の手や足や、指や爪や毛髮などを愛するのがそれである。これは幼兒に最も多く見る所であるが、少年少女になつても、青年期に達しても、一生涯を通じて全然なくなるものではない。次に本能我愛と言ふのは自己の本能即ち欲望に執着する事である。例へば食べたいとか、遊びたいとか言ふ欲望がもととなつて、たべものや着物や玩具などを愛好する事を言ふのである。本能我愛は幼兒後期から兒童期にかけて最も強く現れてくるものである。更に人間の自己愛が發展すると理想我愛となつてくる。理想我愛と言ふのは自己の理想を愛する愛である。兒童が成長するにつれて、現實の自分に不満を感じ、徐々に希望の我、理想の我と言ふものを追ひ求めて行くのである。理想我愛は少年少女期の頃に現はれ、青年期において最も強いものである。彼等にとつてこの理想ほど貴いものはない。

### 他愛の發達

自己愛が進歩すると他愛となる事は既に述べた所である。他愛にも種々の階段がある。これを發生的に見ると、所有愛、郷土愛、保護者愛、同類愛、異類愛に分ける事が出来る。前節に述べたやうに、兒童の愛情は自己の肉體愛から始まり、本能我愛となり、それが進んで自分の延長である、所有物に及ぶのである。兒童が自分に屬する玩具や書物や着



物などを愛するのは、何れも所有愛である。この所有愛は所有本能などと結びつき、幼児期から児童期に最も強く現れ、一生涯存続するものである。次に子供の愛は、自分の住んで居る家や故郷の森や川や、神社佛閣などに及び、所謂郷土愛へと進んで行くのが普通である。これは児童期から少年少女期にかけて最も強く現はれるものである。この郷土愛が更に進むと愛國心となるのである。然し児童の頃に父母が轉々と居を變へるやうな場合には、この郷土愛が出来てない。郷里を持たない人は淋しい生活を送るものであつて、これほど氣の毒な事はない。故に出来る限り居を變へない事が、家庭教育においては望ましい條件の一つである。

次に児童の保護者愛について述べて見よう。幼児の對人的愛情の對象の初めは、自分を保護し愛してくれる周囲の人々であつて、最も普通なのはお母さんであり、お父さんである。然しこれは両親だから愛するのではなくて、お母さんは乳をくれ、お父さんは愛護してくれるから愛するのである。故に両親に限らず、乳母でも祖父母でも子守でも、自分を愛護してくれるものなら誰れでも愛するのである。更に児童の愛情は同類愛へと進んで行く、同類愛と言ふのは、自分に類似した人を愛する愛情である。同類愛も幼稚なものは、單に外形的類似に止まり、同年輩の子供とか、同性のお友達などに對する愛であるが、年齢に進むに従つて性格や趣味の類似となり、同志の士、同信の

友などに對する愛情となるのである。自己愛の最も進歩したものは、異類愛である。異類愛は理想我と最も深い關係を有し、主として青年期に現はれるものである。抑も理想我愛は前にも述べたやうに、自己の現状に満足しない處から出發したものである。従つて理想我愛の内容には、現實の自分に缺如して居るものが常に多い。例へば瘦せて居る人が肥滿して居る人を理想としたり、自分に缺けて居る美しい性格をもつて居る人を尊敬したりする類である。かく自分に缺けた體格や、性格などを有する人に對する憧憬の心を異類愛と言ふのである。異類愛も低級なものは外形に止まり、脊の低い者が脊の高い人を好いたり、色の黒い人が色の白い婦人を愛したり、貧乏の人が金満家を尊敬すると言ふ風であるが、これが徐々に精神的となり、進歩向上すると、高い人格者、潔白な人物に對する渴仰となり、聖者に對する信仰となり、宗教心となるのである。かく考へて見ると、吾人が理想とする高い人格も、潔い理想も、そのもとは低い自己愛から出發し、恰も見にくい毛蟲が美しい蝶となるやうに、徐々に向上發展したものである事を知る。故に家庭教育において、よくこの間の事情を察知し、無理な成長發達を促がす事なく忍耐を以て、一歩／＼と強く高く指導してやらなければならない。

**性愛の發達** 次に愛情の主流をなして居る、性愛について述べて見よう。從來性愛と言へば



汚れたもののやうに考へられて居つた傾向があるが、これは間違つて居る。若し男女兩性間に互に相惹く本能や衝動がなかつたならば、人性の生殖はやみ、人類は滅亡する外ないのである。然し何事でも同様に濫用されれば必ず弊害が起る。殊に性愛の如き尊い愛情が濫用される場合には、その害悪もまた甚だしいのである。また従來、性愛感情は青春期になつて始めて發生するものやうに考へられた向もあつたが、決してさうではなく、生れ落ちるときからその萌芽をもつて居るのである。幼児の頃の性的刺激は、全身に分散して居るものであつて、身體のどこに觸れても漠然たる快感を起すものやうである。殊に唇とか、脊髓の下部とか、兩腋などに軽く觸れてやると快感を感じるものである。性愛的刺激は觸覺ばかりでなく、視覺からも嗅覺、聽覺からも受ける事ができる。殊に盲人などの場合には、異性の音聲によつて、性的刺激を感じる事が多い。幼時における漠然たる性愛感情が、青年期に達し生殖腺の内分泌が始まると、著しく強められ、局部的となり、身體的にも精神的にも種々の變化が起り、男は男らしくなり、女は愈々女らしくなつて、性愛的熱情を帯びてくる。かく性愛の發達にも幼児期及び兒童期の性愛と、少年少女期及び青年期以後の性愛との區別がある。前者を第一次的性愛と言ひ、後者を第二次的性愛と呼んで居る。

### 性愛と親子愛

幼兒が愛情を感じる最初の對象は、申すまでもなくお母さんである。それが

四五才になり所謂物心がつき始まる頃になると、親子愛に性愛的要素が加味され、男の子は一層母に親しみ、女の子は母を愛すると同時に、父親にも強く心を惹かれるやうになるのである（この場合において女子の性愛の發展は、男子のそれよりも一層複雑であり困難である）。而してこの最初の數年間の親子間の愛情如何は、兒童の性愛は勿論、彼等の性格にまで重大なる關係を及ぼす大切な時である。例へばお母さんの愛が缺けて居る様な場合には、幼兒はその愛慾感が満足出來ないために、成長の後も愛の缺けた人となり、これに反してお母さんやお父さんに對する愛が過ぎる場合には、何時までたつても愛情が父母に固着して、他人を愛する事の出來ないやうになつたりするものである。

兒童が父母に對して有する性愛的方面の感情は、所謂本能的であつて、意識的ではない。その上この感情は常に壓迫を受けて、深く意識下に潜在して仕舞ふものであるから決して意識には上らない。而してこの壓迫の強弱がまた兒童の將來の性的傾向や性格に、深い影響を及ぼすものであると考へられてゐる。若しこの壓迫が強い場合には、兒童の第一次性愛の發達が故障を來し、延いては青年期における第二次的性愛の發達までも阻害され、同性愛などに走る事が少なくない。従つて父と娘との間の愛敬の關係が強過ぎたり、母と息子の愛情が深過ぎたりすると、それに對する壓迫も



強く加へられるため、その結果として一面においては、その壓迫に要する精力の浪費となり、他面においては第二次的性愛の強き壓迫となつて、元氣を欠き憂鬱となり、青春期に至つても異性愛の感乏しく、結婚を嫌ふやうな場合が少くない。

### 異性愛と性教育

普通の場合においては七八才になると、兒童の性愛は父母を離れて兄弟に向ふのである。處が獨り兒であるとか、兄弟全部が女の子であるとか、男の子であるとか言ふ場合には、多少第一次的性愛の發達が變則になり勝である。故に親族や近隣の異性のお友達と交はらせる事によつてその缺陷を補はなくてはならない。兒童後期になると、それまで無意識であつた性愛が、徐々に意識的となつてくる。それにつけて一時男女互に相反撥し、男子は女子を嫌ひ、女子は男子を恐れて一緒に遊ばなくなるのである。この時期は同性愛的時代とも言ふべく、男女が別々に遊ぶ時である。更に少年少女期の末期から青年期の初期にかけて、第二次的性愛に目覺めてくる。この時代の初期の男女は、この新しい感情の表現に對して不安を感じ、それはくして落付かない。さうかうする中に、彼等の性愛は一般に異性に向つて現はれてくる。即ち誰れ彼れの區別なく女子は總ての男子に注目し、男子は總ての女子に心を惹かれるやうになる。それが成熟するに従つて、性愛の對象が徐々に狭められ、特定の人に限定され、結婚となり、一夫一

婦の夫婦愛によつて完成されるのである。

上述のやうに性愛の指導は非常に複雑である。従來性教育は、少年少女の頃に至つて始められるもののやうに考へられて居つたが、さうではない。寧ろ第一次的性愛即ち幼兒期及び兒童期の指導が根本である。若しこの時代の性教育が適當になされて居れば、青年期の指導も順調に行くものである。性愛感情は勿論放縱にする事もよくないが、さうかと言つて餘り壓迫し過ぎる事も害がある。また従來性教育と言へば主として性に關する智識の教育の如くに考へられて居つたが、この考も適當を缺いて居る。性教育の根本は性感情の指導であつて、性や生殖に關する智識は、健全なる性愛感情の上に立つて初めて有効なものである。

### 母性愛とその内容

母性愛は愛情を構成する第三の要素である。母性愛も性愛と同じく本能であつて、字の如く親が子を愛する自然の情である。この感情は男女が結婚して親となつた時に最も強く現はれるものであるが、然も性愛と同じく幼少の頃からその萌芽を有して居るのである。またこの感情は決して母親に限つたものでなく、父親にもあるが概して男子より女子に強く現はれるから特に母性愛と呼ばれて居る。人形を抱きかゝへて、樂し相に遊んで居る女の子が、恰も母が子に對する様なこまやかな愛情を發露して居る様は、確かに幼兒の心の奥



底に潜んで居る母性愛の閃きである。母性愛は總ての感情の中で最も純真なものであり、神聖なものである。然しその根本において神聖な母性愛も、その發達の過程において種々な感情を交へて、複雑な感情となるのである。

父母の子女に對する情愛即ち母性愛に混入して來る主なる愛情は、自己愛、所有愛、性愛等である。母が子を愛する場合に、そこに自分の腹を痛めたいとし兒だと言ふ意識が起り、子供を恰も自己の一部分として愛する感情が這入ってくるのではあるまいか。若しさうとすればそれは自己愛である。また父母が子女を愛する愛情の中に、自己の保護の下にあるもの、自分に屬するものと言ふ考へが加つて居る事も争はれない。これが即ち所有愛である。更に父母の子女に對する愛情が、性を選び、母性愛の中に無意識的に性愛の分子が混入してくる事は既に屢々述べた所である。而して兒童が成長するにつれ、兩親の保護を要さなくなると、子女に對する母性愛は次第に稀薄になるが、所有愛や性愛などは比較的長く殘存せられ、その結果息子や娘に對する無用の干渉となるのである。また嫁や婿の選擇に當つて、兩親が子女に對して有する無意識的の性愛が種々に變形して、或は子女に對する無理解となり、或は姑が嫁に對する壓迫となつて現はれるものである。かく一口に母性愛と言つても複雑であつて、何から何まで神聖な動機から出たものとばかりは限らないのである。

### 社會愛とその發達

愛情構成の第四の要素は社會愛である。社會愛は社會本能に基づく愛情であつて、性愛や母性愛ほど強くはないが、非常に一般的な感情でありまた有用な感情である。人間は社會的動物であると言はれてゐる通り、肉體的にも精神的にも孤獨では生活して行く事は出来ない。殊に社會が進歩すればするほど、愈々協力が必要となり、友愛感情の重要性が加はつてくるのである。故に今後の社會においてこの感情の乏しいものは他人との協力が出來ず、如何に智識技能があつても落伍者となるより外ないのである。社會愛の發達の過程については、既に幼兒後期の教養(第十五章参照)の場合において述べた通り、最初は家庭内の數人から初めて徐々に隣人に及び、小學校に入學すると共に、學友や教師などに擴大せられ、成長するに従つてその數と範圍とを増加して、成人の曉には國家社會に及ぶのである。社會愛を圓滿に發達させるためには幼少の頃から出來る丈け家庭を解放し、子供の誕生日などにも家人だけでなく、お友達などを招いて他人と接觸する機會を作つてやるやうに指導する事がよい。この社會愛もまた進歩の過程において同類愛や、異類愛などの影響を受けて、複雑な發達をなすものである。幼少の頃の社會愛を見ると無差別であつて、誰れ彼れの區別なく、單にお友達を求めて遊ぶのであるが、少年少女期になるとそれが同類愛に傾き、自分と自じやうな性格や趣味をもつ同志が集つて集團をな



し、更に青年期や壯年期になると異類愛的傾向を生じ、屢々自分に缺けた性格や特徴をもつものを慕ふやうになる。

### 青少年の指導と愛

以上において罰單ながら愛情を構成する諸要素を分類して説明した。然し實際生活においては必ずしもかく明確に離れ々に存在して居るものではなく、これ等の諸要素が重複し相交錯して存在してゐるものである。従つて愛情教育において大切な事は、兒童の年齢に應じ、その時代々々に適當した各要素を、偏頗なく圓滿に發達させる事にあるのである。これを滿四才の子供について見れば、その頃の子供の本能我愛がどんな工具に發達してゐるか、彼の保護者愛や所有愛は満足されてゐるかどうか、またその社會愛や性愛の發達の状況などを知り、無理をしない程度で徐々に進歩發達するやうに指導して行かなければならない。

愛情生活の圓滿を缺く者は、精神的不具者となつて、家庭においては不孝の子となり、學校において不勉強の生徒となり、國家社會においては不忠の國民となり、犯罪や思想惡化の原因となるものである。故に愛情教育の指導は非常に重要である。而してこれが指導をなすには、單に彼等の表面に現はれた行爲を懲罰しただけではだめである。宜しく彼等の心の奥底に横はる不平不満を慰め、懲罰の代りに、飢ゑたる彼等の心を愛と同情とをもつて飽かしめてやらなければならぬ。

## 第二十八章 劣等感とその指導

### 劣等感の意義

劣等感と云ふのは、自分が他人と比較して劣つて居ると感ずる感情を言ふのである。この感情は主觀的なものであつて、必ずしも劣等なものばかりでなく、屢々生來優秀な素質をもつて居るものでも劣等感に襲はれる事がある。元來兒童は程度の差こそあれ、大概多少の劣等感をもつて居るものである。

幼兒達が劣等感を感じ始めるのは、彼等が自己と云ふものを發見する頃から始まるものである。生れたばかりの嬰兒は申すまでもなく自分と云ふ觀念さへもなく、自分の體と他の事物との區別さへ出來兼ねるものである。それが徐々に成長して滿二歳頃になると、臆氣乍ら自己意識が出來て人見知りをするやうになつてくる。更に滿三歳位になると、漸く自他の區別がはつきりとなる。それと同時に彼等は初めて力弱き自己の姿を發見し、彼等を取り巻いてゐる成人達と比較して自分が如何に無力であり、劣等であるかを知るのである。兒童が最初に劣等感を經驗する時期になると急に臆病になつたり、また甘えたりして今までよりお母さんの手を煩はす事が多くなるものである。お



母さん方が、どうして急に子供がこんな我儘になつたのだらうと心配したり、お父さんからは、餘り可愛がり過ぎるからだと言つて叱られたりするのはこの頃である。

### 劣等感の徴候

子供の劣等感が強いか弱いかは子供に尋ねても分るものではない。一般に劣等感の強い子供ははにかんだり、恥しがつたりするものである。人見知りなどしたり、また十三四歳になつても水泳を好まないやうなものも劣等感にかゝつて居る證據である。また劣等感の強い子供は好んで壁や柱などに凭たれたり、人に倚りかゝつたりするものである。彼等は臆病で冒險心に乏しく、一寸とした事にも恐怖し、依頼心が強く獨創の精神乏しく、よく人真似をするものである。劣等感を有する子供には消極的方面ばかりでなく、積極的一面もある。即ち彼等は強い功名心から、早く偉くなりたい、早く大きくなりたいとあせり、イラ／＼した気分をもち、時にはお母さんの下駄をはいたり、お父さんの帽子をかぶつたりするのである。かゝる名譽心と言ふか野心と言ふか、偉くなりたいと言ふ氣持ちは或る程度まで兒童の成長發達にとつて必要なものであるが、程度を越えた劣等感を有する場合には虛榮心となり、空想となり、妄想となり、その結果屢々自暴自棄となり、實生活に遠ざかり、遂には神経系統の疾患にかゝつたりして、自己の幸福は勿論、家庭の幸福をも破壊するやうになる事がある。

男女とも劣等感に犯されると嫉妬心が強くなり、無暗に勝氣となり、人の秘密をあばき、人を批判したり非難したりするが、その辯人が自分を嘲笑したり、非難したりすると非常に氣にかけるものである。彼は他人の失敗を喜び、自分の努力によつて自分の地位を向上させようとはしないで、他人を引き下して自から出世しようとするやうな卑怯な考へをもつものである。また彼は朝から晩まで自分の事ばかり考へ、利己的で排他的で挑戦的で、孤獨を喜び非社交的となる。一般に試験を恐れ、競技を忌避し、何んとかして自分の眞價を他人に知らすまいと努力するのも劣等感の特徴である。

### 劣等感を得る原因(一)

劣等感は年齢から言へば三四歳の子供が一番強く感ずるものであるが、特に大人ばかりの家庭に育つ獨り兒は最もこれにかゝり易い。それに次いで末子、その次は總領と云ふ順序になるのが普通である。獨り兒が比較的臆病で、依頼心強くはにかみやで、お友達が出来なかつたりするのも、末子が一寸とした事にも怒り出し短氣で勝氣なもの、總領が無暗に自分の權利を主張し、弟妹を壓迫するのも、多くの場合劣等感に基くものである。また特に病身の子供は劣等感に襲はれ易いものである。昔から「健全なる肉體に健全なる精神が宿る」と云はれて居るが、病身のものや片輪の子供は屢々強い劣等感に陥り勝である。



また顔の美醜が劣等感の原因となる場合がある。殊に婦人においては醜いと云ふ事が非常に不利の條件だと考へられ、そのために屢々強い劣等感を得、僻んだり引込思案になつたりする事がある。その他身體が非常に矮小であるとか、貧乏だとか、事業に失敗したとか、失業や離婚などのために劣等感を得る事もある。

また轉居して全く境遇が變る場合や、兒童が他の學校に轉校するときなどにも屢々劣等感に襲はれる。木や草でも何度も植ゑ替へればだん／＼元氣がなくなり、時には枯死する事もある。人間の子供も同様であつて度々轉居すると環境が變りお友達も新しくなり、その度毎に精神を勞し、肉體的にも精神的にも有害であるから、轉居轉校は成可く避ける方がよい。また轉校の時或る學課が遅れて居ると、特にその遅れて居る學課に對して部分的に劣等感を得る事がある。例へば數學が遅れて居ると、だん／＼數學が出来なくなり、數ヶ月後には自分は數學の能力が人より劣つて居るのではないかと考へるやうになる。さうなつてくると段々數學に對して興味を失ひ、不勉強となり怠惰となり、遂には數學の教科書を忘れたり、數學の時間に遅刻したり、教室において注意が散漫となり、その結果愈々數學が出来なくなるものである。かゝる場合父母や教師は、怠けるから出来ないのだと言つて叱つたり、また兒童を劣等兒扱ひにするものもあるが、これは皮相的な考へ方であ

る。この場合彼が怠慢になつたのは、數學に興味がなくなつたからである。數學に興味がなくなつたのは出来ないからである。更に出来ないなつたのは、劣等感をもつて居るからである。また劣等感をもつやうになつたのは學課が遅れたからである。人間と云ふものは負け惜しみの強いもので無能呼ばりをされるより、怠けるから出来ないのであると自分も考へ、人にも思はれたいのである。即ち兒童は出来ないから怠けるのであつて、怠慢だから出来ないのではない。故に轉校や病氣などのために學課が遅れて居るやうな場合は、一日も早くこれを取り返すやうに、家庭においても學校においても、特別に指導してやるやうに努めなければならない。若し到底恢復の見込みがつかないほど遅れて居るやうな場合には、思ひきつて他の適當な學校に轉校させて、その環境を根本的に改めるのもよい。

### 或る女學生の場合

自分の知つて居る或る女學校の二年級にMと云ふ生徒が轉校して來た事がある。處がこの生徒は他の學課は相等であつたが英語が可なり遅れて居たため、入學後よく英語を勉強したがどうも思はしくなかつた。さうする中に劣等感に襲はれ、學年の終り頃には顔は青さめ、元氣がなくなり、とう／＼落第するか他の學校に轉校するかと云ふ瀬戸際になつたが結局後者を選んで、程度の低いKと云ふ女學校に轉學した。その後その生徒の様



子を聞くと、徐々に自信を恢復し成績も向上し、再び朗らかな人となつたと云ふ事である。これを以て見ても、實力のない子供を無理に程度の高い學校に入れる事は考へものである。總て自分より優秀なお友達と一所に居ると、無暗に自己を卑下し、劣等感を得、十の實力のあるものは八、八の力のあるものは六の力しか發揮出來なくなるものである。これに反して自分と同等または少し自分より劣つて居る程度の學友間にあつて勉強すると、十の能力をもつて居るものが十二にもなるのである。昔から子供のために良き友を選べと云つて居るが、良き友と云ふのはたゞ單に優秀であればよいと云ふ譯ではない。境遇や能力が伯仲した友達が眞の良友なのである。

### 偉人の子女と劣等感

優秀な兄や姉をもつ弟妹や、偉大なる學者とか軍人とか、傑出した政治家や實業家などを父にもつ子女は、ともすれば劣等感に襲はれるものである。子供を指導するに當つて最も必要なことは兒童の素質の如何よりも、一體兒童が自分自身をどう考へて居るかと言ふ事と、また彼が自分の實力素質をどう言ふ風に活用して居るかを知らる事である。大抵の場合、子供が乗り氣になつて勉強すれば相等な成績を擧げることが出来るものであるが、どんなに天分が豊かであつても劣等感を有して居れば、結局劣敗者となるより外はない。前にも述べたように、普通人間の體力の總和は、一人百貫から百二十貫位である。然るに多く

の人はその實力の十分の一位しか出さないのである。これは力がないのではなくて體力を集中統一して發揮しないからである。大震災とか非常時とか言ふやうな時に、一時に異常な力が出ると奇蹟でもあるかのやうに考へるが、これは元々ないものが出たのではないのである。精神生活においてもこれと同様であつて我々は恐怖心や劣等感によつて折角の實力を發揮し得ないで、所謂寶の持腐れをして居るのである。天才と云ふのは精神を一事に打ち込む事の出來る人を云ふのであつて、多少素質は悪くても古人の言葉の如く「精神一到何事か成らざらん」である。これに反してどんなに素質がよくても、劣等感が強くて、精力を集中しなかつたら、あたらしい人生を無爲に過すこととなるのである。話が少し横道に入つたが、前述のやうに兩親や兄弟が偉いために、子供や弟妹が害はれると云ふ事は誠になさない事である。素質や遺傳の方面の方から見れば偉い人の子供には優秀兒が多い筈であつて、その指導の宜しきを得さへすれば、必ず立派な人物となるのが當然なのである。而して彼等を劣等感から救ふには、兩親を始め周圍の人々が子供達の前で調子を下げて、俚諺にもある通り「人を見て法を説く」やうにすればよい。三歳の子供には三歳の子供のやうに、八歳の子供には八歳の子供に應じ、青年には青年らしい興味や氣持ちをもつて接し、或は友として或は兄として或は保護者として、餘り遠く隔らず、たゞ一步前に立つて彼等を導き助けてやればよいの



である。

### 劣等感と病氣

兩親のかりそめな不注意から劣等感を子供に與へる事がある。例へばお客さまの前で、お世辭のつもりでうちの子供は馬鹿でなどと心にもない事を云ふ事がある。そんな事が度重なると、暗示を受け易い幼児たちは、自分はほんとうに馬鹿なのだと考へるやうになる。これに反して兩親が途方もない高い理想と期待とを子供にかけたり、また自分の子供は天才だなどと思ひ過したりすると、子供が劣等感を得る事がある。かゝる場合彼等は父母が自分にかけて居る理想と、現實の自分との間には非常な懸隔があつて、到底自分の力では父母の期待を満たす事が出来ないと、觀念するやうになるのである。かう云ふ場合に彼等は兩親の考へ方が悪いのだとか、無理な要求だなどと考へないで、自分が無能だから駄目なんだと、諦めて自暴自棄になるのである。さうなると怠慢位では父母に對しても申譯けが立たず、世間に對しても面目がないので、最後の非常手段として病氣となるのである。病氣も軽度のもは頭痛とか神経衰弱ですむが、激しくなると消化器系統の病氣や、呼吸器の病氣などにかゝる事が少なくない。この場合の病氣は怠慢の場合と同じく、自分は病氣だから勉強を繼續する事が出来ないのだと、自分も考へ、人にも思はせるためなのである。かゝる病氣の治療はたゞ醫藥を用ひても効果が少ない。それにはそ

の根本原因となつて居る、劣等感を除去しなければ全治するものではない。若し病氣になつてもまだ責任解除が出来ないと、愈々最後にとる手段は自殺である。かくして多くの有爲の青年が、先立つ不孝を詫びつゝこの世を去つて行くのである。

### 劣等感を得る原因(二)

また不注意なお客さんなどが一寸した事から子供を害ふ場合がある。「お坊ちゃんは十歳ですか」などと、十一歳の子供に何んの氣なしに尋ねたりする場合、子供の方では不服である、早く大きくなりたい、偉くなりたいと指折り數へて居るのに、年下に見られることは彼等にとつて堪へ難い侮辱である。これは恰も四十五十のお母さん方が、五六十に見られた時の氣持ちに似通つて居る。こんな一寸とした事でも生來過敏な子供や、また既に多少の劣等感にかゝつて居る子供等には、劣等感助長の原因となるのである。殊に顔形の事などは、よし褒めるにしても細心の注意が必要である。「まあお嬢さんはお祖母さまにそつくりですね、お眼々の邊りなどは生き寫しです」などと、お愛想のつもりで云ふお客さんの言葉が、時によると女の子にとつては非常な嘲笑のやうに聞えるのである。お祖母さまは今年七十六でお眼のあたりがもう皺くちやになつて居る、そのお祖母さまのお眼と、自分の眼とが似て居ると云ふだから、考へやうによつては悲觀するのも無理ではない。かう云つたやうな一寸とした事で



も、度重なる子供はだん／＼來客を恐れるやうになり、悪口を言はれはしないか、嘲笑されはしないかと云ふ氣遣ひから自然引込思案になつてくるものである。

### 劣等感とお友達

前にも述べたやうに友達の優劣關係から劣等感を得る場合が尠くない。例へば自分と同年輩でありながら、自分より體格の大きい子供と遊んだり、年長のいちめ子と一所に育つ兒等は、いつとはなしに劣等感に襲はれるものであるから、友達の選擇にも綿密な考慮が必要である。Sと云ふ男の子は八歳の時自分より二三歳年上のお友達と共に散歩に出かけた。處がそのお友達は口笛が大變上手であつた。Sはかね／＼自分も口笛が吹きたいものだ、種々苦心したがどうしても吹けなかつた。その時お友達はいつものやうに巧みに口笛を吹いて聞かせたので、彼れはひどく劣等感を抱くやうになり、年と共にこの傾向が強められ、著しく勝氣となり、感傷的となり、病的に偉人を崇拜して、十四歳の時には遂に自分の體内に神が宿つて居るのだと云ふ妄念を抱く様になり、殊に口笛を吹くのを聴くと失神状態に陥る始末で、遂に精神病院のお世話になるやうになつたのである。胃腸の弱いものも劣等感にかゝり易く、また數學にうとい人、計算が不得手な人なども一般に自己を劣等視し、絶えず不安を抱くものである。殊に幼少の頃充分兩親の愛護を受けなかつたもの、特に繼母育ちの子供なども劣等感に悩まされ易い。

### 自瀆行爲と劣等感

劣等感にかゝつた青年男女は自瀆行爲に陥る危険がある。自瀆即ち手淫の習慣は青年期における一般的通弊であるが、殊に劣等感を得て居る若い男女に著しく現はれる。從來自瀆行爲をもつて重大な罪惡の様に考へる傾向があつた。それがために青年達が一度この惡習に染まると非常に苦悶し、何んとかしてこの惡癖を脱しようと試み、却つて深みに入つて疲れ果て、遂には自分は意志が薄弱だから自瀆行爲が止まないのだと觀念し、遂に神経衰弱となり、愈々強い劣等感を得るに至る。これを以て見ても自瀆行爲は劣等感の原因であり、またその結果であつて兩者の間には深い關係を有して居る事を知るのである。自瀆行爲については、最近生理學の見地から見て、從來と異つた解釋が下されるやうになつた。即ち手淫は生理的に左程有害なものではなく、寧ろ手淫を罪惡視する事が却つて精神的に悪い結果を來すものであると考へられるやうになつたのである。

### 劣等感矯正の手段

劣等感を矯正するにはその原因を調査し、それによつてそれ／＼適當な方法を施さなければならぬ。例へば數學の出來ないために劣等感を感じるものには、充分數學を教へ、計算殊に暗算に熟練すれば、物事に對し判斷力を増し、徐々に自信を恢復するものである。また交友の關係から劣等感を得たやうな場合には、お友達を變へる



か、また已むを得ない場合には轉居や、轉校によつて環境を新にする必要も起つてくる。其他身體殊に胃腸が悪いために不安を感じ、劣等感を抱くやうな場合には、適當な運動をして健康を増進する事が最善の策である。如何なる場合に於ても、兒童の弱點は成る可く看過し、長所は飽くまで褒めてやるやうにすれば、自然物事に興味を感じ、従つて自信と勇氣とを獲得し、劣等感を征服する事が出来るやうになる。また社交的友情的態度を養成するやうに努めることが肝要である。これのために、機會のある毎に友達と遊ばせ、或は時々旅行をさせ、少しでも社交的態度を示した場合には、これを成長するやうに指導し、自治的生活を奨励し、両親を始め教師達は、兒童の心理を洞察して、無理な小言や、不注意な取扱ひを避け、彼等の不平不満を慰め、兒童の生活を幸福にしてやる事によつて矯正する事ができる。

### 婦人と劣等感

女子が、男子より強い劣等感を抱くのは、一般的現象であるが、特に日本の婦人にはこの傾向が甚だしいやうである。殊に婦人が初めて月經を経験する時に激しい劣等感に襲はれるものである。これは一面に於いて月經と云ふものが、自分は女であると云ふ意識を深めるのと、他面においては、一種の肉體的異狀に伴ふ精神的不安を齎らすためであるまいか。私の知人のHと云ふ娘は、四人姉妹の長姉である。父は教育家で、中流の生計を立て

て居る。彼女は小學校を卒業すると同時に、某府立高女の入學試験に應じたが失敗した、そこで已むを得ず、近所の某S女學校に入學した。彼女には二つ年下の妹がある。妹の方はMと云ふ女學校に入學して、成績もよく元氣もよかつた。それに引きかへて姉はだん／＼元氣を失ひ、殊に女學校の三年の暑中休暇に、初めて月經を経験して以來、その傾向が激しくなり、強い神経衰弱にかゝつて學校を休學する事となり、その翌春妹の入學したM女學校の三年級に轉學した。處がM女學校はS女學校よりも學課が進んでゐたので、彼女は可なり苦んだやうであつたが、別段變つた事もなく約一ヶ年を経過した。處が四年の二學期になつた頃には、人目に立つほど憂鬱になり、父は非常に心配して醫師に診察を請うて見た。その結果慢性の胃腸病だと云ふ診断を受け、一週間の半分は學校を休んでぶらぶらして居つた。さうする中にお正月となつたが、容態はだん／＼悪くなり、遂に月末には毒藥を服して自殺を計つた。それでも運よく一命は取りとめる事ができた。驚いた父なる人は著者を訪れて自殺未遂事件を話されたので、自分はその晩娘を呼んで、自殺の動機を尋ねた。彼女は初めの中は非常に興奮して居つて、たゞ「私の様なつまらないものが生きて居つたところで、親兄弟に對して心配をかける丈で、何んの價值もないのです……」と答へるのみであつたが、段々に詳しく尋ねて行くと、前記のやうな小學校時代からの經過を打明けけるに至つた。殊に著者は初



經の時の感想を突込んで尋ねた。それに對して彼女の答は自分の豫想通りであつた。丁度十五歳の暑中休暇中初めて月經があつた時は、なんともなしに悲しくて二週間も泣きあかしたと云ふことであつた。然し彼女の劣等感の原因はたゞそれだけではない、府立高女の入學試験に落第したこと、總領であつたこと、妹の方が優秀であつたこと、轉校のため學課が遅れたことなど、いくつかの條件が重つて遂に自殺を決心する迄に悲觀したのである。自分は彼の女の精神状態を一々分析して、かゝる悲觀的態度のよつて來る處を説明し、その誤謬を指摘し、劣等感の由來を意識せしめたのであつたが、その結果は非常に良好で、一時間ほど話して居る間に、話の語氣にも彼女は希望を恢復し、生活に對して新しき態度をとらんとする氣持を得する事が出來た。而して來訪の折の青ざめた顔色も消えて、歸る時にはどことなく元氣となり、血行も著しくよくなつたのを認めることが出來た。その後彼女は無事に女學校を卒業し、今は家庭の人として幸福な生活を送つて居る。

### 劣等感と嫉妬心

劣等感と嫉妬心との間には深い關係がある事は既に述べた所である。婦人が一般に嫉妬心の強いのはこのためである。同じ婦人でも何等かの缺陷のある人、晩婚の人、醜い人などは殊にこの傾向が甚だしい。彼の婦人がお化粧したり、美しく着飾つたりするのは、多くは劣等感の結果である。婦人が自分を美しく見せたいと考へるのは、自

己に對して自信が缺けて居るためであつて、信仰をもつて居るものや、自信のある婦人、學問のある人などは化粧や美服に浮き身をやつすやうな事が比較的少ない。これに反して精神的にもあれ、肉體的にもあれ、缺陷を感じ劣等感を抱いて居る場合には、この缺點を人に見せまいと努め、これを補ふに外形的、物質的手段を以てしようとするのである。これが婦人の化粧の心理である。また婦人が一般に男子より模倣的であつて、獨創力が缺けて居るのも、この劣等感に原因してゐる。されば徒に、彼等の模倣を戒めたり、おしやれを咎めたり、嫉妬をたしなめたりしても餘り効果はないものである。これは寧ろ本末を顛倒した方法であつて、それよりもその根本原因である劣等感を除去する事が先決問題である。そのためには幼時から一定の仕事と責任を分擔させ、獨立自治の快味を感じしめ、また他面においては宗教的信仰を與へ、自己の魂の尊嚴と價值とを知らしめ、自重自信の心を養成し、劣等感から解放される事によつて、問題は解決するものである。

### 劣等感のよい方面

以上は劣等感に關する悪い方面のみを見たのであるが、劣等感にも積極的な方面があり、よい一面がある。例へば適度の劣等感は社交心の基礎であり、團結心の土臺である。動物でも劣等感を少しも有しないライオンのやうな猛獣は、敢て群居の必要を認めないが、これに反して羊だとか、縞馬のやうな力の弱い動物は、自己防禦のた



めに勢ひ多勢が群をなして生活するのである。人間においても同様であつて、自分の弱さを知り、自分獨りでは不充分であり、不安であると感ずるやうな人は自然社交的となり、團體生活を重んずるものである。婦人が男子より人に親しみ易く、一般に社交的であるのは、婦人が男子より劣等感が強いからである。同じ男子でも力のある人や、お金持ちなどは、優越感や獨立自尊の心が強過ぎて、他人との交際なども兎角無頓着となる傾向がある。如何に獨立自治が大切であるからと云つても、過ぎたのは決して衰めた事ではない。殊に今日のやうに共存共榮の時代においては、協同一致相倚り相扶けて行く事が必要である。その意味においても、或る程度の劣等感や吾人が社會生活を續けて行くために是非必要な要素である。また適度の劣等感や吾人の努力の源泉である。吾人は絶えず自己を反省して、現在の自己に満足せず、進歩改善のために不斷の努力が必要である。而してその進歩に對する渴仰心や努力は實にこの劣等感から生ずるのである。

## 第二十九章 嫉妬心とその指導

### 嫉妬心とはどんなものか

人間の感情の中に嫉妬心がある。嫉妬心は幼少の頃に最も強く

現はれ、年をとるにつれてだん／＼薄らいでくるが、老年になると再び強くなつてくる感情である。嫉妬と言ふ字は女偏を書くほど男子に較べて女子に強いのである。然し男子だからと言つて、全然嫉妬心のないものはない。要するに嫉妬の感情は本能の一つであつて、老若男女の差別なく、何人でももつて居る通有の感情であると言ふ事が出来る。また嫉妬心は極めて複雑な複合感情であつて、その内には忿怒や、恐怖や、愛情や、劣等感などの諸感情を含んで居るやうである。而してその含有分量は時によつて一定せず、或る時は忿怒の感情が最も顯著な嫉妬心もあれば、また愛情から起る嫉妬心もあり、また時には前章において述べたやうに、劣等感が主なる原因である場合もあるのである。従つて嫉妬の感情は屢々他の感情と區別することが困難な場合が少くない。一體怒つて居るのか嫉妬して居るのか、愛して居るのか妬んで居るのか、自他共に認め難いことがある。殊に當事者においては、自分が他人を嫉妬して居るのだなどと言ふ事を、意識する事は一層困難である。例へば他人の成功に對して妬みを感じ、それが原因で怒つて居る場合でも、自分が嫉妬して居るなどとは考へないで、彼が威張つて居るからとか、不作法だからとか、相手の缺點を指摘し、それに對して憤慨して居るのだと言ふ風に理由づけるのである。かく嫉妬の感情は著しく主觀的で、一種名狀する事の出来ない、不安や恐怖に類似した情緒であつて、多くの場合内向的消極的感情である



が、然も必ず多少の表情や表現となつて現はれるものである。

### 動物の嫉妬心

嫉妬の感情は最も原始的なものであり、悪い感情であつて、人間ばかりでなく、動物にもこの心があると考へられて居る。私の讀んだ書物の中に猫の嫉妬心について面白い話が載せてあつた。或る若夫婦が大變伶俐な猫を飼つて居つた。若夫婦は大變この猫を寵愛し、猫もまた若夫婦を強く慕ひ、主人夫婦が外出の時などは、何時も二三丁隔つた橋の袂まで見送つて、何時間でも主人の歸つてくるのを待つて居るのが常であつた。その後若夫婦の間に子供が生れた。すると主人達の猫に對する寵愛は赤坊に奪はれて、薄らいで來たのである。それ以來猫は如何にも思案顔をして、赤坊の顔を眺め入るやうなり、數日後主人の不在中人目を盗んで、とう／＼赤ちゃんの顔を爪でひつかいて仕舞つたのである。主人が赤坊の泣聲に驚いて行つて見ると、その始末なので、したたか懲らしてやつた。すると猫はその儘どこともなく立ち去つて、再び歸つて來なかつたと言ふ事である。私はまた曾て「週間朝日」で、犬が他の犬を嫉妬して、鐵道自殺をしたと言ふ記事を讀んだ事がある。私の家にも犬が飼つてあるが、私がかの機會に、隣りの犬を愛撫してやるやうな場合には、尻尾を下してすねたやうな態度を示すのである。これ等の事實を見ると、犬や猫にも嫉妬心があると云ふ事が出来るのである。

### 幼兒の嫉妬心

幼い兄弟間の嫉妬は最も普通なものである。彼が第一に嫉妬心を抱く場合は次の子供が生れるときである。總領は生れるなり獨り兒であつて父母の寵愛を一身に受けるのであるが、弟妹が生れる事によつて、その一部を彼等に奪はれるのであるから嫉妬するのも無理はない。昨日までお母さんと一所に寝て居た子供が、一朝にしてどこの誰とも知れないものに母を奪はれて居るのを發見し、可憐なお眼めを見開いて不安を感じ、嫉妬するのは寧ろ當然である。多くの場合において年上の子供が年下の子供に對して嫉妬するのであるが、然し下の子供が上の子供を妬む事も少なくない。殊に年齢の差が少ない兄弟同志や、女の子ばかりの中に女の子が出來たときなどに、女の子が男の子に對して強い嫉妬を感じるものである。

嫉妬の感情は非常に早く現はれるものであつて、生後數ヶ月のまだ口もきけない乳兒が眼つきや顔つきで嫉妬の情を表現する事がある。兄弟間の喧嘩は大部分嫉妬の感情に基くものであつて、紐育では生後僅か二十ヶ月の幼兒が、生れたばかりの弟を打ち殺したと言ふ事件があつた。その他頑是のない子供が、嫉妬心からその弟妹を傷つけたと言ふやうな話は珍しくない事であるから、兩親は充分戒慎しなければならぬ。

### カイン・コンプレックス

東北帝國大學の丸井教授の講演の中に、兄が弟を嫉妬した面白



い話を聞いた事がある。話の主人公は東北の或る町に住む當時二十二三歳の青年である。彼は道を歩いて居る途中で、葬列や、葬式自動車に會ふと、必ず弟が死んだのではないかと言ふ豫感を受け、病的な強い恐怖心に襲はれ、急いで家に戻つて行つて、弟の安否を確かめると言ふ一種の強迫觀念に近いものをもつて居つた。それが年と共に強くなり、遂には一日に數回こんな事を繰り返し、彼の生命が脅かされるやうになつたので、教授の診断を乞ふたのである。診察の結果によると、彼は幼少の頃から弟に對して強い嫉妬心を感じ、それがだん／＼憎しみとなり、遂には弟を殺して亡きものにしようと思ひ詰めるに至つた。然し彼の良心は弟に對する不法の憎悪心の存在を許さず、これを強く壓迫して潜在意識界へ除外して仕舞つた。處がその後この潜在意識界に除外された嫉妬心が、些細な暗示(例へば葬式自動車)を受ける度毎に刺戟を受けて、彼を悩ました譯である。要するにこの強迫觀念は弟を殺さうとする無意識の嫉妬心と、かゝる不法の願望を非認せんとする意識的良心との、葛藤であると見る事が出来る。かく兄が嫉妬の結果弟を憎み、時に弟を殺害するに至ることは決して珍しい事ではない。舊約聖書の中には、カインと言ふ兄が、その弟アベルを嫉妬して殺害したと言ふ記事がある。その事實をとつてホウドキンは兄が弟を嫉妬する事を、特にカイン・コンプレクスと呼んでゐる。

### 嫉妬心と寢小便

嫉妬心の強い人は、性格が偏屈になり、何時も不愉快で不平不満を抱き、氣むづかしく、何や彼と人の感情を邪推し、惡し様に解釋し、屢々世間の人は皆んな自分に反對し、自分を憎んで居るかのやうに思ひ過し、神經過敏となり、父母に迷惑をかけ、兄弟仲が悪く、根本問題を疎略にして枝葉末節に拘泥し、協同の精神に乏しく、一生を淋しく送るものである。また嫉妬を有する兒童は復讐心が強いものである。然し兩親に對して復讐する場合は、その手段が非常に巧妙であつて、復讐されて居る父や母も、復讐して居る自分にも復讐して居るのだと云ふ事を意識する事は稀である。或る家庭に満三歳の女の子があつた。處がその次に生れたのが男の子であつたので、父母の喜びは非常であつた、その結果姉嬢は型の如く強い嫉妬心に襲はれたのである。それでも始めの内は幼い弟を愛して居つたが、弟の誕生後三週間に母親が床を上げて弟の世話をするやうになると、その晩から二ヶ年も前から寢小便をしなかつた姉が、毎夜寢小便をするやうになつた。處が或る時來客があつて夜具の都合上姉嬢が母と一所に寢た。するとその晩は寢小便をしなかつたのである。その後獨りで寢ると寢小便をし、母と一所に寢るといふも寢小便をしなかつた。かゝる場合の寢小便は確かに嫉妬の結果であつて、一種の復讐手段であると見る事が出来る。



### 嫉妬心と病氣

寝小便よりもつと悪い復讐の手段は病氣になることである。或る家庭に二人の子供が居つた。姉は七つで弟は四つ年下であつた。處がご多分に漏れず姉はお父さんの寵愛を受け、弟はお母さんの腰巾着であつた。或る晩の事姉と弟とが激しく争つた、するとお父さんは姉に最負をし、母はそれを見兼ねて弟の肩をもつてやつた。その結果父母の争となり、母は強く父に抗争して姉を抑へつけたのである。處がその晩床につくと元來感情の強い姉娘は、急に腹痛を訴へ吐瀉して苦しみ始め、母親はお蔭で一晩中姉娘の看病を餘儀なくさせられた。その後もその姉娘は屢々同様な場合に同様な病狀を現はしたので、これが嫉妬に對する復讐の手段であると云ふ事が分つた。子供が三四歳になつた時弟妹が生れると疳が出る事は前に述べたが、これなども矢張り嫉妬に基く感情の激しいものであるから、これが根本治療は公平に愛撫して嫉妬心を除去してやるより外にないのである。

### 嫉妬心と盜癖

嫉妬の復讐手段に盜癖がある。盜癖も始めの内は母や父のものを盗むに止まるが、だん／＼發展すると他人のものを盗むやうになる。私の知人で或る私立大學の教授が居る。奥さんは今より七八年前八歳と四歳の女の子を残して永眠したのである。お母さんの死去後二年ほどして繼母を迎へた。繼母は決して悪い方ではなかつた、然しなんと云つて

もなさぬ仲である。末の娘の方はまだ幼くて實母の記憶もなく、新しいお母さんになつたが、上の娘はさうは行かなかつた。その結果種々な問題が起つた。それは省略することとして、姉娘が繼母と妹に對する強い嫉妬心だけは見遁がすことは出来ない。彼女は小學校の四五年頃から家庭の金を盗み出すやうになつた。更に女學校に入學するやうになつてからはその傾向が一層強く、暫く家庭を離れて或る田舎の學校の寄宿舎に起居する事となつた。處がその頃から彼女の嫉妬心は兩親のある幸福なお友達に向けられたのである。その頃學校でも寄宿舎でも頻々として金を盗まれるので、取調べるとその娘がとるのだと言ふ事が分つた。種々尋ねて見ると金に不自由なために盗むのではなく、他人を因らせるために盗んだのである。彼女はお友達のを盗むと直ぐお友達の様子を眺め、お友達の困るのを見ると一種の痛快味を感じ、その悲しんで居るお友達を慰めてやるのが常であつたと言ふ事である。この場合の盗みは明かに他人の幸福に對する嫉妬心が根本原因である。

### 嫉妬心と兒童の性格

その他嫉妬心の強弱は、兒童の性格に深い影響を與へるのである。家族別の家庭教育の篇で述べたやうに、一家に五人の子供があるとすると、不思議に五人が五人とも性格が相異なる場合が多い。これは必ずしも素質の違いに由るものではなくて、誕生の順位による環境の相違に基因するものである。獨り兒が温厚で、お人良しなのは、



獨り兒は生れた時から家庭において競争者がなく従つて嫉妬心が弱いからである。また總領が無暗に弟妹に干渉したり、保守的專斷的性格を現はすのは、彼に年長の競争者がなく、その嫉妬心や競争心が年下の弟妹に向けられる結果である。更に次男三男は、上にも下にも競争者があるため自然に奮闘的性格となり、これに反して末子は年長者に對しては反抗的であるが、自分より年下のものや部下などに對しては親切を現はすのは、彼の競争者が何れも年長者であり、その嫉妬心が全部兄弟に向けられる結果である。

### 兄弟仲をよくする方法

世の父母たるものは子供達が兄弟仲よくして互に助けつ助けられつ、殊に親なき後は一層親しくしてくれるやうにと願はないものはない。毛利元就でなくても老いたる父母のこの世における最後の言葉は「兄弟仲よく暮してくれ」と云ふ事である。處がその兄弟と云ふものが容易に仲よく行くものではない。よく世の中で「兄弟のやうに仲がよい」などと云ふが、その逆に兄弟のやうに喧嘩し妬み合ふものはないとも言へるのである。同じ父母から生れた血を分けた兄弟が争つたり、唯み合つたりする事は誠に情ない事であるが、考へて見れば兄弟仲のよくないのにも色々深い原因があるのである。故に兄弟仲よく嫉妬心を起させないやうにするには、幼少の頃から偏愛を避け、嫉妬心を起させないやうに注意を拂はな

ければならない。

嫉妬心を起させないやうにするには前にも屢々述べたやうに、公平に取り扱ふ事が必要である。また單に公平に取り扱ふばかりでなく、何事もよく言つて聞かせて理解させる必要がある。例へば赤ちゃんの生れるのでも子供達に何も云はないで出し抜けでなく、何時頃赤ちゃんが生れるとか、赤ちゃんが出來たらお友達が出來てよいとか、お兄さんになるのだから新しいお帽子を買つて上げませうと言つたやうな風に話をもちかけ行つて、彼に赤坊の生れる事を豫告し、兄や姉となる事の喜びを感じさせて置くと、赤坊の生れるのを楽しみにして待つやうになり、何の無理も不平もなく育てる事が出来るのである。またお菓子やるにしても、何時でも小さいものばかりを先きにしないで、三度に一度は大きい子供を先にするやうに心掛けてやれば自然兄弟喧嘩は少なくなる。また前に述べたやうに嫉妬心は劣等感と深い関係を有して居るのであるから、嫉妬心を起させないためには、劣等感を與へないやうに氣をつける事が大切である。更に嫉妬の感情は兒童の我儘勝手や利己心と密接な關係をもつてゐる。故に嫉妬心を矯正するにはその根本である利己心を矯めてからなければならぬ。それがためには、平素から社會的態度の養成に努め、また戶外の運動に親ませて、身心の健康を保つやうにする事が肝要である。



## 第四篇 環境より觀たる家庭教育

### 第三十章 緒言—遺傳及び素質について

#### 素質と遺傳

人間の性格の根本をなすものは各個人の素質である。而して素質は遺傳に由つてその両親から受け繼ぐものである。素質が悪くてはどんなに努力しても立派なものになる事は出来ない。「玉磨かざれば光なし」と言つて居るが、玉なればこそ磨けば光が出るのであるが、瓦はどんなに磨いても光る氣遣ひはない。鼻の低い子供はいくら榮養をよくしてやつても鼻を高くする事は出来ない。これに反して背の高い人の子供は榮養が左程よくなくても、矢張り相當に背が高くなるものである。瓜の蔓に茄子のならないのも、蒿の子がいつでも蒿で決して鷹になれないのも、みな遺傳の然らしむる所である。

#### メンデルの法則

遺傳を始めて系統的に研究したのは、オーストリアの僧侶メンデルと言ふ人である。彼は今より六十餘年前に植物の雜種栽培によつて、遺傳の法則

を發見したのである。メンデルの研究は豌豆によつてなされたのであるが、こゝには分り易いために、白兎と黒兎の交配の例によつてその大略を述べて見よう。純白の兎と眞黒の兎とを掛け合せて、四匹の小兎が生れたとすると、大體においてその中に白と黒とを等分に遺傳して、斑フチ又は灰色の兎となるものと、片親に偏してそれ／＼白色又は黒色の兎となるものがある。この場合白兎には黒兎の素質因子は、全然なくなるかと云ふと決してさうではない。現はれこそしないが、白兎の生殖細胞の内には、黒兎の素質因子が劣性因子となつて潜在して居るのである。また黒兎の場合には黒色因子が優性となつて現はれ、白色因子が劣性となつて潜伏して居ると云ふのである。處が潜伏して現はれなかつた劣性因子が、屢々二代三代を経た後突然優性となつて現はれる事がある。例へば前述の白兎と他の白兎とを交配した場合に、時々親兎に似てもつかない黒兎が生れることがある。これは白兎の生殖細胞の中に潜伏して居つた、劣性の遺傳因子が優性となつて現はれたからである。メンデルはこの事實を隔世遺傳の法則と云つて居る。隔世遺傳の法則は兎や植物に限られた譯ではない、人間の場合においてもほとんど同様であつて、両親の素質は必ずしも、その儘子女に現はれない場合がある。然し両親の素質が直ちに子供に現はれないからと言つて、全然消失して仕舞うものでなく、劣性因子として子孫の生殖細胞中に潜伏して居つて、二代三代を経て忘れた頃になつて突然



現はれる事がある。米國の南部地方に行くと白人とニグロの混血の子が澤山居る。その中には顔形は勿論皮膚の色や眼の色に至るまで、どう見ても白人としか見えない美人がある。處で彼等がシカゴとかニュー・ヨークなどの異郷に行つて、知らん顔をして白人と結婚する場合がある。するとその子供に眞黒な子が生れ、お里がばれて離縁になると云ふ悲劇が演ぜられる事がある。世の中には凡人に非凡の子が生れたり、また偉人の子に親に似ない不肖の子が生れたりする例があるが、これ等はメンデルの隔世遺傳の法則によつて説明する事が出来るのである。

### ゴールドンの研究

遺傳學の研究者として、また優生學の泰斗として有名なフランシス・ゴールドンは、主として精神的方面(智能)の遺傳について研究した。彼は數千人の各方面に傑出した人々の家系を調査して、矢張りメンデルが発見したとほゞ同様な法則が、智能や精神的遺傳にも働いて居る事を立證したのである。例へばバツハと云ふ有名な音樂家の家系について見ると、その父も叔父も音樂の名手であり、その子供達も音樂家として名をなして居るものが多い。即ち先妻の子五人の中三人までは音樂家であり、後妻の子十人中二人が音樂家として立つて居る。文豪マコレーの祖父も曾祖父も傑出した文人であり、親族の中からも多數文學者を輩出して居る。また政治家として有名なピット父子について見ると、若冠二十五歳で大英國の宰相となつた

小ピットの叔父も、その子も共に宰相となつて居る。即ち一族の内から殆んど時を同じくして、四人のものが宰相の位に登つた譯である。伊太利の畫家チチアンの血族にはラファエルとヴァンダイクがある。また進化論で有名なダーウインの家系を見ると、約百年の間にその一族の中から十六人の世界的科學者を出して居る。フランシス・ゴールドン自身も彼の從兄弟に當つて居る。これを日本の例に徴して見てもその例に乏しくない。例へば有名な頼山陽の父に春水あり、伯父に春風と言ふ人が居つたが共に儒者であつた。またその子支峰三樹三郎も父山陽の衣鉢を繼いで儒者となつた。伊藤仁齋と言ふ人は誰も知る一代の碩學である。その仁齋に五人の子供があつたが、五人が揃ひも揃つて相當な學者となり、後世伊藤の五藏と言はれるほどの秀才揃ひであつた。これ等の事實を見ても天才は遺傳すると言ふ事が出来るのである。

### 體質の遺傳

智能の遺傳と體質の遺傳とを比較して見ると、體質の遺傳の方が遙かに顯著である。親子は顔形は勿論歩きつきや、毛髪や皮膚の色や、内臟諸機關に至る迄類似して居るものである。生理的遺傳の中で特に目立つものは畸形の遺傳である。畸形は一般に劣性であつて正常な人と結婚すると表面に現はれない場合が多いのであるが、多指症と言つて指が六本あるもの、短指症と云つて三つある可き指の骨が二本しかないものは、何れも優性であつて、正



常人人と結婚しても兩親の一方が多指や短指の畸形を有すると、その子供に同様の畸形が再現し易いのである。また劣性遺傳でも兩親共同質の劣性遺傳をもつて居る場合には、優性となつて出現するものである。昔から血族結婚を嫌ふのは、道徳的理由の外に同質接合の結果畸形兒が生れる可能性があるからである。この外指の曲つたもの、人差指だけ短いもの、左キキ、血液の型などは遺傳の率が多いと考へられて居る。殊に興味のあるのは色盲の遺傳である。色盲は伴性遺傳と云つて、主として男性のみに現はれる遺傳であつて、女子に現はれる場合は稀れである。處がこの遺傳は必ず女子を通じて起るのである。色盲の内には全色盲と云つて色彩感覚が全然缺けて居るものと、部分色盲と云つて一部分丈の色彩感覚が缺けて居るものがある。部分色盲の内には特に赤色とか黄色とかの單一色彩に對する感覚の缺陷と二三の色彩感覚を同時に缺くものがある。部分色盲の内でも多いものは赤色色盲である。色盲の研究は約五十年前ほど前からの事である。汽車汽船の危険信號が分別出來ないために、犠牲者が出るので調べて居ると、赤色に對する色盲だつたと言ふ様な事から、だん／＼八釜しくなつたのである。色盲の人をイチゴ摘みにやつたら、青い未熟なものを摘んで來て困つたと言ふ様な笑話もある。また鳥眼と言つて夕方になると物の見えなくなるものや、近視眼なども遺傳するものである。

ピヤソン氏はゴルドン氏の後を繼いで、智能遺傳に關してオクスフォード大學の學生の學業成績を統計的に調査し、父子兄弟間の遺傳の相關々係を研究した。それに據ると、同じ兩親から生れた同性の兄弟の精神的類似率は五割三分となつて居る。また獨逸のペテルスが千三百人の兒童について親子間の智能遺傳の相關々係を研究した結果、親子間の智能類似率が非常に高い事を發見した。殊に最も類似して居るのは母と娘である。その次に母と息子との智能類似率が高く、次が父と娘、最も類似率の低いのは父と息子であると云つて居る。これによつて見ると、智能の遺傳においては母親の素質如何が重大なる關係を有する事になるのである。

### 遺傳の一般的法則

遺傳には二三の一般的法則がある。その一つは生後に得た後天的の特徴や缺陷は遺傳しないと云ふ法則である。例へば庭球選手の右腕は太くなるものであるが、それがために子供の右腕が太くなると言ふやうな事はない。また何かの事故のために、片脚を失つた場合にその人の子供の足に故障があるかと言ふと、そんな事は絶対にない。それと同様に智能技術の方面においても自己一代に習得した能力は遺傳しないと考へられて居る。例へば父が英語の大家であつても、その子が英語に對して特種の能力を受け継ぐと言ふやうな事實はない。親がどれ程教育を受けて立身出世しても、子供が教育を受けなければ無學文盲なのは當然で



ある。次に遺傳の平均化の法則と云ふのがある。この法則に據ると遺傳は善惡高低何れの場合にも平均に向はんとする傾向があると言ふのである。例へば背の高い人の子供は親に似て背が高いが、親より多少低くなり、これに反して背の低い人の子供は親に似て相變らず背が低いのが普通であるが、親より多少高くなつて平均に近づくのである。智能遺傳の場合においても同様であつて、智能の優秀な人の子供は矢張り優秀ではあるが両親に及ばない。これに反して智能の劣等なものも、親よりも増しとなり、平均に接近して行く傾向がある。この外、遺傳の變化性と言ふ法則もあるが、こゝにはその説明を略することとする。

### 優生學と斷種

遺傳は文字通り遺傳であつて、過去に對しては人力をもつてどうすることも出来ないものである。然し將來の問題に對しては配遇者の選擇により、多少の改善をすることが出来るのである。農作物や家畜などについては、早くから種の改良が行はれて居るが、人種の改善は今もなほ遅々として進歩しない。最も人種の改善についても優生學と言ふ學問があつて相當に研究されては居るが、過去の傳統や道德問題などに煩はされて實行は中々容易ではない。人種の改善は優良なる配遇者の選擇や、不良なる遺傳素因保有者の結婚禁止又は斷種に依るものとの二つの方法がある。斷種と云ふのは去勢即ち男子においては輸精管の切除、女子におい

ては輸卵管の切除によつて生殖を不能ならしめる方法である。斷種運動は米國において最も早く行はれ、千九百九年にインデヤナ州において、低格者生殖阻止法案が通過して以來、今日では過半数の州において斷種法の制定が見られて居る。試みに加州の斷種法を略述すると(一)精神病患者、精神薄弱者、癲癇、性的倒錯を有するもの、微毒性患者(二)三回以上の累犯者又は二回以上の強姦犯人(三)白痴にして両親又は後見人の請求ありたるもの、(四)其他の精神病患者、變質者に對しては斷種する事が出来る規定になつて居る。我國においては現在斷種法の規定なく、優性學の研究も歐米各國に對して多少遜色があるやうであるから、今後國家社會の福祉のため一層この方面に對する研究を必要とする。また個人としても各自の體質を知り、配遇者となる可きものの體質及び智能の遺傳を考慮に入れ、生理的にも心理的にも吟味する事が望ましいのである。

### 體質と智能との相關々係

智能の優劣が遺傳するものである事は既に述べた通りである。然らばどう云ふ風に遺傳するかと言ふと、これに對して昔から種々の議論が行はれて居る。總括的に云へば遺傳は生理的遺傳であると云ふ事が出来る。即ち或る兒童の智能遺傳が優秀であると云ふ事は、その兒童の神經細胞や、血液や内分泌其他の生理的條件が、他の子供より優つて居ると言ふ事を意味するのである。また或る子供が感情的な素質をもつて



居ると言ふ事は、その兒童の交感神経が昂奮し易いとか、副腎や甲状腺が肥大して居るとか、或は内分泌腺の機能が亢進するやうな生理的傾向の遺傳を有して居る事を意味するのである。

### ヒポクリテスの液體説

人間の生理的狀態と、智能及び感情との相關々係、即ち素質の研究は遠く西紀前五世紀頃から、希臘のヒポクリテスに依つて唱へられた。彼は人間の素質の差を、人體内にある諸種の液體の作用に歸したのである。即ち人の體内にある膽囊や肝臓や脾臓などから分泌される粘液や血液などの、温冷濃淡多寡が素質の基礎となるものだと考へたのである。彼はかゝる標準から人間の素質を四種別に分類して、胆汁質、多血質、粘液質、神経質と呼んだ。例へば血液は温かくて身體を熱し、これに反して粘液は肝臓から分泌される白色の液であつて、體を冷却させる作用を有して居ると彼は考へた。従つて血液の分量が多くて薄く、粘液が少量であると多血質の人となるのである。多血質の人は浮氣であつて、精神の活動が速くて弱く、輕率で忍耐力に乏しい。反對に粘液の多い人即ち粘液質の人は、冷性で精神の働きが遅くて弱く不活潑である。また胆汁は膽囊から出て来る熱い液狀の分泌物であつて、胆汁質の人即ち胆汁の多い人は熱烈な氣象を有し、傲慢剛情であつて、忍耐力が強く、思ひやりのない性格を有するなど考へて居つた。

### 神經生理説の濫觴

その後鍊金術及び冶金術の發達に促がされて生理學もその影響を受け、人體は諸種の原素の結合から成つて居るものであると考へるやうになつた。彼等は素質の個人差を各自の人體の組成要素の相違に由るものであると説いたのである。例へば體内に水銀の多い人は樂觀的であり、硫黄分の多い者は怒り易く、鹽分の多い人は悲觀的であるなどと牽強附會の事を説いたのである。更に降つて近世醫學發達の初期には、素質の基礎を血液の組成分及び血壓に歸した。その説に據ると血液が薄く血壓が低いと樂觀的となり、これに反して血液が濃厚で血壓が高いと悲觀的の人となると言つた。處が十八世紀の中葉にハラーと云ふ人が出て、従來の液體(素質)説を盡く覆へして新説を唱へた。彼は人間の智能や感情の基礎は、血液や粘液などの液體よりも寧ろ、筋肉や神経などの感受性如何に由るものであると考へた。この説は彼の弟子達に依つて、更に布衍され、個人の優劣を外界の刺激に對する感受性(反應)の遲速疎密などに歸するやうになり、所謂神經生理學の基礎を築いたのである。

### 身長體重頭圍と智能

ゴールドン氏が身長及び體重と智能との相關々係の重要性を述べて以來、多くの人々がこの問題を統計的に又生理的に研究した。研究の初期においては身體の重いもの身長の高いものが概して智能が優秀で、これに反して體重の軽いもの、



身體の小さいものは劣等であると信ぜられたが、その後研究の進むに従つてだん／＼その反證が擧げられ、「大男總身に智慧が廻りかね」などと云つて今日では餘りこの説が重んぜられなくなつた。次に頭腦の重量や頭圍の大小と、智能との關係が注目される様になつたのである。常識的に考へて見ても頭の大きいものは優秀で、反對に頭の不格好なものや、矮小なものは劣等兒である事が頷かれる。これを數字で示すと類人猿の頭腦の總量は平均六百二十一立方センチ、濠洲の土着人は千三百四十五立方センチ、亞弗利加の黒人は千三百五十立方センチ、北海道のアイヌ人は千四百六十二立方センチ、近代の文明人の頭腦は千五百立方センチ内外となつて居る。同じ人種の内でも一般に男は女より大である。また故桂太郎公や夏目漱石氏などの頭腦は特に大きかつたと言ふ事である。然し頭が大きいからと言つて、必ずしも偉人天才の素質だとは言はれない。病的に頭が大きくなる場合がある。腦水腫と云つて頭が福助のやうに大きくなるなどはその一例である。

### 骨相學及び性格型態學

頭腦と智能との相關論が一時歐洲全土を風靡した骨相學へと進んだのは寧ろ當然の歸結であつた。骨相學の代表的人物はガルと言ふ人である。この學説は智能定位説とも云ふ可きものであつて、人の素質や才能は大腦皮質部の發達、頭蓋骨の隆起に關係があると考へ、頭腦を二十七の部分に分ち、各部分にそれ／＼の才能を配

置した。例へば前額上部は計算的能力の中腦であり、上額頂部廻轉は聽覺中樞であると斷定し、その部分が特に發達して居る人は數學者に適するとか、又は音樂的天才であると云ふ様な事を言つたのである。骨相學と並行して性格型態學とも云ふ可き研究が主として佛蘭西の學者間に起つた。彼等は人間の身體を頭部、胸腹部、臀部に大別し、各部分の發育の状態や特徴によつて性格の先天的素質とした。かくして性格を六つに分け、榮養型體質、生殖型體質、血液型體質、神經型體質、筋肉運動型體質、淋巴型體質と呼んだ。その後更に身體を細別し、頭部を頸部、顎部、鼻耳眼額などの部分に分ち、頸の長短や顎部の形狀、鼻の高低や眼つき、耳朶の大小などによつて、一々性格や氣質の先天的素質の表現であると考へるやうになつたのである。犯罪心理學者として有名な伊太利のロンプロゾーも性格型態學派の一人と見ることが出来る。彼は多數の先天的犯罪者や道德的精神薄弱者に就いて研究し、その原因を身體の解剖學的乃至機能的缺陷に歸した。ロンプロゾーの同國人であるデ・ギョヴァンニもまた型態學派の一人である。彼は人間の型を、細長い人即ち身長が胸圍に優つた人、胸腹部の大きいズングリした人と、普通の人との三種類に區別し、體の細長い人は神經系統の發達を意味し、胸腹部の廣い人は新陳代謝及び榮養系統の發達を意味し、前者は智能の優れた感情家であり、後者は鈍感の人であると考へた。彼がかゝる推論をなしたのは相當の生



理的根據があるのである。彼の説に據れば四五歳以前に肥満する子供は概して智能が劣等であり、これに反して痩せ型の子供は一般に智能が優秀であると言つてゐる。この學派の人で最後に現はれた學者は獨逸のクレチユメルである。彼は千九百二十一年に「體質と性格」と云ふ書を公にして性格型態學に一大光明を與へたのである。クレツチユメルは精神病の醫者であつて、自分の取扱つた精神病者の體質を比較研究した結果、體質と精神病との間に一定の關係がある事に注目し、體質を四種の型態に分類し、肥満型、痩せ型、闘士型、異常型と名づけ、これに夫々特有の精神的特質を賦與して居る。

### 内分泌と性格

次にベルマン一派の人々は内分泌腺の機能と性格との間に重要な關係がある事を指摘して居る。彼は性格を内分泌腺によつて、生殖腺型、甲状腺型、副腎型、胸腺型、腦下垂體型などに分類し、一々その型による性格を擧げて居るが、その説く所が抽象的であつて多くの假説を含み信頼するに足りない。内分泌説と關聯して「性の心理」の著者ハヴエロツク・エリスは、人間性を男性的素質と女性的素質との二つに分類し、總ての人はこの二の範疇の何れかに屬す可きものであると主張して居る。而してこの區別は、主として生殖腺の内分泌の差別に由るのであつて、男子が男性的素質をもつて居るのはその生殖腺の内分泌により、また女子

が女性的素質を持つのは、女子の生殖腺のホルモンによるのであると考へて居る。更に彼は男性的體質と女性的體質との外形的標準として、胸幅と腰幅とを擧げて居る、即ち胸幅の廣いのは男性的體質の表現であり、腰巾の廣いものは女性的體質の表現であるとなし、胸幅や腰幅を計つて或る男子は八十パーセント男性的であるとか、或る女子は六十パーセント女性的であつて四十パーセントは男性的であるとか言ふのである。更に身體の姿勢、髯や恥毛の發生の状態、特に音聲の特質、筋肉發達の狀況などによつても、男性的體質及び女性的體質を區別する事が出来ると言つて居る。

### 生物化學的研究

カノンは生物化學の立場から人體を研究し、唾液、胃液、尿汁及び血液など、どの化學的反應によつて體質を區別した。これに據ると分泌液の反應が酸性である場合と、アルカリ性である場合と、中性である場合との三つに區別することが出来る。唾液や尿の反應がアルカリ性の人は一般に感情的であり、これに反して酸性反應を呈する人は概して冷性の性格の持主であると云つて居る。また血液の反應が酸性の人は感情的奮闘家であり、アルカリ性である場合には温和な性格の所有者であると言ふのである。

### 血液型と性格

ランドスタイン氏によつて、人間の血液に數種の型がある事が發見されて以來、内外の學者がこの血液型を種々の方面から研究して居る。殊に最近は



血液型と性格との間に密接な関係のあることに注目されて來た。血液型をA型（A型血球とB型血清を含むもの）とB型（B型血球とA型血清を含むもの）O型とA<sub>1</sub>B<sub>1</sub>と型の四種に分けて居る。血液型と性格との相關々係に關する古川竹二氏の研究はこの方面における獨歩的のものである。その説に據るとA型の人は内氣で諦めが悪く、悲觀的で神經質に傾き、B型の人は多血質な傾向を有し感情的で怒り易いが、豪放磊落であきらめがよく、O型の人は粘液質に相當して理智的で意志が強く、A<sub>1</sub>B<sub>1</sub>型の人は表面B型で豪放磊落であるが、内心はA型で綿密細心で愚痴っぽいと言つて居る。

### その他の研究

以上の外、人間を感覺の強弱又は觀念型などに分け、その類別によつて異つた性格的特徴を附與して居る。例へば聽覺の特に秀いでた人は聽覺型と言つて、音樂的素質を有して居るとか、視覺の特に發達した人は視覺型と言つて、學者や畫家に適するとか、運動型の人は特に筋肉を動かす事によつて、理解や學習を助け、手工に巧みであるとか、實業家、發明家、運動家等に適するなどと考へられて居る。また性格の構成は感覺だけでなく、想像力、記憶力、思考力などの強弱遲速によつても影響づけられる事は論を俟たない。

### 環境の重要性

著者は以上において、過去二千年間に亘る、遺傳と素質に關する諸家の説を簡単に紹介した。各學説は何れも傾聽に値し、多くの眞理を含んで居るものであるが、然も何れの説にも一長一短があつて、不完全たるを免れないと言つて差支ない。有體に言へば、素質と智能及び感情との相互關係に關する生理的性格學とも云ふ可きものは、今以て完成されて居ないと言ふ事が出来るのである。従つて今日の場合遺傳及び素質の教育的價値を偏重する事は、決して當を得たものとは考へられない。著者は現在の場合に於いて、遺傳や素質よりも、環境の方が一層重要であると考へるものである。

## 第三十一章 環境か遺傳か

### 遺傳説と環境説

家庭教育において、環境が遺傳より大切であるか、それとも遺傳の方が環境よりも大切であるかと言ふ問題は、我々の知らんとする關心事の一つである。生物學者や優生學者は口を揃へて、遺傳即ち素質は人間の將來を決定する總てであるやうに言ふ。彼等は遺傳の力を萬能だと考へ、一寸とした性格上の缺陷も、直ちにそれが遺傳の結果だと云ふ風に斷定し、絶望的な宿命的悲觀的態度をとるのである。例へば兒童の學業成績が悪いと、その原因の如何を深く調査もせず、子供の勉強の嫌ひなのは伯父さんに似たのだと考へたり、子供



が腕白だと、父親の腕白が遺傳したのだから仕方がないと諦めたり、娘がだらしがないと、お祖母さんがだらしなかつたから、その血統を引いて居るのだと言ふやうな具合に、盜癖も遺傳、朝寝坊も遺傳、寝小便も遺傳だと片づけ、無意識であるかも知れないが、自分の家庭教育の不始末を棚にあげて、一から十まで、遺傳に責任を轉嫁して仕舞ふ。甚だしいのは嘘つきも遺傳、食物の好き嫌ひまで遺傳にかこつけるのである。然し前章にも述べたやうに、遺傳の原理は學問上から見ても、決して確定的のものではなく、たゞ漠然たる可能性に過ぎないのであつて、殊に精神的遺傳は生理的遺傳よりも、一層漠然として居つて、輕々に遺傳を云々する事は出來ない。また生理的遺傳と精神的遺傳とは、必ずしも並行して居ない。例へば顔形がお祖父さんに似て居るからと云つて、精神的素質もお祖父さんに似て居るとは限らないのである。

この問題について我々は農夫に學ぶ必要がある。農夫は農作物を作る時に、種が大切か、それとも土地や肥料や、太陽の光線や雨露が大切であるかと言ふ議論を要しない。種子の大切な事は當然であるが、然もより以上苗床や肥料や、除草などが重要な事を知つて居る。たとへどんな良い種子を蒔いても、砂地や茨の中では、よき實を結ぶ氣遣はない。これに反し多少貧弱な種子でも、肥沃な地に蒔き、手入れがよければ相當な收穫を得るのである。

### 遺傳よりも環境

或る體質や性格が、先天的遺傳であるか、それとも後天的のものであるかと言ふ事を、判別するのは決して容易でない。然し最近科學の進歩につれて、これまで遺傳だと考へられて居つた事が、だん／＼覆されて、後天説、傳染説に轉向しつゝあるのである。昔は肺病は遺傳であると考へられて居つた事もあるが、今日では肺病は遺傳するものではないと言ふ事になつた。また癩病も遺傳するものだとも今日でも信じて居る人が少くないが、これも遺傳でなく、傳染であると言ふ事になつて來たのである。殊に性格や精神的方面においては、近來精神分析や精神衛生學などの進歩につれて、從來遺傳だと考へられて居つた事が、明るみへ出されて、全然家庭教育や環境の結果であると言ふ事が、立證されるやうになつた。その一例として都を去る程近い片田舎に、今年二十八歳になる青年が居つた。彼の牛乳嫌ひは有名なものである、どんな大病にかゝつても、死んでも牛乳は飲まないと云ふのである。然るに彼の母親もまた牛乳嫌ひであり、親戚にも牛乳の嫌ひな人があるので、彼の牛乳嫌ひは遺傳であると言ふ事になつて仕舞つた。ところが最近彼は幼時の病氣が再發しふとした事から、二十三年前即ち彼が五歳の頃、同じ病氣で惱まされた時の記憶が復活し、その結果彼れが牛乳嫌ひになつた原因が判明したのである。それによると彼の五歳の時、病氣中母親が苦い藥を飲ませるため藥と一所に牛乳と砂糖とを混ぜて



のませた。それが數回繰り返されるうちに、彼は遂に苦い藥と共に牛乳を飲む事も断然拒絶したのである。以來二十八になる今日まで、牛乳は一滴も口にしなかつたといふ譯である。こんな實例は決して少くない。或る青年が子供の頃から、緊張したり、心配事があつたり、感情が立つてくると、手が震へる癖があつて困つて居つた。ところが、その青年の父親にも同じ癖があつたために、長い間彼も人も、全く父親の遺傳だと思ひ込んで居つたのである。然るに年の進むに従つて彼の癖は愈々烈しくなつて、放任して置かれなくなつたため、遂に精神分析學者を煩はすこととなつた。分析の結果によると、彼の癖の原因は彼が五六歳の頃に遡るのである。當時彼は手に悪性の腫物をでかして、切開を受けた。お醫者さんが切開手術をして居る間、父親は震へる手をもつて一心不亂に、子供の手を抑へて居つたと言ふ事である。これがそも／＼の原因となつて、以來彼は何か心に配事のある場合や、一生懸命になつたり、試験場に入つて字を書く時などに、手が震へるやうになつたのである。かくしてこの青年の手の震へるのも遺傳でなくて、傳染であつたと言ふ事が判明したのである。

### 遺傳過信の悪影響

或る人々は遺傳を迷信に近いほど信じて居る。その結果種々な悪い影響を兒童に與へるのである。例へば祖父が大酒家であつた場合に、孫も酒

飲みになりはしないかと取り越し苦勞をしたり、また伯母さんが虚榮心の強い人であつたから、娘も虚榮心が強くなりはしないかと案じたりする場合に、親は子供を戒める積りで「お前はお祖父さんに顔がよく似て居るので、お祖父さんのやうにお酒のみになりはしないかと心配です、どうかお祖父さんの様になつてくれるな」と言つて警告すると、却つてそれが暗示となりと仇なつて、酒飲みになつたり、またそれほどではなくとも、両親の間に不用意に交はされる一寸とした昔語りや暗示となり、子供の性格に色々な影響を與へ、恰も遺傳でもあるかのやうに、知らず／＼の間に子供に傳はる事實を見るのである。今年八つになる總領が、木登りをしたり、壁に落書をしたり、弟をいぢめたりするので、たしなめようとすると、「お父さんだつて子供の時いたづらだつたぢやないか、屏風に書いてあつた虎を弓で射て、澤山穴を開けたぢやないか、僕みんな知つて居るよ、」などと父の昔語りを小耳にはさんで置いて、いたづらをするのは、恰も親譲りの權利でもあるかのやうな顔をして居つた。先日電車の中で四五歳の男の子に、乳を飲ませて居つた母親が、やゝきまり悪る相に「この子の父親は六つまで、乳を飲んだと言ふから、この子も親に似てその頃まで乳を飲むんでせう」と話して居るのを聞いた。自分の不始末を棚に上げて、無責任と言ふか無智と言ふか、誠に困つた母親かなと著者は嘆息したのである。



### 或る養女の場合

著者の知つて居る或る家庭で、生後數週間経つた、可愛い女の子を或る人を介して養子に貰つた。初めの間養父母は、養女の身元を知らない方がお互のためによいと言ふので別に知らうともしなかつた。養女は十歳になる頃まで養父母の愛に育まれて、素直にすく／＼と成長したのである。處がその頃ふとした事から養女の親元が知れ、それ以來養父母の心配は一通りではなかつた。養女の實母と言ふのは非常に淫奔な女で、養女はその私生兒であつた。父親と言ふ人も、また有名な無頼漢で前科者である事が分つた。かゝる父母の血を受けた養女の行先きは、どうなるものであらうかと言ふ養父母の不安が、遂に養女に對する素振りとなり、遂には言葉となつて現はれ「お前の母親は淫奔な女であつた相だから氣をつけなさい」とか「お前の實父は無頼漢だから、お前の行末が案じられる」と言ふやうな事が、屢々養女の耳に入るやうになり、娘の心も何んとなく不安な氣持が募つて來て、十六歳の時にとう／＼家を飛びだし、眞物の不良少女になつて仕舞つた。

### 孟母三遷の教

以上の實例をもつて見ても、從來先天的遺傳だと思はれて居つた事が、全く間違ひであつて、後天的であり、また家庭教育の結果であると言ふ事が分るのである。昔から「氏より育ち」と言ふ諺があるが、夫婦でさへ十年二十年と同棲して居ると、

「似たもの夫婦」と言つて、ものの言ひ振りから、歩き振りに至るまで、似るものであつて、環境の感化影響の大きい事は驚く程である。賢母の例に引かれる孟子の母は、環境を非常に重ぜられた。我が兒の教養のために孟母は三度もその居を遷したのである。今日私共は居を定めるにも、また轉居するにも、多くは父母の都合が主であつて、子供達の健康や教養が顧みられないのは遺憾である。孟子が長じて修業に出で、學業半ばにして歸宅したとき、孟母は自分の織つて居つた機を斷つて且つ戒め且つ勵ましたと言ふ事である。かく子供に一寸とした悪い傾向が現はれても母親は決して失望したり、遺傳にかこつけたりしてはならない。その原因を家庭教育や環境に發見し、また自から反省し、改む可き事は改め、環境を改善し、身をもつて教育に當らなければならぬ。

### 遺傳的缺陷と補償

人間の體は誠に微妙に出來てゐるもので、よし遺傳的缺陷があるからと言つても、必ずしもそれが不利であるとは限らないのである。例へば左利について考へて見ると、左利は明かに遺傳的缺陷であるが、それが必しも不器用の原因とはならない。私の知つて居る範圍においては、左利の多數は普通人以上に器用であり、又能書家である。野球の選手などを見ても、可なり多數の左バッターが居る。左利の百分率は時と場合とによつて多



少の差異はあるが、大體三パーセントと見る事が出来る。處がベースボールの選手中には左利が二十乃至三十パーセントとなつて居る。これに由つて見ても左利は不利でないのみか、却つて非常に有利であると言ふ事になるのである。醫師の経験によると、腎臓病のため、一方の腎臓を手術して摘出すると、他の腎臓が非常に發育し、殆んど二倍大となり、その缺陷を補うて餘りがあるのである。私達が手や足に傷をしたとか、また手術を受けた場合などにおいても、同様であつて、損傷箇所の細胞は、その缺陷を補填するために、非常な活躍をなし、その結果新しく出來た皮膚組織は、却つて前より厚く丈夫になる。かゝる場合に、疵あとが目立つのは、新しく出來た皮膚が他の古い皮膚より却つて厚く丈夫になるためである。

### ベトウベンの場合

音楽界の第一人者として、誰も知つて居るベトウベンは、從來の傳記々者の傳ふる所に據ると、餘り音楽に熱中し過ぎた結果耳を害し、三十歳臺で聾者になつたと言はれて居る。然るに最近の研究によると、これは誤傳だと言ふ事になつた。彼の耳疾は少年時代からの痼疾であつたのである。それによると彼は音楽に熱中したために、耳を悪くしたのではなくて、耳が悪かつたから音楽に熱中したのである。自然界に補償の法則と言ふものが働いて居るやうに、精神界にも補償の法則が働いて居るのである。世間では學者は讀書を

し、勉強をするから、近眼になるのだと考へて居るやうであるが、事實はさうではない。學者になる様な人は元々近眼な人が多いのである。彼等は眼が悪いから勉強をし、學者になるのであつて、學者だから眼を悪くするのではない。これ等の事實は日常私達の周圍に居る人を注意して觀察して見れば分る事である。實際近眼の人に不勉強な人は非常に少ないのである。補償の法則から言へば耳に缺陷があれば耳に、眼に缺陷があれば眼に、全身のエネルギーが馳せ集つて、その缺陷を満たさうと努力するのである。また人間は環境に順應して、短時間の間にその體質までも變化する事實を見る。例へば飛行家や登山家が空氣の稀薄な高所に登ると、酸素を適量に攝取するために、血液内のヘモグロビンが増加し、その結果稀薄な空氣中から比較的少量の酸素を吸入する事が出来るやうになる。かく考へて見ると従來遺傳學や、メンタルテストなどの結果によつて、眼が悪いから學業發達の見込がないとか、耳疾があるから音楽の研究はやめた方がよいなどと、輕々しく個人を評價した事が問題になつてくるのである。

### ヘレン・ケラーの教育

補償の法則は、たゞに生理的方面丈でなく、智能や精神的方面にも働くのである。ヘレン・ケラーの生ひ立ちには、この間の消息を物語つて餘りある。彼女は米國の紐育州に生れ、生後十七ヶ月の時に激しい熱病に罹り、遂に失



明し續いて全くの聾者となり、七歳の時まで光りのない世界、音のない世界に閉ぢ込められて居つた。ヘレンの父はこれをひどく不憫に思ひ、親切な家庭教師サリヴァン夫人を雇ひ入れ、専ら彼女の教育に當たらしめることゝした。然し聾者で盲目のヘレンの教育は、想像も出来ないほどの苦心であつた。リンゴと言ふ事を教へるにも片手にリンゴを持たせ、他の片手の掌にリンゴと言ふ文字を指で書き、更にリンゴと發音して彼女の指を唇に觸れさせて、教育したと言ふ事である。水と言ふ字を教へるにも同じやうに、片手を水の中に入れさせ、他の片手の掌に水と言ふ文字を書き、最後に水と發音して、その唇に觸れさせると言ふ様な譯で、その苦心は一通りではなかつた。手をもつて觸れる事の出来るものはまだしも、愛とか正直とか言ふやうな、觸れる事の出来ない抽象的な事實の教授には、一層苦心があつたと彼女はその自叙傳に書いて居る。然しヘレンの記憶力や理解力は非常に旺盛であつて、聾盲の二大難關も見事突破して、常人以上の能力を示したのである。彼女は今日にいたるまで著述家として、また屈指の雄辯家として活動して居る。我が國においても盲人學者として、有名な鳩保己一が居る。ヘレン・ケラーや鳩保己一は例外であるとしても、盲人の感のよい事や、聾者の早耳な事は、一般に承認されて居る事實である。

この世の中に無用なものはない。造化の神は公平であつて、或るものには羽翼を與へ、他のものには鳍を與へ、また他のものには角を與へて居る。人間でも同じ事であつて、或る人は記憶力が強く、他の人は數理に明く、また他の者は技術的方面に秀でて居る。美人は屢々精神的に醜く、これに反して醜婦は屢々精神的美人である場合が多い。トマス・エヂソンが僅か三ヶ月で到底見込がないと言ふ理由の下に學校を追はれたことは、有名な話である。若しあの場合エヂソンの母が、學校の先生の言ふ事を信じたらどうであつたらう、またエヂソンに彼を理解してくれる母が居らなかつたら果してどうであつたらう。恐らく世界は今日もなほ電燈もなく、電話や蓄音器も生れてゐないかも知れない。人各々賜を異にして居り、それ／＼異つた使命をもつてゐる。眼が悪いから、記憶力が乏しいからと言つて失望する事はない。指導さへ宜しきを得るならば、他人の模倣を許さない、神の器となる事が出来るのである。要は父母が兒童を理解し、彼に信頼し、これを奨勵し、彼等に自信と希望とを與へる事である。

## 第三十二章 環境と家庭教育

### 人生と環境

人間の日常生活を一言で盡せば、刺戟に對する反應の反覆であると言ふ事が出



来る。例へば食物と言ふ刺激に對しては、手を出して取つて食ふと言ふ反應を起し、怖しい猛獸の唸り聲を聞けば、驚いて逃げると言ふ反應を起すのである。かく吾人の行爲の根本となる刺激は、如何にして起るかと言へば、日常我々の眼に觸れるもの、耳に聞えるもの、その他我々を圍んで居る環境から來るのである。人間が朝から晩まで二六時中、この刺激即ち環境と交渉しつゝ生活して行く有様は、恰も魚の水におけるが如くであつて、吾人はこの環境に服従し、この環境に順應し、この環境を鑑賞し或はまたこれを利用し、環境から影響を受け、また環境に影響を與へ、これと密接な相互關係を保ちつゝ生活して居るのである。

### 人生は流水の如し

人生を川の流りに譬へる事が出来る。その初めは數滴の雫として、小さくはあるが水晶のやうに清く、深山の幽谷に湧き出で、自然の法則に支配されて高きより低きに、潺々として細き流れを營み、環境のまにまに岩にせかれては右に曲り、山に遮られては左に迂廻し、石灰岩の上を流るれば石灰分を吸収し、柔かい土地を流るれば濁り、鐵礦地帯を通過すれば鐵分を混入し、窪地に流れ込めば池となり、山峽にかゝれば溪流となり瀧となり、流域の細流を集めてだん／＼と成長し、平野に出でては堤坊に制限され、遂に海洋に流れ込んで、怒濤に揉まれつゝ、困難な生存を續けて行くのである。人間の生活も流水と同じやうに、生を

母胎に受け、十ヶ月の後にこの世に生れ出で、汚れない無垢の嬰兒として出發し、年を経るにつれ「水が方圓の器に従つて」その形を變へる様に、環境から種々な影響を受け、或は臆病となり、或は大膽となり、満六歳になると家庭と言ふ深山を出でて、學校と言ふ平野に流れ出し、種々雑多の友達と交り、家庭と言ふ土手と、學校と言ふ土手の間に挟まれ、比較的平凡な生活を續け、青年となり遂に成人して、社會と言ふ荒海に流れ込み、額に汗して生活の資のために働かなければならぬのである。

### 一枚の油繪と老母の不運

環境はかく兒童の生活と密接の關係を有し、切つても切れないものである。著者が曾て讀んだ米國の雜誌に、次の様な話が書いてあつた。「ロツキー山麓の一寒村に、年の頃七十餘りの老婆が住んで居つた。彼女の夫は三人の男の子をこの世に残して早逝した。後に残された老母は女一人の細腕で、老後を楽しみつゝ懸命に三人の子供達を養育したのである。處が子供達は成長するに従つて、一人去り二人去り、遂に三人が三人とも揃ひも揃つて、汽船の乗組員となつて、或は印度洋に、或は大西洋に、海上の生活を續け、ロツキー山の山奥に住む老母を訪ふものとなつた。取り残された老さき短い老婆の歎きは一通りではなく、息子達の身の上を案じ、またわが身の不幸をかこちつゝ、ひとり淋しく暮して居



つた。或る日のこと、老婆の不幸を慰めるために訪れた友人があつて、くさくさの物語の後、やがて食事時となつたので、椅子テーブルの調度品は勿論、壁にかゝつて居る繪まで、昔のまゝの思出での深い食堂に招せられたのである。食卓につくや否や、友人の眼は壁にかゝつて居つた、美しい二枚の海の景色を畫いた油繪に注がれた。その一つは海上の日の出を畫けるもの、他の一つは怒濤が岩に碎けて玉と散る勇壯な名畫であつた。その時友人は思はず膝を打つて老婆に向き直り「あなたの不幸の原因はあの二枚の海の繪にあるのだ」と告げたと言ふ事である。亡父が何んの氣なしに食堂にかけて置いた油繪が、年若い子供達の心に深い感銘を與へ、それが動機となつて遂に山奥の家と母とを捨てて海に走る原因となつたのである。かく家庭に掲げられた繪一枚の影響が、兒童の將來を決定するやうな力の有ることを思ふ時に、私達は環境の感化力の大なる事に今更の如く驚くのである。

### 先づ環境を改善せよ

兒童の行爲を見ると善かれ悪かれ大部分環境の結果であつて、若し彼等の思想や行爲に間違つた事があれば、我々はその原因を主として環境の中に發見しなければならぬ。然るに多くの場合はその本末を誤り、外形に現はれた行爲のみを捕へて云々し、不勉強だと言つて叱つたり、不良だと言つて刑罰を加へ、その環境如何を顧みない。

い場合が少くない。これは恰も「心のゼンマイ」と言ふ愚な獵師の話に似通つて居る。「或る山奥に愚かな獵師が居つた。或る日のこと、獲物が多く金が澤山儲かつたので町に行つて安い柱時計を買ひ求めた。ところが數日たつと、どうしたものか一向に時計の針が動かなくなつたので、彼は驚いて時計屋に走つてその事を告げたのである、すると番頭さんが、「ではその時計を見せて下さい」と言ふと、獵師は風呂敷包の中から大事相に時計の長針と短針とを取り出して見せた」と言ふ話である。愚かな獵師の眼には、外部に現れた時計の針の動かなくなつた事以外には考へられなかつたのである。然し時計の針の動かなくなつたのは、針そのものの故障でなく、その原因は他にあるのである。我々が子供達を指導して行く場合に、屢々この獵師のやうな愚を繰返すことはないであらうか。

先日も或る女學校の三年になつた娘の母親が訪ねて来て、近頃娘の歸宅が遅くなるので、段々調べて見ると、途中で道草を食つて遊んだり、また母を欺いて活動に行つたりする事が分つたので、心配して相談に來られたのである。家庭の事情を尋ねて見ると、父は數年前になくなられ、兄や姉はそれ／＼結婚して家庭を出で、家には嚴格な母と當の末娘だけであると言ふ事であつた。その他種々と家庭の様子を尋ねれば尋ねるほど、そんなに淋しい面白くない家庭に、少年少女が満足する



ものではないと言ふ事が頷かれたのである。お母さんの考へでは、嚴重な刑罰でも與へれば、直るものであるかと考へて居つたやうであつた。勿論取締りも必要である、然しそれだけでは却つて娘の反感をそゝり、愈々潛行的となり、隠れて悪い事をするやうになるものである。それよりも寧ろ環境を改善し、もつと賑かな兄夫婦か姉夫婦の家族と同居するかして、環境を新にし、家庭を興味のある所とすれば、自然に問題は解決する事であらうとお話したのである。

### 環境の意義

デユウィー博士は環境を定義して、「環境とは生物獨特な行動を促進し、或は阻止し或は刺戟し、或は抑制する外界の事情を言ふ」と言つて居る。この定義に従へば、環境とは我々を取り巻いて居る事物の中で、特に我々に刺戟を與へ、その結果吾人の行動に何等かの變化を與へるやうな外界の事情を言ふのであつて、我々の周圍にあつても、吾人に何んの刺戟も感興も與へないものは、教育的に考へれば環境とはならないのである。若し犬が星を見ても、それによつて何んの刺戟も受けないとすれば、星は犬にとつて環境とはならないのである。これに反して星の位置を目あてに、針路を測定する航海者にとつては、星は重要な環境となるのである。斯様な譯で吾人は先入主を異にし、教養を異にし、興味を異にするために、同じ家に住み、一つ學校に學んで居るものでも、その環境を異にする場合が少くない。

### 村井吉兵衛の話

村井吉兵衛と言ふ人は煙草がまだ専賣にならない頃、手廣く煙草を販賣して、一代に千萬長者になつた人である。この人が率先して煙草の商賣を始めた動機が面白い。彼は青年の頃京都の同志社大學において、米國の某宣教師から禁煙の演説を聞いた。その時宣教師は、頻りに喫煙の害を説き、一度吸ひ始めるとやめることが出来ないものであるから、青年は煙草を吸はないやうにと、口を極めて説いたのである。この話を聞いた多數の青年の内には、これをそのまゝ受け入れて、生涯煙草を吸はなかつたものが少くなかつた事であらう。然し中にはそんなおもしろいものなら一つ吸つて見てやらうと考へたものもあつたかも知れない。村井吉兵衛氏はどうであつたかと言ふと、一度吸ひ始めたらやめられないものなら、その煙草を製造販賣したならきつと金儲けが出来ると違ひないと考へて、煙草屋を始める事に決心したと言ふのである。教訓の積りで話したことさへ、先入主や興味如何によつて金儲けの種明しのやうにとられるのであるから、決して日常不用意に言つて居る事や、なして居る行爲や、新聞の三面記事や、活動寫眞などが、敏感な青年男女の頭にどう響くものであるか、考へて見れば、誠に複雑であり六ヶ敷い問題である。殊に注意を要する事は、大人と小供との環境の相違である。大人から見れば何んでもない事が、兒童には強い刺戟となり、小供には一向無關心の事が、大人には大事件となるの



であるから、大人の興味をもつて小供を律する事は危険千萬である。

### 自然的環境と日本精神

環境をその性質によつて區別すれば、大體、四つのものとなる。

その第一は自然的環境である。自然的環境と言ふのは、吾人を取り圍んで居る、森羅萬象の自然の世界を言ふのである。その内には山もあり川もあり、木もあり草もあり、日月星辰もある。私達がこの地上に生存して行く限り、この自然の環境を無視する事の出ない事は申すまでもない。吾人は積極的に自然界の法則に則り、或は又消極的にこれに順應し、これに服従し、或はこれを利用し、これを鑑賞して生活して行くのである。環境の中で自然の風土地勢ほど吾人の生活に密接な關係を有し、その國民性に多大の感化を與へるものはない。西部亞細亞に宗教的天才が出現したのも、日本や希臘に文學や藝術が勃興したのも、みなその國々の風土と關係があるのである。近來盛んに唱へられて居る日本精神などにしても、日本の地理や自然を外にしては考へる事は出来ない。著者の管見をもつてすれば、日本精神の由來や日本人特有の創造的精神は古事記でもなければ、武士道でもない、寧ろそれ等は世界無比の山水明媚な、わが島帝國獨特の美しい自然の所産であると考へられるのである。富士の秀峰や櫻の花を考へずしては、武士道は考へられない。わが大和島根は領土こそ狭いけれど、これを繞る海は廣く深く、聳える山は飽くま

で高く、流れる川は清く澄んでゐる。これを濁流滔々たる揚子江やミシシッピの水を眺めたり、禿山を仰いで居る國民に比すれば同日の談ではない。三千年に亘る萬國無比の國體も、世界に誇る我が精銳も、みんな吾等にとつては自然の歸結であつて、決して一時的の現象ではないと考へられるのである。この美しい山川河海の存する限り、五十鈴川の流れの濁らない限り、この美はしい尊い國民性は斷じてなくならないのである。かく考へて見ると自然を破壊して水力電氣を作つたり、山林を亂伐したり、靈山にケーブルカーを架して金儲けを計畫する拜金者流は、日本精神の破壊者であると言ふ事が出来る。また依然として地方の青年男女が、美しい自然にそむき、淳朴な田園を捨て、人工の美を求めて、都市に集合する傾向が止まないが、これは國民教育に對する怖るべき脅威であらう。吾人は彼等に向つてルソーと共に「自然に歸れ」と警告したのである。

如何なる場合でも同様に、長所はやがて短所であつて、國內にあつて繁榮する日本人も、一旦國外に出ると全く趣を異にする。想ふに從來日本人が植民地の經營や移民に比較的成功を見なかつたのも、また日本の美しい風土の然らしめる所であるまいか。原則として移民は悪い土地から良い土地を求めて行くのが普通である。而して日本人のやうに、良い土地から悪い地方に移住するのは變則であつて、そこに無理があるのである。日本移民は愛郷心が強くて落付かず、屢々不成功であつ



た原因は實にの點にあるのであるまいか。然しそんな事では到底大をなす事は出来ない。従つて將來日本人が南米や滿蒙の地において發展しようとするには、こゝに心をいたし、自から異つた方法と教育を必要とするものと考へられる。

### 社會的環境

第二の環境は社會である。社會的環境の内にはその社會の風俗、習慣、歴史、傳統、輿論、道德、法律、學問などの一切の文化的施設を含んで居る。申す迄もなく人間は社會を離れては一日も生活するを得ない。故に吾人はその社會文化の内容を知り、その歴史傳統を學び、道德習慣法律等を重んじ、これと調和を保ち、圓滿なる社會生活をなして行かなければならない。進化論の創設者であるダーウキンが適者生存と言ふ事を言つて居るが、昔も今も同じく環境に適應しなければ、自己及び自己の子孫の繁榮を計る事は出来るものでない。而して今日の社會において適者と言ふのはどんな人であるかと言ふと、自分の住んで居る社會に適應する能力を有する人である。前にも屢々述べたやうに、文明の進歩に伴ひ、智識が専門的となり分業が盛んになるにつれ、協調的精神が愈々必要となつて來た、従つて今後の教育は益々社會的訓練に重きを置かなければならない。

### 環境としての人間

第三の環境は社會の一員である個人である。社會と言ひ、國家と言つて

も畢竟個人の集合に外ならない。吾人は毎日家庭においても社會においても、老若男女の雜多な個人と接觸して行く。故に我々は人間の生理や心理を知り、人間性に深い理解をもち、自己を支配し、その心身の健康を保つと同時に、他人の感情を傷けないやうにしなければならぬ。然しこれは決して簡單ではない。元來人間は物理や經濟や法律を知つてゐるほど、人間自身を知つて居ないのである。家庭における家族間の鍵れも、社會における人と人との争ひも、その原因の多くは、人間性の根本を理解してゐないためである。これでは眞の文明人と言ふ事は出来ない、我々は眞の文明人自由人でなければならぬと考へて居る。而して眞の自由人と言ふのは、己を知り人を知り、己を支配し、人を理解して行く人でなくてはならない。

### 超自然的環境

第四の環境は肉眼をもつて見る事の出来ない超自然の世界である。或る人には、宗教などには無關心な人も少くないが、一度問題が起ると「神頼み」をするのである。神があるかないかの議論は暫くさて置き、人間の心の奥底には確かに神を求め深き欲求のある事は事實である。故に吾人は超自然の世界をも、吾人の生活環境の内に入れて行かなければならない。然し信仰にも迷信があり、宗教にも邪教があるから一概に言はれないが、敬神の念は愛國愛人の基礎



であつて、正しい宗教を信じ信仰を得るのでなければ、人生は決して完いと言ふ事が出来ないものである。信念の必要は近來一般に認められて來た。然るに今日世界の文明國においては、租税をもつて維持されて居る官公立の學校において、宗教の教育を施す事は禁ぜられて居る。これは信念が必要だと言ふのではなく、信教の自由を認める憲法の立場から、官公立學校においては一教一派に偏した宗教を教へる事が出来ないためである。従つて宗教や信念の教育は、主として家庭において父母によつてなされるか、私立學校や、寺院や教會でなされなければならない。

### 普通環境と特種環境

環境を他の方面から見ると、普通環境と特種環境とする事が出来る。

普通環境と言ふのは普通一般の環境であつて、特に教育の目的をもつて計畫された環境ではない。これに反して特種環境と言ふのは特別の目的の下に整理された環境を言ふのである。多くの場合において、家庭や社會は普通環境であり、學校は教育と言ふ特種の目的をもつて、特に整理された特種環境である。元來教育と言ふものは言葉によつて媒介されるものでもなければ、また教師から直接に生徒に與へる事の出来るものでもない。如何なる智識でも如何なる眞理でも、これを兒童に傳へ、彼等に印象せしめるためには、一度は必ずこれを環境に還元しなければ無効である。従つて教育は言葉ではなくて、雰囲気であると言ふ事が出来る。著者は曾て紐

育のロンピヤ大學附屬小學校において四年生の地理の教授を參觀した事がある。その日は丁度亞弗利加の事を勉強する時間であつた。教室に入ると四方の壁に亞弗利加の寫眞や、亞弗利加で産する礦物の標本や、動植物の模型や参考書などが、所狭きばかりに陳列されて居つた。その時の授業は二時間に亘るものであつた。而して始めの一時間は、生徒達が手當り次第に標本や寫眞や参考書などを調べて居つた。それから次の時間が始まると、先生が始めて教壇に立ち、一人づゝ呼び出して、各自が一時間目に参考書で讀んだ事や、標本や模型によつて觀察した事などを報告させたのである。或る生徒は亞弗利加の畜産について述べ、他の子供は亞弗利加の河流について報告すると言ふ具合で、教師は殆んど教へると言ふ事なく、たゞ聞いて居るだけであつた。殊に一生徒が亞弗利加の鑛業、主としてダイヤモンドの事について報告した時には、教師もその研究の綿密なのに驚いて、啞然として傾聽して居つたやうな譯である。かく學校は教へる場所であるより、寧ろ研究心をそゝり、好學心を起させるやうな零圍氣を供給する處でなくてはならない。家庭教育もまた同様であつて、子供に勤勉の習慣をつけるには、それに相當した環境を與へ、正直と言ふ徳を涵養させようとするれば、矢張り抽象的な言葉をもつてするよりも、正直になるやうな環境を與へてやらなければ駄目である。從來の家庭を見ると多くは、特に教育と言ふ事を目標とした特種環境ではなかつた



が、將來においては深くこの點に留意し、子女の教育のためによりよき計畫が立てられ、それに必要な設備のある特種環境となる事が望ましい。

### 第三十三章 心の芽生え

#### 心は後天的所産である

人間には「心」と言ふものがある。この心を良心と言ふ場合もある。この心がどうして出来るものであるかと言ふ事は、六ヶ敷い問題ではあるが、同時に興味のあることであり、また家庭教育において重要な題目である。人間は生れながらにして心をもつて居ると考へて居るものも少くない。通俗的に考へて見ればさうも思はないではない。處が深く觀察して見ると心とか良心とか言ふものは、先天的のものではなくて、兒童が生れた後に獲得するものであると言ふ方が妥當である。教育の方面から見てもさう考へる方が都合がよい。もし初生兒に心があるものならば、教育の可能性はそれ丈け制限されるのである。兒童がその心を生後に獲得するものだと言つても、或る人々の考へるやうに、心が風船玉か、幽霊のやうにふら／＼と外から這入り込み、また死ぬときには、人魂となつて、飛び出して行くやうな

ものではない。人間の子は實に多くの經驗を経て、粒々辛苦の結果心を築き上げるのである。

#### 心の建築とその材料

何事でもさうであるが無から有は生れるものではない。人間の心の場合も同じ事であつて、材料なしに築き上げる事は不可能である。然らば心の材料となるものは何んであるかと言へば、五官や本能などである。その内でも本能はその主要な材料である。本能を簡単に定義すれば、外界の刺激に對する反應の先天的傾向であると言ふことが出来る。例へて言へば、初生兒が生れるとすぐ乳房に吸ひついたり、幼兒が同年輩の子供を見るとき、自然に近づいて遊びたがつたり、また自己の行動を阻止されると、怒り出したりするは、何れも先天的傾向であつて、本能であると言ふことが出来るのである。この本能即ち生來の欲求が環境に觸れるとき、そこに反應が起り、それが經驗となり、經驗の中から心の芽生えが始まるのである。これを建築に譬へて見れば、心は恰も大工が材木や、煉瓦や硝子や鐵材などを用ひて、家を建築するやうに、環境（父母、教師、自然、社會其他）と言ふ大工が、本能と言ふ材料や、感覺と言ふ工具を用ひて建設する、一種の建築物であると言へる。

#### 本能は善か惡か

吾人は順序として、心の主要材料となる可き本能の本質、その善惡の内容に就いて考へて見よう。孔子は「人の性はもと善」と言つて、人間の性は



本質的に善だと定義した。希臘の哲人ソクラテスもまた性善説に荷擔した人である。この性善説は約二千年に亘つて、東西の思想界を風靡して居つた。處が、ダーウキンの進化論やホップスの哲學の出現によつて、性善説が挑戦される事となつた。進化論者の説く所に據れば、人間の始祖は動物であり、人間は動物から進化したものである。従つて人の性は本來惡であると主張するのである。即ち性善説と性惡説との間には大なる隔がある。従つてその何れを取るかは教育上大問題である。即ち性善説に従へば、人間の黄金時代は過去にあるのであつて、人類はだん／＼墮落の道を辿つて行きつゝあり、従つて教育とは昔に歸る努力であると考へるのである。これに反して進化論者の立場は、人間の黄金時代を將來に望み、人間の過去は動物であり、惡であつたかも知れないが、進化の法則に従つて、だん／＼向上し、發展する可能性のある事を信じて居る。更に進化論者に言はせると、人間の過去における進化は、ナチュラレエボリュシヨン自然的進化であつたが、教育は進化させようとする意識的努力であり、コンシヤスエボリュシヨン自然的進化であるといひてゐる。處が、十九世紀の中頃から更に新説をなすものが現れた。それは人性白紙説とも言ふ可きものであつて、人の本性は善でもなく、惡でもなく、白紙か空瓶の様なものであると言ふのである。この説に従へば教育とは空瓶に物を詰め込む努力であり、白紙に文字を書く事であると主張するのである。然るに近時心理學の進歩に伴

ひ、人間性の本質に關する立體的的研究が進められた結果、人間性の内容に新しい光明を與へるに至つた。而してこの説はまた先きに述べた進化論的立場をも取り入れて居る。この心理學説に據れば、人間性は白だとか黒だとか、善だとか惡だとか言ふやうな簡單なものではなく、惡でもあり善でもある數個の異つた本能の上に築かれるものであると言ふのである。即ち心の内には母性本能を基礎とする愛憐の心の様な善いものもあり、嫉妬や争鬭心などの上に築かれる悪い心もあり、一口に本性と言つても、多種多様であつて、各々その善惡や價值を異にするのであると説くのである。

### 煩悶と心意の發生

前述のやうに心は本能の上に築かれるものであるとすると、心の數は本能の數丈けあると言ふ事が出来るのである。よくあの人は二心があるなどと言ふが、實際においては三心も四心もあり、或る時は或る心が表面に現はれ、また或る時には他の心が活動し、本能と本能、心と心の間には必ずしも統一がなく、その間に屢々矛盾や衝突が起るのである。今幼兒の眼前にお菓子があるとすると、彼の食慾は刺戟を受けて、直ちに手を延ばしてお菓子を取つて食べようとする。然るに、若しこの場合において兄なり、弟なりが側に居ると、忽ちお菓子の争奪が始まり、喧嘩となるのである。假りに彼は腕力を奮つて勝利を得、お菓子を獨占し得たと假定すると、彼はその復讐として、兄弟達から一日中仲間はずれにされて仕舞ふであら



う。さうなると彼は折角努力してお菓子にありつき、食慾は満たす事が出来たが、その代償として社交本能を犠牲にしなければならなくなる。斯様に一方を満たせば、一方が不満を感じると言ふ風に、本能と本能との間に軋轢が生じ、矛盾が生じて来る。かく自己中にある二つ以上の欲望が相對立して争ふ精神状態を、通俗の言葉で煩悶と言ふ。而して兒童の心に煩悶が起ると、その苦惱を免かれ、解決を圖る手段として茲に始めて思考と言ふ精神活動が起るのである。前述の例について見れば、どうしたら食慾と社交との兩欲望の間に調和を保つ事が出来るかと言ふ事が問題となり、兩者の間に折衝が行はれ、或る程度の妥協が成立し、その結果彼はその後お菓子を見ても獨占する事なく、兄なり弟なりと仲よく折半して、食慾と社交本能とを程よく満足させる事を工夫するやうになる。かく本能間に起る矛盾や煩悶を解決しようする過程において思考が生じ、思考の結果到着した解決を或は「心意」と言ひ、或は道德と言ふのである。かく矛盾の意識即ち煩悶は、心意の發生や精神の進歩向上に必要な事柄の出来ない條件である。或る意味において煩悶の多いほど、精神活動が旺盛だと言ふ事が出来る。故に何も彼も親が解決してやつて、兒童に煩悶を與へないやうな、所謂甘い環境に育つては心意の發達は鈍いのである。

### 心の發達

兒童が種々の經驗を経るに従ひ、離れ々々になつて居つ本能が徐々に統制され、

その聯絡が一層緊密となり、始めは二つの本能間のみの協定であつたのが、だん／＼擴大して三つの本能間の協定となり、成人に達すると遂には本能の大部分が協定に加はり、一寸とした事をするにも、一々他の本能の希望や要求などを考慮に入れて、所有慾とか、食慾とか、性慾とか言ふやうな或る特種の本能のみに偏した行動をとらないやうになるのである。而して大部分の本能が統制せられ、協調される過程において、心は單なる心意でなく、理想となり、良心となり、信念となり、靈魂と進化するのである。かく考へて見ると「心」とは本能と本能との協調の條件であると考へる事が出来る。昔希臘では心と精神とを靈魂とか、各々區別して考へて居つたが、それは種類や質の相違ではなくて、程度の差であり量の差である。例へば小供や未開人の心は單なる心であり、青年になると理想となり、良心となり、精神となり、成人に到り修養の結果靈魂が生れるのである。

### 大石良雄の話

播州赤穂は鹽の産地として誰知らぬものはない。赤穂で鹽を製造するやうになつた由來を聞くと、興味のある話がある。元祿の頃であつた、土地の漁夫達は打ち續く不漁に悩まされ、色々副業を物色した結果、一つ製鹽をやつて見たらどうかと言ふ事になり、時の奉行であつた大石良雄にその事を願ひ出たのである。大石は漁夫達の申し出で深く興味を感じ、「それは誠に面白い目論見だから、よく取り調べて何分の返事をいたす」との事だつた



ので、彼等はもう許可されたことのやうに喜び、お許しの日を今日か明日かと待ち詫びて居つた。處が一月とたち二月とたち、半年過ぎても三年過ぎても何んの御達しもないので、漁夫達はもうお許しのない事と思つて諦めて仕舞つた。すると出願後十三年を経た或る日の事、大石奉行から御呼出があつた。漁夫達は最早鹽の製造を出願した事さへ忘れて居つたので、何事かと恐る／＼奉行の前に罷出でると、大石は「豫ねてその方達から出願の鹽の製造の件は誠に結構な事だと思つて、種種調査して見ると、鹽の製造には非常に澤山の薪炭を必要とする」と云ふ事が分つた。處が従來當藩は薪炭の供給が不充分であつて萬一この上樹木を亂伐するやうな事でもあると、洪水が出で堤防がきれる、堤防がきれば農作物を害して農民が困る事になる。漁師がよくても百姓が困つては何んにもならない。そこで薪の供給の必要を感じ、植林を始めて以來今年で十二年になり、漸く薪の準備も出來たから、愈々鹽の製造を許可する」との事であつた。漁夫達は奉行の思慮の周到なのに感激し、以來製鹽の業に精勵し、今日の繁榮を來たしたのだと云ふのである。これは誠に美しい物語りであると同時に、教養のある人と、教養のない人との物事の考へ方の相異を如實に現はす好い實例である。漁夫達は鹽を造る事を思ひ立てば、もう朝から晩まで鹽の事ばかり考へて居つて他の事は念頭に浮んで來ない。これに反して思慮の深い大石良雄は鹽の事から薪の事を考へ、薪の事から亂

伐、亂伐から洪水、洪水から堤防の決潰、堤防の決潰から水害、水害から農民と云ふ風に連絡をつけて考慮を廻らす。この漁夫と奉行との相違は、恰も子供と成人との相異に彷彿して居るものがある。子供の本能は漁師の場合のやうに他の本能と關係なく、たゞ一概にその欲望を満足する事のみを思ひ詰めるが、成人の場合には奉行と同じく總ての本能を考慮に入れて行動するのである。

### 誘惑と良心

既に述べたやうに、心は個人の内における本能相互の衝突や不調和に基因して、統制の必要上出現する生活の指導原理であり、理想である。従つて心の役目は本能を抑壓し、所謂喧嘩兩成敗で、相争ふ本能の双方を抑へてこれを適度に制限する事にあるのである。かく考へて見ると心の發動する所には、必ず多少の壓迫のあることが豫想される。而して壓迫を受ける本能から見れば、何時も多少不満の状態に置かれて居るのである。故にその不満を感じて居る本能が、外部から刺戟を受けるやうな場合があると、必ず多少の昂奮を起すのである。而してこの場合壓迫を受け、昂奮を感じて居る本能が非社會的(例へば所有慾)のものであると、我々はこれを誘惑と呼んで居る。従つて無制限に非社會的の本能を發揮させ、何の壓迫も加へずに欲望を満足させて居る無頼の徒には、誘惑と言ふものはない筈である。これに反して高い理想をもつて居り乍ら、その理想をその儘現實の生活に表現する事が出來ないとすると、その理想が壓迫を受け、不



滿の状態に置かれる事となる。かく善いと知りながら現實の生活に表現されないで、不滿の状態にある理想を良心と呼ぶのである。この理論から推して考へれば、無制限に社會的美事をなして居る聖人にとつては、誘惑はあつても所謂良心と言ふものはない譯である。

### 心は環境の所産である

次に心の起原に關係のある矛盾感、煩悶、壓迫はどうして起るかと言ふと、多くは外部から來る刺戟の如何に由るのである。然して刺戟は社會的環境の所産であつて、孤島に住むロビンソン・クルーソーと都會に住む人とは、自からその環境を異にし刺戟を異にし、従つて心や道德の内容を異にするのである。また同じ都會に住んで居つても、家庭の状況によつて、それ／＼刺戟を異にする。例へば貧富の差もあり、厳格な家庭もあり、放漫な家庭もあり、子供の多い家庭もあり、獨り兒の家もあると言ふやうな譯で、それ／＼その刺戟感化を異にし、兒童の道德や性格をも異にするのである。而して兒童はそれ／＼の環境に處して、各自その立場を保護し環境に善處するため、或る時は謙遜自制して、他人との衝突を避け、また或る時は積極的に闘つて、自己の立場を擁護するのである。従つて或る子供が利己的になるのも、また利他的になるのも、善人になるのも、悪人になるのも、みな齊しく彼の環境に善處する方便である。例へば、父母が兒童を理解しないで非常に嚴格な家庭においては、子供は自

己の立場を防禦するために、嘘をついたり、金を盗んで好きな食物を買つて食べたりするやうになるのである。或る時九つになる女の子が、お友達の家立ち寄つて、夕方遅く歸宅した。するとお母さんが火のやうに怒つて、さん／＼少女を打ち叩いた。その時少女は心にもなく、自己防禦の非常手段として、學校で先生に御用を頼まれて、遅くなつたのだと、嘘をついてその場を逃れたのである。「嘘も方便」と言ふ事があるが、嘘ばかりでなく、盗も嫉妬も、愛も實直も、反抗も謙遜も、善も惡も、その人にとつては環境に處する最善の手段であり、處世の方便であると言ふ事が出来るのである。かく考へて見ると兒童の性格教育において、家庭は勿論その環境である學校や友達などの選擇が非常に重要であると言ふ事になる。

### 模倣に由る心の發生

以上は兒童が環境と接觸し、そこに起る不調和や衝突の結果、煩悶や思考などの經驗を経て、試行錯誤的に「心」を獲得する過程を述べたに過ぎない。この外兒童が心を獲得するのに、模倣的學習手段に由る場合がある。同じ模倣的學習の場合にも、意識的に模倣する場合と、無意識的反射的に模倣する場合とがある。著者はこゝに主として兒童が無意識的模倣によつて、「心」を獲得する過程を述べて見る。

先入主の乏しい經驗の少ない幼兒にとつて、事物の解決の最も簡單な事は模倣する事である。而



して兒童の模倣は單に手足の動かし方や、言語などの様な具體的なことだけでなく、精神活動や、善惡の標準などの抽象的な事にまでに及ぶものである。即ち幼兒は屢々その理由の如何を問はず、父母教師の道德標準を鵜呑にして、そのまゝ自分の「心」とする事がある。かく幼兒が父母や先生の心を反射的に模倣して、自己の心意とする事を、通俗の言葉で感化を受けたと言つて居る。兒童が最も多く父母を模倣しその感化を受けるのは、彼が初めて自己を發見する頃即ち満二歳前後である。模倣によつて獲得した「心」と自己の經驗によつて得た「心」とでは、その内容において格段な相異があるのである。模倣に由る心は單なる心でなく、一種獨特なる存在であつて、發生的に得た心と一致しない場合が少なくない。また模倣心は概して發生心の上位を占め、自己の内にあつて君臨する命令者の如き立場に立つのである。故に吾人はこの模倣心を特に「上位心」と呼ぶのである。この「上位心」はカントの言ふ無上命令カテゴリカルインペラチヴに相當し、フロイドの言ふ上位我スーパー・エゴに當るものである。また或る場合には良心とも言つて居る。而してこの上位心が激しくなると強迫觀念の傾向を帯びて來る事がある。

### 「上位心」の特徴

模倣に由る「上位心」が強く働く場合には、本能はその絶體的支配を受けて、全然自由の發動を拘束されて仕舞ふのである。従つて本能と本能との

間に軋轢も煩悶も起らず、また本能と環境との衝突も比較的少ないのである。かゝる兒童は所謂善良で「大人」しく、禮儀作法を辨へ、何事につけてもキチンとして居る。然し彼等の本能は環境との自由な接觸が妨げられて、訓練を受ける機會の少ないため「上位心」の強い兒童は、一見させて見えるが人間味を缺き、その内容は比較的幼稚であつて、成人の後も世事に迂遠である。また思考力や判斷力に乏しく、謹嚴な保守的なタイプで、潔癖で神経質なもの、「上位心」の強い證據である。「八つになる男の子が、或る時お庭でおイタをして遊んで居たが、急に自分で自分の耳を引つ張り乍ら物置きに這入り、なぜお前はそんな悪いことをするのですかと、獨語しながら自責したと言ふ話を聞いた事があるが、これなどは自分の内にある上位心が、彼の内にある發生心を叱責したのであつて、上位心と發生心との衝突であると見る事が出来る。かく「上位心」の發達した者は自責の念が強く、マソ的性格——異性から虐待を受けると、性的満足を感じる者の多くがこの部類の人に發見されるのである。これに反して發生的に「心」を獲得したものは一般に洗練を缺き、粗暴に傾き、また屢々傲慢となるが、進取の氣象に富み、年と共に心の内容が成長發達して豊富となり、徐徐に洗練されて行く。彼はまた不作家者であるが飽くまで人間的であり、物の解りがよく、大器晩成と言つたやうなタイプの人物が、屢々この部類の人々から出るのである。



### 上位心と發生心

普通の場合兒童は經驗によつて得る「發生心」と、模倣によつて得る「上位心」との兩者を適度に保有して居るものであるが、人により環境によつてその割合を異にするのである。例へば「發生心」が七十パーセントで、「上位心」が三十パーセントの割合の子供もあれば、反對に「上位心」の方が遙かに優勢で「發生心」の方が貧弱な子供もある。一般に獨り兒、總領、末子などの如く成人のみの間に育つものは、「上位心」を多量に受け易い。また頑固で子煩悩な祖父母などの手に育てられるものも、その傾向が顯著である。その他父母の一人が「上位心」を多量にもつて居ると、自然その子供等もその「上位心」の感化を受けるものである。專斷的な父母や、謹嚴過ぎる家庭に育つ子女は強い「上位心」を受け、それとも反抗的になるかの二つに一つである。一般にお母さんが上位心の強い場合には男の子は「上位心」を得て謹嚴となり、女の子は反抗的となり、これに反して父が嚴重な場合には女の子が「上位心」を得て大人しくなり、男の子は反抗的な性格となるのが普通である。また「上位心」は男女の性別によつてその量を異にするかと考へられて居る。概して女性性は「上位心」が強く、男子においては「發生心」の方が優勢である。また理解の出来ない高尚過ぎる教訓を幼時に澤山與へると、それが「上位心」を促進する材料となる事がある。かくして獲得した兒童の「發生心」と「上位心」とは、その後學校に入學し、多

くの學友や教師に接觸し、種々な影響感化を受け、或は「發生心」が助長せられ、或は「上位心」が豊富になるのである。殊にこの場合教師の人となりや、學校の學風などが大なる影響を與へるのである。萬一家庭における環境と學校における校風との間に、餘り懸隔がある様な場合には屢々兒童の心を混亂せしめ、二重道德を兒童に鼓吹する結果になつたり、また自己の分裂の原因となることもある。故に子女の學校の選擇はその家庭の家風を標準とし、それに適應した校風を有する學校を選ばなければならぬ。

### 「上位心」と年齢

また子女の年齢は「心」の内容に重大關係を有して居る。幼時には比較的「上位心」が優勢であるが、生長に従つて「發生心」がだん／＼優勢となり、小學校に入學し多數の學友と交り、家族以外の人々の言行を見聞し、學習が進み智識の量が増加するにつれて、「發生心」や意識的模倣心が益々優勢となつて来る。殊に青年期においては男女共に父母や教師を離れ、創造的思索が旺盛となるがため、却つて「上位心」が「發生心」に壓迫されるのである、而して青年期に特有な反抗心や懷疑心などはその現はれである。更に心は配遇者の如何によつて影響を受けるものである。例へば專斷的なサド型の男子と結婚した女子は「上位心」が表面に現はれ愈々マゾ的となり、これに反して寛大な社交的配遇者を得た場合には、「發生心」の方が助長



されて來るのである。また人間の心は職業の如何によつて重大なる影響を受けるものである。僧侶だとか學校の教師などは、自然に「上位心」の發達を促がされ、いつとはなしに道德型の堅苦しい人となり、自然世事に疎くなり、これに反して實業家や政治家は「發生心」が優勢となり、自由で放漫な人となり勝である。又「上位心」の強烈な人は身體を害したり、精神生活の創造的發生的發達を妨げられるものであるから、出來る丈けこれを緩和する必要がある。それには父母が子女に對して友情を示し、寛嚴その宜しきを得る必要がある。殊に満二三歳の子供は、父母を模倣し易いものであるから、この頃の躰には特に細心の注意を要するのである。然し何等かの理由で既に「上位心」を多量に獲得して居る場合には、その原因を探究し、その無意識的壓力を緩和するやうに努めなければならぬ。それには精神分析によるより外ないのである。

### 決論

要するに「上位心」も「發生心」も共に人間生活に必要である、たゞ「上位心」が強過ぎると種々の弊害を伴ふものであるから、之を緩和する必要を述べた次第である。従來の教育は感化即ち「上位心」の教育に餘りに重きを置いたため、その結果融通のきかない人となり、社會情勢と伴はず却つて青年を誤つたやうな嫌があつた。故に今後は兒童をして實社會と接觸せしめ、彼等自らをして發見せしむるやう仕向け、たゞ單なる感化でなく、指導輔導の教育に力を

をいたすべきである。

## 第三十四章 習慣の養成

### 習慣の必要

習慣は第二の天性と云はれて居る程、我々の生活に緊密な關係を有して居るものである。それは恰も人間生活に必要な道具の様なものである。良い道具を澤山持つてゐなければ如何に名匠であつても、名作を作る事が出來ない様に、良い習慣を澤山持つて居る人でなければ、人生の勝利者となる事は出來ない。習慣の少ない人は、何事をするにも氣苦勞で、自然社會生活を厭ひ、家庭に於いても社會に出ても、仕事に對しても、不平不満を感じる様になる。甚だしいものは神經衰弱的症狀を起し、憂鬱な人生の行路を辿るものである。かく習慣は大切なものであつて、家庭教育の使命の大半は良い習慣を作り、悪い習慣を破る事にあるのである。

### 習慣はどうして出来るか

幼兒は生れると直ぐ、其の肉體生活の要求を満たすために、乳を飲んだり、眠つたり又腕や足を動かしたりする。さうして居



る間に或る行爲は數回又は數十回繰り返され、遂にそれが一定の習慣となるのである。野原の中に道が出来るのを見ると、始めて原野を横切るには、種々の困難があり、かなりの努力がいるのであるが、二度三度と往來する中に自然に一定の通路が出来上り、遂には凡ての人が其處を通行する様になるのである。習慣が出来たのもこれと同様であつて、幼児が新しい刺激を受けた場合、その刺激は神経中枢に傳達され、其處で一定の判断と指圖が與へられて、遂に行動となつて外へ表はれる。若しその結果が快感を齎らすものであれば、同じ事が再三繰返され、その内に神経組織にその刺激の通路が印象される事になるのである。その結果最初の中は苦心した行爲も次第に樂になり、仕舞には努力せずにやれる様になる。これを習慣と云ふのである。自轉車を積古する人の経験などを見ると、始めの間は一つ一つの行動に非常な注意を要し、足を一つ踏むにも、かうすれば良いとか、あゝすれば良いとか考へながら足と一緒に兩手をも働かさなければならぬのであるから、身體の安定を見出す事は仲々容易で無い。それが練習の結果遂には習慣的に動かす事が出来る様になる。さうなると手足を動かすのに精神を勞せなくなり、自轉車に乗つて居ながら、汗をふく事も出来るし、むづかしい事を考へる事も出来るやうになる。斯様な譯で、習慣は力の經濟を意味し、習慣を有して居る人は、習慣の無い人よりも、同じ分量の仕事をするにも早く、然も手際良く、且つ樂にする事が出来るのである。繪を畫いたり、彫刻をしたり、ピアノを弾いたりするのも、同じ原理に基くものであつて、練習の結果習慣の連続とも云ふべきものが出来て來るのである。

### 習慣と能率

習慣は手や足などの肉體活動や、食事や睡眠等の本能的活動だけに止まらず喜怒哀樂の感じ方にも、物の考へ方や想像等の智的活動にも、正直不正直、親切不親切等の道德生活にも、信仰迷信などの總べてに亘つて生ずるものである。例へば、正直不正直について考へて見ると、正直の習慣を持つて居る人もあり、不正直の習慣を持つて居る人もあり、また全然習慣の無い人もある。不正直の習慣を持つて居るものは勿論良くないが、不正直で無い迄も、積極的に正直の習慣の無い人は、絶えず不正直と云ふ誘惑に會ふのである。彼は正直にも出来れば、不正直にも出来るのであるから、其の度毎に誘惑を感じ煩悶を繰り返し、従つて非常な精神的浪費をする事になる。また彼が若し正直にしたとしても甚だその手際がよく行かないのである。これに反して、正直の習慣のある者は、何の努力もせずに正直にする。否彼は正直以外にする事が出来ないのである。

### 習慣群

習慣と云ふものは、單獨に存在することは非常に稀れで、一つの習慣は他の習慣を生み、多くの場合それと類似の習慣群を率ゐて居るものである。例へば節約と云ふ



習慣のある人は、注意、努力、正直、早起、排他的などの諸習慣群を同時に有し、これに反して金を浪費する習慣を有する人は、不注意、怠惰、不正直、朝寝坊等の習慣群を有する場合が多いのである。或る人が一方に偏した習慣群を有する場合には、其の人の生活は自然偏頗になり易い。世間でよく云ふ變り者、變屈者等はかゝる人を指すのである。これは兒童の教育上参考とすべき點であつて、我々は成る可く、偏頗の無い多種多様の習慣群を有する人を、目標として教育を進めて行かなければならない。例へば一方に於いては、儉約の習慣を養ふと同時に、他方に於いては、節約に依つて得た金銭の幾分を社會事業へ寄附する習慣をつける様に躑けなければならない。また一方に於いては努力の習慣をつけると同時に、他方に於いては、寛大の習慣をつけると云ふ風に、成るべく平均のとれた人を作らなければならない。要するに、道德の問題も、信仰の問題も、人格そのものも、習慣の問題に還元する事が出来るのであつて、人格や品性は、其の人の有する習慣の總計であると言つても過言ではあるまい。

### 習慣形式の五方則

習慣の教養が、人格の教養と深い關係があるものだとするれば、良い習慣を澤山つける事が教育上重要な問題となつてくるのである。而して習慣は行爲の反覆に依つて出来るのであつて、或る行爲を反覆し、これを習慣とするには、種々の條件

を必要とする。その第一は、その行爲が子供の生活に價值のあるものでなければならないと言ふことである。換言すれば、その行爲が彼等の實生活に役立つやうな行動でなければならない。歩行や遊戯などはその一例である。どんなに父母が強ひても、兒童がそれに興味を感じず價值を覺えないやうな事は決して習慣とならない。第二にかゝる行爲が、満足感または快感を與へるものでなくてはならないと言ふ事である。如何に生活に必要な行爲であつても、苦痛を與へる様な行爲は反覆するものではない。然し我々が望む行爲の總てがそれ自身必ずしも満足や、快感を與へるものではない。例へば服従や清潔の習慣は非常に望ましいものであるが、それ自身興味のあるものでない。そこで父母や教師は、斯かる場合において、人爲的に興味や快感を附加する事が必要となるのである。従つて或る行爲を獎勵するために、これに褒美を與へ、兒童達が自然にその行爲に興味を感じる様に誘導しなければならぬ。更によき習慣をつけるには、獎勵や褒美にのみ俟つ事は出来ない。時には刑罰も必要である。興味の有無にかゝらず或る行爲をしない時は、刑罰を與へると云ふ事は、消極的ではあるが、一種の獎勵であり、人生生活に必要な習慣を兒童に與へる必須條件である。然し刑罰の方法は習慣教育の手段としては最善のものではないから充分考慮した上でこの方法に訴へる必要がある。第四に習慣の形成には、兩親の良き模範が必要である。如何にそれ自身生活に缺くべ



からざる行爲であつても、兩親の生活がこれに矛盾して居る様な場合には、兒童は懷疑的となり、決して良き習慣を得るものではない。これに反して、多少の苦痛を伴ふ行爲であつても、兩親のする事は子供等は喜んで模倣するものであるから、兩親を始め、兒童の教育の任に當るものは良い模範を示し、悪い手本を避ける様にしなければならない。子供の歩きつきや、身振りや言葉遣ひや、其他の癖が知らず識らずの内に兩親に似るのは、無意識の模倣によるものである。第五に或る行爲を習慣にするには、始めが大切である。即ち始め非常な決心を以つてこれを決行し、一旦始めた以上絶対に例外を許してはならない。

### 習慣形成の順序

前にも述べたやうに習慣には歩行や、遊戯などの様な、單純な肉體的習慣もあり、感情の習慣や、理智や精神活動に關する習慣もある。又同じ肉體活動の習慣にしても、腕や足の筋肉の様な大きな筋肉に關するものもあれば、ピアノの彈奏や手工などのやうな、指先きの小さな筋肉に關する習慣もある。又感情の習慣にしても、恐怖とか、忿怒とか云ふやうな感情の場合もあるし、また優美繊細なる感情の場合もある。而して習慣の教育に於いては、何れを先きにし何れを後にす可きかと云ふ事が問題である、若しその順序を誤る時は、精神衛生上、また教育上種々の弊害が起るのである。少年少女期や青年期に神經衰弱の起るのは屢々

この順序を顛倒し幼兒にピアノを練習させたり、手の先きの仕事をさせる結果である事がある。一般的に云へば筋肉の習慣から、感情の習慣に進み、更に精神的活動にと低級のものから次第に高級のものに進ませなければならぬ。同じ筋肉の習慣としても大きな筋肉運動から始めて、小さな筋肉の活動に及ぼし、智的方面の活動にしても簡單なものから、次第に複雑な習慣へと進み、一般から特殊にと云ふ風に訓練を施さなければならない。

### 習慣の可變性

習慣は外部の環境から受ける刺激に對する反應の反覆によつて出来るのであるが、この環境即ち刺激は決して一定不變のものではない。殊に今日のやうなスピード時代に於いては時々刻々に變化して行くのである。従つて古い習慣は新しい環境に處するためには不適當な場合が少くない。また田舎で育つた人が、都會で生活する事もあり、又經濟上の失敗等から富豪の子供が、一朝にして無一物となつて貧しい生活をしなければならなくなつたり、又日本造りの家に育つた娘が、洋館に住む人と結婚したり、數へ来れば今日の情勢は社會的に考へて見ても、又個人的に考へて見ても、めまぐるしい變化の眞只中にあると言ふ事が出来る。斯かる時世においてその一方だけに偏した習慣を得ることは考へものである。故に習慣は必要に應じて改める事の出来るやうに、或る程度の可變性や彈力性をもたせて置く事が肝要である。もし一旦出來



た習慣が硬化して、新しい刺戟や環境に對して全然新陳代謝する能力がなくなつた場合においては、人間の發達は止まり、その死を意味するのである。故に吾人は出来る限り習慣の硬化を防がなければならぬ。習慣の硬化を防ぐには、神經組織がいつも柔軟でなければならぬ。而して神經組織の柔軟を保つには、適宜の運動により血液の循環をよくして置かなければならぬ。その他習慣の硬化を防ぐには、屢々日常住み慣れた環境を離れ、旅行をしたり、またキャンプ生活などによつて、古い習慣の力を弱めるやうに努める事も必要である。これに反して單調な變化のない境遇に生活すると、習慣が硬化し自然早老するものである。近時キャンプ生活や旅行が一般化されて來た事はこの點から見ると喜ぶべき現象である。

### 習慣の矯正

悪い習慣や古い無用の習慣を矯正するには、どうしてもその原因に遡つて考へなければならぬ。たゞ單に叱つたり罰したりするだけでは、効果がないのみならず、反つて反抗心を挑發することがある。前にも屢々述べたやうに習慣は環境の結果である。故に環境を變へずして習慣を變へようとする事は不可能である。例へば學校への通學の往復に活動寫眞館の前を通る兒童が、自然に活動好きになつた場合に、これを改めさせるには罰責するよりも、轉居する方が遙かに有効な方法である。又盜癖のある子供の癖を矯正するにも同様であつて、

家庭においては金銭の出納や置き場所を嚴重にし、常に各自の財布にある金の勘定をして置き、近所の菓子屋などと協力して無駄遣などの出来ないやうにして環境を改善すれば、自然その惡癖を矯正する事が出来るのである。

### 習慣と感情

習慣は單なる行爲の反覆に由るだけでなく、行爲の背後には屢々感情を伴つて居るものである。而して良い習慣の背後には常に良い感情があり、悪い習慣の背後には悪い感情が潜伏して居る。故に悪い習慣を認めた場合には、その背後にある悪い感情を調査して、早速これを除く事が必要である。或る中年の奥さんが肩の痛む習慣に惱まされ、種々の賣藥や治療を施したがどうしても治らなかつた。その後精神分析の結果によつて、彼女が七八歳の頃木から落ちて肩を痛めた事があつたが、その際二週間も繼續して、肩や背中にマツサーチの治療を施し、それが彼女の第一次的性慾を刺戟し、肩の怪我が治つた後も、不幸にして肩の痛みと性慾との間に關係が出来、成人の後性慾が起る度毎に肩の痛みをも感ずるやうになつたのだと言ふ事が分つた。また或る紳士は毎朝午前一時に必らず目を覺ます習慣があつた。彼はこれがために安眠を妨げられ少からず當惑した。これも精神分析の結果によつて、彼がまだ小學生の頃、或る夜午前一時に突然發病して、死の恐怖に直面した事があつたのである。その後治療の結果幸ひに病氣は治つた



が、毎朝午前一時には必ず目が覺める習慣がついたものである。かく習慣の背後には性慾感情があつたり、強い強怖心が伴つて居たりする事があるから、習慣を矯正するにはその原因となる感情の轉換が必要である。虚言とか、盜癖とか、犯罪とか云ふものも單なる習慣ではなくて、その背後には何かの感情が潜んで居るものであるから、これを矯正するには前述の法則に則らなければならぬのである。

### 盜癖と虚言

盜癖も一種の習慣である。盜癖の出来る原因には種々あるが、その最も一般的なもののは復讐心又は反抗心に由るものである。子供の盜癖は普通父母の金品を盜む事から始まるのであるが、然もこれが多くの場合において父母に對する反抗心に根ざして居るのである。嚴重過ぎる家庭、愛のない冷い家庭や、繼父母に育てられる子女が盜癖を得るのはこれがためである。また嫉妬心が盜癖の原因となる事がある。貧しい子供が幸福なお友達を嫉妬し、その結果お友達のお金を盗んで、そのお友達のお金を悲むのを見て、快感を感じると云ふやうな病的なものもある。反抗心から盜みをするのは男の子に多く、嫉妬心から盜むのは女の子に多い。更に金銭の濫費は盜癖の原因であるから、金銭の濫費を戒めなければならぬ。虚言もまた一種の習慣であるから成可く早く矯正しなければならぬ。五歳以前の幼兒の虚言は多くの場合觀察の不正確から

來るのであるから、別段意に介する必要もないが、學齡以後の兒童の虚言は盜癖と同じく、嚴格過ぎる環境に對する反抗の手段であつたり、また自己防衛の手段である場合が少なくない。特に勝氣な子供、名譽心や虚榮心の強い子供には虚言癖が付き易いものである。また時には單に他人の注意を引くために、針小棒大に物事を話したり、人の歡心を買ふために虚言を云ふ事がある。殊に單調な境遇に居る子供が、自分の境遇の變化を希望するために種々なことを捏造して、面白半分に嘘を言ふ事もある。

習慣の中で最も必要なものは、身體を清潔にする習慣や、睡眠や衣食住などに関する習慣やその他日常生活に関する習慣である。以下各章に分けてこれを詳述する事にする。

## 第三十五章 睡眠と家庭教育

### 睡眠の必要

人間の生活に最も必要な事は、食物によつて栄養をとる事と、睡眠によつて休息をとる事である。食物の攝取が出来なくなれば人間は死ぬより外ない。それと同様に睡眠が出来なくなれば矢張り死を意味するのである。かく睡眠は人間の生活殊に兒童の生



活にとつて重要なものである。然るに多くの人は食物の營養については可なり心配もし、研究もするが、適當な睡眠の方法や、睡眠に關する良き習慣などについては比較的無頓着である。昔から「寢る兒は育つ」と云つて、睡眠は兒童の疲勞を恢復させ、精力を貯藏し、伸び行く彼等の心身の精力補給上缺く可からざるものである。

### 睡眠の生理

睡眠と云ふ現象は、主として五感—視覚聽覺味覺嗅覺觸覺—の中樞である大脳皮質の疲勞のため、その機能を中止し休息することを云ふのである。而して疲勞は血液内の酸素の缺乏と組織中に毒素の貯積することを意味する。故に空氣の悪い室内などに居ると自然眠くなつたり、また酒類とかその他毒素を發生させるやうな物を飲食することによつて、睡眠を催す事がある。睡眠はたゞに大脳だけでなく、總ての臓器の活動を緩慢にし、これに休息を與へる。五感の發達の過程については、既に年齢別篇において述べたやうに、觸覺が最も早く現はれ、味覺嗅覺聽覺視覺と云ふ順序になつて居る。而して感覺の中で最も高尚なものが最も早く疲勞し、休息を要するのである。従つて睡眠を催す順序は五感の發達の順序とは正反對であつて、視覺が一番早く眠り、次に眠るのは聽覺である。よく子供を寝かせつけるとき、お伽噺などをして居ると、眼は閉ちて眠つて仕舞つても耳はまだ聞えて居ると云ふやうな事がある。而して觸覺の眠るの

が一番最後になつて居る。故に子供の目を醒まさせるには、聽覺を刺戟するよりも、また電燈をつけて視覺に刺戟を與へるよりも、觸覺を刺戟する事が最も有効である。これに反して安眠をさせるには電燈を消す事よりも、電車汽車の雜音を避ける事よりも、觸覺を刺戟しない様に注意する事が一番肝腎である。例へば寢室の溫度を調節するとか、扇風器を中止するとか、自分の皮膚と他人の皮膚との接觸させないやうにする事などが安眠をする上に大切な條件となる。

### 睡眠時間數

乳兒の生活の大部分は睡眠である。睡眠の時間は體質に由つて多少の相違があるが、初生兒においては二十時間乃至二十二時間睡眠する。即ち毎四時間に一度位の割合で空腹になると目を醒まし、乳を呑む間約二十分ほどしてまた眠りに落ちるのである。生後六ヶ月前後の嬰兒は十六時間内外睡眠し、滿一歳になると十三四時間ぐらゐで、その中夜が一時間位で、日中が三時間位となり、これを二三回に分けて眠るのである。更に滿一歳以後の睡眠時間は大體左の通りである。

一歳—二歳 十二、三時間

二歳—四歳 十二時間

四歳—六歳 十一時間



六歳—十歳 十時間

十歳—十四歳 九時間

満四歳までの兒童は必ず午睡をさせなければならない。然し時には一週一二回午睡をしない事があつても心配はない。睡眠には深淺がある。就寢後約一時間位の時の眠りが一番深く、それから徐に淺くなり、一寸とした事にも目を醒ますのであるが、人によつては目の醒める一時間ほど前に再び深く眠るものもあるが、それは例外である。睡眠には眠りつきも速く、醒めるのもまた早い、所謂早寢早起型もあれば、眠るのが遅く、また醒めるのも遅い、宵ばりの朝寢坊型もある。この兩者の差は單に習慣からばかりでなく、體質にも多少關係があるやうである。而して前者は健康な象徴であり後者は神経質の現はれである。一般には就寢後二十分以内に眠るのが普通であつて、それ以上時間を要するのは異常であるから、矯正しなければならない。

### 眠せる時の注意

子供を寢せつけるには、成可く人手をかけない様にしなければならない。殊に幼少の時抱いたりかゝへたりすると、それが習慣になつて抱かないと眠らないやうになる。これは單に手がかゝるばかりでなく、幼兒の安靜な睡眠の妨害となるから避けなければならない。また抱かないまでも母が床の側に附いて居たり、ララバイを歌つて聞かせた

りする事も餘りよい事ではない。かくする事によつて遂にはララバイを歌はなければ眠らなかつたり、母が側に居ないと眠らないと云ふやうな悪い習慣がつくのである。またよく幼兒が眠る時、自分の好きな玩具とか、繪本とか、また父のお土産のお菓子などを、枕元に置いて眠る事があるが、これも幼兒の安眠の妨害となるのである。かゝる場合に屢々兒童は一晚中、そのお菓子なり玩具なりの事を夢に見てそのために睡眠しても充分休息がとれず、従つて寢起きが悪くなる。前にも述べた様に子供の夢は主として現實夢と云つて、晝の間見た事や、聞いた事をその儘夢に再現したり、また自分の欲しいものを夢に見たりするものであるから、子供の晝間の讀物や行動などに注意が必要である。本章の初めに述べたやうに睡眠の目的は休息である。處が睡眠中に夢を見ると、それだけ安眠が妨げられて、休息が不充分となる。故に子供が何時間寢たと云ふ事よりも、彼等がどんな風に寢たかと云ふ事が一層大切なのである。

### 睡眠時のお伽噺

殊に問題となるのは眠り際のお伽噺である。元來睡眠の心理は催眠術と同じく、一種の精神統一である。處が精神が統一された状態にあるときに話された事は、非常に深く兒童の心に印象づけられる。催眠術の治療はこの原理に基いて居る。例へば煙草をやめさせようとする時には、先づ催眠術をかけて置いて、被術者に煙草の害を説いて聞か



せる、するとそれが彼に深い印象を與へて、覺醒後煙草が嫌ひになるものである。前にも述べた様に眼は耳よりも早く眠るのであつて、兒童が眼を閉じた後もまだ耳は聽えてゐるのである。この半睡半醒の時に話すお話は幼兒へ非常に深い印象を與へ、それが屢々兒童の一生涯を支配するやうな感化を與へる事がある。精神統一の状態において話した事は記憶には残らないものである（元來記憶と言ふものは、眼で見た事や耳で聽いた事や、その他その時々々の周囲の事情と聯絡させ、聯想に由つて想起されるのである。従つて精神が統一された状態において與へられた印象は聯想が無く記憶に上らない事が多い）。然しかゝる印象は潛在意識となり、氣分となり性質となり性格となるのである。かく考へると眠り際のお話しは家庭教育において可なり重要な役目を持つ譯である。子供の悪い癖などを直すにはこの機會を利用する事が適當である。また晝の間の悪戯などにしても、その時直ぐ叱るよりも、床について半醒半睡の眠り際に、靜かに諄々と説いて聞かせる方が遙かに有効である。國民性とその國のお伽噺との關係は、早くから唱へられて居る處であるが、國民性がお伽噺に反映されるのもさる事ながら、お伽噺が國民性に深い影響を與へる事も見通す事は出来ない。これは多くのお伽噺が、寝物語りに話されるからではあるまいか。

#### 寢室の注意

寢室は靜かな所で、晝間日當りのよい場所にある、換氣のよい部屋が適當である。理想的に言へば一人々別な部屋に寝る事が望ましいのである。若しそれが出来ないとしても父母と子女との寢室は別にする方がよい。少くとも母子同衾する事は安眠の妨害となるから避けなければならぬ。夜具は輕くて、軟いものを使用し、寝巻やシーツや枕カバーは屢々洗濯して清潔を保ち、また日光消毒を施さなくてはならない。寢室の温度はどちらかと言へば寒い方がよい、古來勉強をする時は「頭寒足熱」がよいと言はれてゐるが、睡眠するにも頭寒足熱即ち頭を冷し、胸や脚部を暖めるのが適當である。これに反して頭が充血して居たり、脚部が冷えて居ては睡眠が出來ないから、水枕をして頭を冷し、また湯タンポをもつて脚や腰を暖めると自然に眠れる。但し幼兒に湯タンポをさせるのは始めは熱過ぎて、終りには冷えるから、熱の發散を防ぐため充分で包んで置く必要がある。あんかや炬燵は幼兒に火傷を與へる危険もあり、また炭酸瓦斯を發散して頭痛の原因となり、また空気を乾燥させ、これを吸ひ込む事によつて呼吸器や咽喉を害し、衛生上害があるから避けなければならぬ。又就寢の際は電燈を消し、正しい姿勢をもつて眠る事が必要である。就寢の姿勢は仰向きに横臥し、手足を軽く伸ばし、手を胸に置いたり、足を重ねたりする事はよくない。また食事の不攝生や、便秘も不眠の原因となるから不消化物の多食を避け、また絶えず適當の便通をつけて置く必要がある。



### 安眠の條件

就寝前二十分間位は遊戯をやめて、靜肅にし安靜な感情をもつて床に這入らなければならぬ。若し感情的に興奮して居ると安眠が出来ない。殊に恐怖心は非常に安眠を妨げる。幽霊の話や怖い話を聞いた後は、恐しくて眠れなかつたり、また怖い夢を見たりするものである。嫉妬心もまた安眠の妨げとなる。よく母が乳兒と添ひ寝をして居る側で、幼い兄や姉が妬ましさに寝て居るのを見る。「お母さん私の方へもきてよ」などと母親にせがむと、却つて叱られ、その結果嫉妬は更に憤怒と變り、一晚中興奮しておち／＼と安眠が出来なくなる。これが長く續くと、習慣となり、成長の後不眠症となつたり、痲が起つたり、神經衰弱になつたり、甚だしくなると筋肉が異狀に緊縮して、舞踏病となる事もある。睡眠中寢返りをしたり齒ギシリをしたり、寢言などを云ふのは、何れも安眠をして居ない證據であり、不健全であるから、一々その原因を調査して、これを除去しなければならない。また考へ事をしたり、頭を使ふと頭部が充血して容易に寢れなくなるものである。故に床に這入つてから餘り頭腦を勞さない方がよい。よく寢れない場合に百まで數へたり、呪禁まじなひを唱へたり、本を讀んだり、睡眠薬を呑んだりする事があるが何れもよくない。かゝる事をして折角眠つても、睡眠の目的たる休養が出来ないばかりか、却つてこれが習慣となつて、遂には睡眠薬を呑んだり、呪禁を唱へなければ眠れなくなつて仕舞ふ。睡眠の

出来ない場合には、強ひて眠らうと努力せず、たゞ安靜にして居れば眠らなくても、多少休息の目的を達する事が出来るのである。また眠らうと努力すればするほど眠れなくなり、眠らなくても安靜にして居ればよいと言ふ氣持ちで、焦らず靜かに横臥して居ると却つて自然に眠れるものである。安眠の出来ない場合には入浴は有効である。餘り熱くないお湯に乳から下だけ浸して十五分間位つと、頭の血が下り、血液が循環して、自然心地よく眠れる。扁桃腺の肥大や、アデノイドのある人は、横臥によつて多少呼吸困難を來たし、そのために安眠が出来なくなるものであるから、醫師の診察を乞うて、適當の治療を受ける必要がある。

### 寢小便の問題

睡眠に關係して述べなければならぬ事は、寢小便の問題である。満一歳以下下の幼兒には一般に襁褓を用ゐるが、子供が歩行するやうになつたら、成る可く襁褓を使用しない事が望ましい。若し襁褓を長く使つて居ると、自然小便に對して無頓着となり、その結果腹部や腰部を冷やし、それが寢小便の原因となる事がある。寢小便には身體の故障による場合と、精神的原因の場合と、單なる惡習慣から來る場合がある。從來寢小便はたゞ惡習慣のためだとのみ考へられ、屢々無理な制裁を加へたものであるが、實は身體的故障から來る寢小便も決して少くない。例へば尿道狹窄症とか、膀胱や腎臟に關する諸種の故障や、尿が濃厚過ぎたり、



尿の酸性反應が強かつたりするために、寢小便をする事があるのである。故に三歳以上になつても寢小便をする子供に對しては、一應身體的故障の有無を調べて見る必要がある。

### 感情と寢小便

子供が神経過敏になると、膀胱の下部にある外括約筋の抑制作用が弛緩して、尿意を催はすものである。よく試験場に臨むときとか、心配事などのある場合に排尿したくなるのはこれがためである。故に幼児の神経の疲勞を來たすやうな精神状態を持續すると、それが寢小便の原因となる事がある。殊に強い恐怖心をもつて居る幼児にはこの傾向が甚しい。恐怖心は一面において、暗夜に便所に行く事を恐れ、それがために就寝前排尿を怠つたりするため、益々寢小便の傾向を助長する事になる。劣等感も寢小便の原因でありまた結果である事があつる。兒童の劣等感は第二十八章で述べたやうに、彼等の氣力を減退せしめ、意志を薄弱ならしめるからである。而して氣力消耗者や意志薄弱者が、寢小便の常習者となる事も決して珍しくはない。寢小便をする兒童はたゞでさへ劣等感を得るのであるが、劣等感のために寢小便をする子供は、その結果一層劣等感が強くなるのである。かゝる兒童の寢小便を矯正するには、叱つたり罰したり、輕蔑したりしないで、寧ろ兒童の自信力を増進せしめるやうに指導しなければならぬ。また嫉妬心の強い子供も屢々寢小便をやる事がある。この種の兒童の寢小便は前にも述べたやうに、母を困

らせる手段であつたり、母の注意や看護を自分に集中する手段であつたり、また甚だしき場合は復讐の手段である場合もある。故にその指導の任に當る父母は、彼等の精神状態の如何によつて、適當にこれが矯正の方法を講じなければならぬ。

### 母の不精と寢小便

寢小便の惡癖は、屢々母の不精や無關心からくる場合もある。例へば満一歳以後の子供は必らず夜中に一回乃至二回排尿させなければならぬのであるが、母が寢忘れてそれを怠つたり、また不精のために起きなかつたりすると、幼兒は濡れた襁褓のまま長く横臥し、それが寢小便にまで發展するのである。かゝる兒童の惡癖を矯正するには夜中一定の時間に起して小便をさせるのがよい。例へば四歳の子供だとすれば、先づ七時半頃に就寝せしめ、母が床につくとき即ち十時頃一旦子供を起して排尿させるのである。この時半睡半醒の状態でなく、よく目を醒まさせて、何んのために起したかと云ふ事をよく了解せしめなくてはならない。更に夜中二時頃に一度起きて排尿させる。かくする事を三週間も繼續すれば、身體の故障や精神的原因によるものでない限り、必ず直るものである。

子供の食物も寢小便に關係する事がある。例へば夕方に多量に水を呑むとか、また梨や柿のやうな腹部を冷やす果物を食する場合や、刺激性の飲食物などは、何れも寢小便には毒であるから避け



なければならぬ。また便秘のため膀胱を壓迫し、それがために排尿の度數を増し、寢小便を誘發する事がある。寢小便は多くの場合において、一寸とした過失であるから、餘り大げさに言つたり、心配し過ぎたりしない方がよい。寧ろ彼等の同情者となり、決心さへすれば必ずこれに打ち勝つ事が出来るものだと言ふ自信を與へやり、寢小便をしなくなれば旅行に連れて行つてやると言ふやうな、獎勵を與へたり、また星取表と言ふやうなものを作つて、寢小便をしなかつた時には金紙の星を切つてはりつけてやり、一ヶ月の終りにその星數によつて褒美をやるなども矯正に導く獎勵の方法である。

### 第三十六章 食事と家庭教育

#### 食事の重要性

幼兒の欲望の内でも最も強いものは食欲である。食欲はたゞに子供ばかりでなく、總ての人において、また總ての時代において他の一切の欲望を凌駕して居る。これあるがために吾人の心身は維持せられ、成長發展の基礎は與へられるのである。またこれあるがために、人間は盗んだり、妬んだりするのである。個人と個人との間の争ひも、國際間の

戦争も、労働者と資本家との間の階級闘争も、政治も學問も修養も煎じ詰めれば、その原因は食はんがための現はれに過ぎないと言ふことも出来る。従つて食欲を適當に制御すると云ふことは、小にしては個人の健康を保ち、正しい道義に叶ふ道徳的生活の基本であり、大にしては社會の安寧を保ち、國家の統治、國際の平和を保つ所以である。而してこの食欲に關する訓練は家庭教育においてなされなければならない。

#### 何を如何に食すべきや

食物即ち榮養は、總ての生物に必要缺く可からざるものである事は申すまでもない。處が前にも述べたやうに食物の種類は生物によつて趣きを異にして居る。下等の動物を見ると、著しくその攝取する食物範圍が限定されて居る。例へば蚊や蛭は主として血を吸つて生活し、小鳥は木の實や昆蟲を食し、兎は草を食つて生きて居る。更に微生物になると一層それが局限され、百日咳の細菌は人間の咽喉部の粘膜より血液を吸ひ、十二指腸蟲は十二指腸より榮養分をとつて寄生して居る。それが高等の動物となるに従つて、徐々に範圍が廣くなり、馬は麥や草や果物などを食し、犬や猫になると一層その範圍が擴大し、肉食もすれば、野菜も穀類も、甘いものも鹹いものも食べる。更に人間になると非常な廣範圍に亘り、酸いものでも、辛いものでも、玉子の腐敗したのでも、燕の巢でも、酒も煙草も、トマトも鹽辛も、



支那料理も西洋料理も、數へ來れば數限りもなくある。また人間がその食慾を満たす方法や手段も多種多様である。居候的寄生生活もあれば、資本家的生活もあれば労働者の生活もあり、また乞食の生活も考へられるのである。従つて人類においては如何なるものを、如何にして獲得し、これを如何に食するかと云ふ事は、重要な研究問題である。以上の中如何なるものを食す可きかと云ふ研究は、主として營養學の範圍に屬し、如何にして獲得す可きかと云ふ問題は、主として經濟諸科學の研究範圍に屬し、如何に食す可きかと云ふ問題は、心理學や家庭教育學の範圍に屬する。著者は本章において主として最後の問題である、如何に食す可きかと云ふ事について述べることにする。

### 乳兒期の營養

子供は生れ落ちるや否や、本能的に母胎から乳を吸つて生活を始めるのである。この場合授乳の回数や分量などは必ずしも杓子定期的にする必要はないが、さうかと言つて不規則ではいけない。幼兒が、自然に空腹を訴へるときと、母の乳房の張つて來る時間とは、ほど合致するも譯である。大體において幼兒は、胃の内容が小さいから、一回に吞む分量も少なく、従つて回数が多くなるのである。生後二週間以内の乳兒は二時間乃至二時間半毎に、生後二週間から一ヶ月の乳兒は約三時間毎に、生後二ヶ月から三ヶ月ごろまでは約三時間半毎

に、四ヶ月以後は四時間毎に與へるのが適當だと考へられて居るが、これも子供の健康やその他の事情によつて、或る時は四時間の間隔を置き、或る時は三時間と言ふ具合に多少伸縮しても差支はない。授乳する時の母の姿勢や、感情態度は非常に大切である。母の乳房で乳兒の鼻を蔽ふ事などは申すに及ばないが、授乳の際の母の感情も乳兒に深い影響を與へるものであつて、母が悲んだり怒つたりして居る時には、たゞに乳量が減するばかりでなく、母の顔を眺めながら乳を吞んで居る乳兒は、自然に母の感情を反映し、乳兒の唾液や胃液の分泌が減少し、そのために食慾が減退したり、消化不良になるのみでなく、性格の上にも悪い影響を與へる。また母があくせく急いで授乳すれば、自然に子供がせつかちになり、ゆつくりと樂々と授乳すれば、落ちついたゆつたりした子供となるのである。

母が重症の結核に罹つた場合とか、腸チブスその他の傳染病にかゝつた場合には授乳は中止されなければならぬ。また脚氣に罹つて居る母乳は、一般に幼兒に有害だと傳へられて居るが、必ずしも絶對的ではないから、一應専門の醫師に相談した上で最後の決定をする事が安全である。乳兒の營養は母乳に依る事が第一である。また母乳か人工營養かの問題は、單なる營養分のみの問題ではない。化學的に分析すれば、人工營養の方が營養分に富んで居るかも知れない。然し屢々述べた



様に、榮養は感情に深い關係がある。牛乳瓶を抱いて呑んで居ると、温い母の胸に抱かれて乳を呑むのでは、そこに雲泥の相異がある。人工榮養の幼児が、一寸とした事にも消化不良を起したり、氣六ヶ敷しくなつたりするのは、榮養以外に深い原因があるのである。

### 離乳に関する注意

幼児は生後六ヶ月ほどたつと、前歯が生え始まり唾液の分泌の量も増加し、よだれをたらすやうになり、また屢々母の乳房を嘔むやうになる。

この頃からそろ／＼母乳以外の流動物を與へ始めて、離乳の準備にかゝり、生後滿十ヶ月乃至滿一ケ年になつて、左右に第一小臼齒が生える時分には、完全に離乳しなければならない。また生後滿一年後の母乳は、榮養分殊に兒童の發達に必要な鐵分が不足となり、如何に多量に母乳を與へても榮養不良となり、發達が遅れ、遂には病氣を惹起することさへある。また離乳時期を過ぎた後までも授乳する事は、幼兒の母に對する依頼心を助長し、獨立心を缺く原因となり、躑と云ふ點から見ても餘り面白くない。然し離乳は物質的にも、精神的にも、決して容易なことではない、母親の方から積極的に働きかけなければ、兒童の方から自發的に乳を離れると云ふやうな事はない。離乳を物質的方面から見れば、母乳に替はる榮養物の選擇である。初めはくすやかたくり粉を湯に解いて嘗めさせ、次にスープや粥の重湯に移り、はうれん草やさつま芋を煮て、裏こしにかけたものなど

を與へ、成長するに従つて徐々に卵の黄味の半熟やお粥に進み、また良質のビスケットやウエツアスなどを與へるのが順序である。然し榮養物の選擇より一層重要なことは、離乳の精神的過程である。「愛情の教養」と云ふ章で述べたやうに、幼兒の第一次的性愛は、漠然として皮膚全體に分布されて居るのであるが、殊に唇の觸覺には、第一次的性愛感情が多分に含まれて居る。幼兒が母の乳房を吸ふのは、單なる食慾の満足だけでなく、食慾と同時に彼等の第一次的性慾をも満足させるのである。この點において男の子は女の子より著しく強く、男の子が女の子に比して乳離れの悪いのは、これがためであると考へられてゐる。また男の子が離乳後長い間母の乳房を弄つたり、強い執着を感じるのは、この心理に基くものである。故に離乳を、單なる榮養の問題とのみ考へる事は危険である。従つて離乳は唐突にしてはならない。少くとも二三ヶ月かゝつて漸進的になされなければならない。よく乳房に辛や胡椒などをつけ、不自然な方法で離乳する事があるが、これは慎まなければならない。かくする事によつて兒童の第一次的性愛感情が非常に不満を來たし、その結果母の着物や、その他の部分に接觸したり、或は指を銜へたりして、變則的にこれを満足せしめるやうになり、成長の後性格上にも惡影響を與へ、また退行作用の原因ともなる場合がある。少年や青年が喫煙に魅力を感じるのは、乳房を吸つた幼時に退行し、煙草の煙それ自身より、パイプを銜へ



る事によつて、唇の觸覺を満足させたいためであると説く學者もある。

### 獨りて食事する習慣を養へ

幼兒が離乳し、自由に食事をするやうになると、自然そこに種々な問題が起つて来る。第一の問題は、父や母から養つて貰はずに、成可く早く獨りで食するやうにすることである。少くとも満二歳に達した子供は必ず獨りで食べなければならぬ。それには食器の事も考へてやる必要がある。從來我々の家庭で使用して居る箸は幼兒には可なり不便が多い。「年齢別について」と云ふ章において述べたやうに、兒童の腕骨が全部骨化するのは満八歳である。即ち満八歳以下の幼兒の腕骨の中には、必ず多少の軟骨を未だ有して居る。従つて強ひて彼等に箸を使用させることは、非常な努力を要求し、屢々彼等の神經を過敏にし、その結果食慾不進を來たす事になるのである。以上のやうな理由で、満五六歳以下の兒童には、成可くスプーンやフォークなどのやうな便利なものを與へる事が適當である。由來日本人が一般に神經質なのは、幼時から箸を使はされる爲めではないかと自分は考へてゐる。茶碗にしても壊れ易いものは幼兒の心配の種となり、それだけ食慾を減退する原因となるのであるから、成る可く堅牢で、然も優美な食器を選ぶ方がよい。また坐食する場合には食卓の高さを兒童に調節せしめ、テーブルで椅子を使用する場合には、椅子の高さを兒童の身長に調節して、無理のない様

にして食べさせなければならぬ。また子供が獨りで食事をし始める時には、どんなに注意しても食物を溢して、お膳や着物を汚すものである。その場合において餘り父や母が口八蓋しく清潔を要求すると、子供は獨りで食べる事を恐れるやうになつて、何時までも面倒を見て貰ひたがつたり、食事それ自身に對してまでも多少の危懼を抱くやうになつて、食慾の減退を來たし、營養上は勿論、精神的にも害がある。故に着物を少し位汚しても、寛大にしてやり、ゆつくり安心した氣持で食べさせてやるやうにするがよい。

### 咀嚼の問題

吾人が食物を攝取する目的は營養である。而して食物の營養は消化によつて果たされるのである。どんなに營養價値の高いものを食しても、消化しなくては何んの役にも立たない。これに反して粗食でも消化さへすれば、相當に營養をとることが出来る。自分はこの事を考へる度に、牛の場合を思ひ起す。家畜の中で牛ほど有用な動物はない、その乳は人間の乳に次ぐ營養物であり、その肉は總ての肉に勝つて美味であり、その勞働力においても他の追従を許さない。處が牛は猫や馬や犬に較べて遙かに粗食である。かく牛が總ての家畜の中で一番粗食であるにもかゝらず、一番優良な家畜である所以は、どこにあるかと云ふと、牛は食物をよく消化させるからである。牛は反芻と言つて、一度嚙んだ食物を、第一の胃から出して來て、嚙み



直すのである。人間の場合においても食物をよく咀嚼すると云ふ事が、非常に大切である。米國人でフレツチャーと言ふ人は、特にこの問題を研究し、所謂フレツチャー式嚙み方を創案し、牛乳をも嚙んで呑めと云ふ程に八釜しく云つて居る。聞く所によると、慶應の幼稚舎では生徒達に嚙み方の練習をさせ、半搗米は六十回、キヤベツは八十五回、豚肉は百三十回嚙ました處が、その結果消化と榮養の吸収状態が非常に改善したと云ふ事である。

### 恐怖と食事

咀嚼と同時に大切な事は消化液の分泌である。唾液胃液腸液などの分泌がなければ、どんなによく嚙んでも消化する事は不可能である。咀嚼の目的も要するに、消化液を食物の内部に滲透せしめることにある。處が、消化液の分泌は吾人の感情に由つて支配を受けるものである。恐怖や忿怒の感情をもつて居る場合には、唾液を始め他の消化液の分泌が著しく減少する事實は、吾人の日常經驗する所である。演説やお話をする時に、興奮すると、唾液が出なくなつて、咽喉がひつつくなどもその例である。印度では犯罪人を裁判するのに、生米を嚙ませて嘔き出させ、その中に唾液の混入して居る量の多少によつて、罪の有無を判断すると言ふ事である。これは恐怖心が唾液の分泌を減少させると云ふ心理に基いたものであつて、恐怖心から居る眞犯人の、嚙んだ生米の中には唾液の混入が少ないので、それと分るのである。前にも屢

屢述べたやうに人間の身體の内、胃腸ほど感情の影響を受けるものはない。これは恐怖や憤怒に最も關係の深い、交感神経が腹部に澤山分布されて居るからである。殊に兒童は非常に感動し易く、一寸とした事にも興奮し、それが直ちに食慾不振、消化不良、又は便秘などの原因となるものであるから、細心の注意を要する。例へば夜分兩親の不在の時などは幼兒の食慾が著しく減じ、碌に食事もしないで眠つて仕舞ふ事がある。その他また遊び疲れた時、また食事時に兩親から叱られた時などは、明かにその結果が現はれてくる。

### 快感と消化液の分泌

これに反して快感は消化液の分泌を促進し、食物の消化をよくするのである。兒童の食慾は一定せず、或る時は澤山食へるかと思ふと、或る時は非常に食の減する事は、子をもつ親の等しく經驗する所であるが、これは多くの場合兒童の感情の動搖に基づいてゐる。故に食卓に花瓶を添へたり、食事時に愉快な話をしたり、また上品な冗談を言ふ事などは、精神衛生の方面から見ても、また食物の消化と云ふ點から見ても、望ましい事である。東洋流の「君子は食するに語らず」と言ふ精神にも、捨て難い所があるが、千篇一律になる事は考へものである。著者が曾てロンドンに居つた時、或る敬虔な家庭のお世話になつた事がある。夫妻は遠來の自分を慰めるために、種々と心盡しのご馳走をしてくれた。然し今でも想出して



は獨りで微笑するのは、その時食卓で夫妻から聞いた笑話である。御承知の通り英本國はイングランド州と、ウエルス州と、スコットランド州の三州から成つて居る。どこの國でも同じやうに、お互に他の州の人を馬鹿にしたがるのが常である。殊にイングランドの人々はスコットランド人を田舎もの扱ひにしたがる。主人は食事の半ばに、次のやうなことを語り出した。「スコットランド人は誰も知つて居るやうに、大變けちんぼうです。或る時グラスゴーの在に胃痛に悩まれて居る老人がありました。お醫者さんから何時死ぬかも分らないと云ふ絶望の宣告を受けましたが、老人は諦めかねて、ロンドンに行つて名醫の診察を乞ふことになりました。彼は先づグラスゴーの停車場から汽車に乗つてその次の驛で下車し、またその次の驛まで切符を買つて下車し、またその驛で下車し、またその次の驛で下車すると言ふ具合に、一々下車するので、車掌が不思議がつてその譯を尋ねると、老人が言ふのに私は胃痛で醫者の診断によると何時死ぬか分らないと言ふ事だから、ロンドンまで通し切符を買つて、途中で死んでは汽車賃を損するから、かうして一々下車するのだと云つたさうです。」主人のこの話が済むと、今度は「奥さんが私も一つスコットランド人のお話しをいたしませう。エチンバラの田舎のお百姓さんが、或る時一世代の思ひ出に寫眞を寫すことになりました。彼は寫眞屋に出かけて行つて、寫眞の値段を尋ねました。すると見本を見せられて、前面

を向いたこれ／＼の大きさで何程だと云ふ事を聞かされました。そこで愈々寫す事になりますと、彼は横向きのポーズになつて、横顔を寫して貰ひました。彼の考へでは、顔は左右とも同じだから、半分寫して置けば充分だ、全部寫すのは贅澤だと思つたらしいのです。寫眞が出来てお金を支拂ふ段になると、顔全部寫して幾何と云ふ約束だから、横顔の寫眞はその半額である可き筈だと云ひ張つて承知しなかつたと云ふ話です。」こんな他愛もない話が、お客の心をなごやかにし、自然主客の食慾を増進するのである。

### 味覺と他の感覺との關係

申すまでもなく食物はおいしくなくてはならない。どんなに栄養價があつても、不味いものは消化不良であつて、結局大した栄養にはならない。子供のお辨當などにしても、女中任せにせず、お母さんが手をかけて作ったものは、同じ材料でもおいしく出来て、栄養になるのである。味の良否は單に味覺だけの問題でなく、他の感覺によつても補足される。よい繪を見、よい音樂を聞き乍ら食事をする時、食慾の進むのは吾人の經驗する所である。殊に嗅覺と味覺とは深い關係がある。ラシレーは或る装置によつて、唾液の分泌量を計算する工夫を考案し、或る子供の鼻腔を軽く閉ぢて、香を嗅ぐ事の出来ないやうにして、ビーフステーキを與へ、唾液の分泌を計量すると、一分間の分泌量は約四五滴であつ



たが、鼻腔を開けて香を嗅がせてやると、唾液の分泌が一分間六七滴に増加したと報告して居る。かく同じ食物でも香料を適度に調味したものは、唾液を多量に分泌させ、食慾を増し、消化を良くする助けとなる。前にも述べたやうに消化器系統は、非常にデリケートで、環境の影響を受け易いものであるから、努めて分泌を促進せしめするやうな刺戟を與へ、これを妨げるやうな條件を除去する事が肝要である。

### 食事に對する二三の注意

人間は生れつき社交的であつて、多人数集まる事を好むものである。食事にしても、獨りで食して居ると、何んともなく進まないが、多數の同志と會食すると、自然食慾が増進して、おいしく食べられるものである。殊に慣れた食堂で親子打ち揃つて、食事する時ほど楽しい事はなく、また家庭教育によい機會はない。故に母親は勿論父親もせめて夕食の時だけは、寛いで家庭の人となつてほしいものである。これに反して見知らないお客のある時などには、神經過敏な兒童の食慾は屢々減退する事がある。元來幼兒と言ふものは利己的で、慾張り屋であるから、おいしいもののある時には、それを獨占したがるのである。而して自分の好きなお魚の切身が、兄や姉のものより小さいと言ふやうな場合には、嫉妬心を起し、それがために折角好きなお菜があつても、碌々食べなかつたりすることがある。不公平の

取扱ひは何時でもよくない事であるが、殊に食物の給與についての不公平は、兒童の嫉妬心を激發し、食慾不進の原因となるだけでなく、性格上にも種々の悪影響を與へるものであるから注意を要するのである。盜癖なども多くはかゝる一寸とした事が原因となるのである。

兒童の飲食の分量は一定しないものである。或る時は澤山たべるかと思ふと、その次には餘り食べないと云ふ風で、非常に不規則である。これは身體的にも、精神的にも種々な原因がある。例へば子供が何かの事に熱中して居る場合などには、決して落着いて食べるものではない。吾人は食後の休息を八釜敷く言ふが、吾人の經驗に由ると、食後の休息も大切であるが、食前の休憩は更に一層大切である、殊に神経質の子供などは、少くとも食前十分間位休息して、ゆつくりと食事をする事が絶対に必要である。この外食事時に叱られたり、喧嘩をしたり、睡眠が不足した時、便秘して居る時、疲れ過ぎて居る時、食堂の空氣流通が悪かつたり、日光が入らなかつたり、寒過ぎたり暑過ぎたりする場合にも食慾が減ずるものである。かゝる場合において、母親は原因の如何に係はらず、食慾の減退を非常に心配するものである。それは普通食物の量と兒童の健康とが正比例するからである、然しこれは必ずしも絶對的のものではないから、よくその原因を調査した上で、合理的に食慾の増進を計らなければならない。小人は大人と異り何時も同じ量の食事を攝取しなければなら



らないと云ふ事はない。然るに母親は子供の食量が減少すると、理由の如何んにかゝはらず、心配して無理に食べさせようとするのである、それがために却つて子供は反抗的に食べなくなるのである。よく食事時に母親が子供を褒めたりすかしたりして、強制的に食事をさせやうとすることを見るが、あれがどれだけ兒童の性格上にも、食欲にも悪い影響を與へるか知れないのである。子供は時に一回位食事をしなくても、心配はないものである。假りに子供が晝飯を食べたくないと云つた場合には、母親は餘り心配顔を見せず、その儘自由にして置く方がよい、その替りその日にはどんな事があつても、間食を與へてはならない。かくすれば多くの場合夕食には空腹を訴へて充分食べるものである。然し若し二三回引續いて食慾が不進の場合には、醫師の診断を乞ひ、その原因を知り、適當な手當を施さなければならぬ。

### 食物の好き嫌ひとその原因

子供の食事に對する好き嫌ひほど、母親を困らせるものはない。人参や大根の嫌ひなのは、普通一般の現象であるが、魚類や肉類やその他大人の好きなものでも、子供は嫌ひな場合が少なくない。然し何事でもさうであるがこれは彼等にとつて決して理由のない事ではない。幼兒が卵子のやうな軟いものを好み、肉類のやうな堅いものの嫌ひなのは、幼兒の齒がまだ充分發達して居ないのもその一つの原因である。

また魚類の嫌ひなのは小さな骨があつて食べ難かつたりした事が原因である場合がある。食事も一つの學習であつて、大人が考へるやうに、一時に何も彼も食べるものではない。彼等は多くの經驗を経て、或は好きになり、或は嫌ひになるのである。子供が新しい物を食べ始めるときには、必ず多少躊躇の様子を示す。これは見慣れない食物に對する、子供の自衛的態度であつて、本能とも言ふ可きものである。それにも拘はらず、大人は自分が好きなものは、何んでも子供に食べさせようとする。然しかくする事によつて、兒童は益々その食物が嫌ひになつて仕舞ふ。人類の歴史に徴して見ても、原始人の食物の種類は、今日から見ると非常に限られて居つたに違ひない。吾人の祖先は馬鈴薯が發見されてから、數十年の間食はなかつた。また榮養價値の高いトマトも發見以來數百年の間、毒茄子又は氣狂ひ茄子などと呼ばれて居つたのである。子供はこの點において原始人に似て居る。故に子供に新しいものを與へる時には、決して強ひてはならない。嫌ひなものを無理に食べさせても、決して滋養にならないばかりでなく屢々嘔吐を催すことさへある。故に新しい食物や、嫌ひなものは、子供の要求があるまで、彼等の食膳に上せてはならない。好きな人だけで食べて居れば、自然彼等が要求するやうになるのである、然し子供が要求しても、初の間はほんの少しだけ與へ、徐々にその量を増加して行くやうに、注意深く忍耐強くすれば、だん／＼慣れて來る



ものである。また身體的理由で食物を好悪する場合がある。例へば齶齒が出来るると食慾が減退したり、堅いものが嫌ひになつたり、腦の發達盛りの幼児が、甘いものを欲しがつたりするのはその一例である。殊に少年少女期となり、所謂聲變りのする頃になると、食物に對する趣味が急に變化し、今まで好きだつたものが嫌ひになり、これに反してこれまで嫌ひだつたものが、好きになつたりするものである。これは屢々誤解される様に、彼等の我儘のためばかりではなく、生理的理由に基づいてゐる。また兒童の食物に對する嗜好は、父母や祖父母などの感化影響に由ることが少くない。煙草や酒などにしても、子供は初めから好むと云ふやうな事は稀であつて、多くは父母や周囲の人の感化によるのである。母が鰻が嫌ひだと、子供も鰻が嫌ひになり、母が鹽辛が好きだと、子供も鹽辛が好きになる。故に子供達に食物に對するよい趣味や、習慣をつけようとするには、先づ父母がよき模範を彼等に示すやうに心懸けることが肝要である。

### 食慾異常とその原因

幼時に家が貧しかつたため、その食慾を充分満たす事が出来なかつたものが青年期に達し、自分で給料がとれるやうになると、幼時の不満を満たすために、急に飲食に耽けるやうになる事は既に述べた。彼等は自己の収入の大部分を、飲食の資となし、そのために身體を害し、身を誤るものも少なくない。故に幼時には身體に害を及ぼ

さない限り、財力の許す限り、彼等の食慾を満足してやる方がよい。また幼時に胃腸の弱かつた人も、貧乏な家庭に育つた子供とほゞ同様な状態に置かれてゐる。彼等は胃が弱いために、不本意ながら幼児の飽く事を知らない食慾を制限される憂目に會ふ。それがために成長して自由な身分になると、急に食慾に對して放縱となり、多くは大酒家となり、大食家となり、胃潰瘍の原因となる事がある。また胃腸の強弱は性格に種々な影響を與へる。胃腸の丈夫な人は概して意志の強固の人となり、これに反して胃腸が弱いと消極的となり、吝嗇な人となる傾向がある。故に胃病の故障は成る可く早く全癒せしめなければならぬ。

## 第三十七章 子供の躾け方

### 躾けの必要

兒童の教育は自由放任でなければならぬと言ふ人がある。若し教育の根本理想が「絶対の自由」と云ふ事にあるなら、何もしないで放任して置く事が最善であつて、結局教育と言ふ事は成立なくなるのである。然し人間の實際生活を見ると、決して絶対自由のものではない。家庭生活においても、社會生活においても、國民生活においても、一定の



秩序が必要である。吾人が世に處して、圓滿な生活をなし、幸福な世渡りをして行くためには、權利を主張する前に、義務を負ひ、法律の定むる所に服従し、道徳を守り、秩序を尊重して行かなければならないのである。また社會や國家に秩序があるばかりでなく、自然界にも種々の法則がある。星晨の運行も、春夏秋冬の四季の變化も、風の吹くのも雨の降るのも、皆この儼然たる自然界の法則によつて行はれて居るのである。我々人間の生活においても、自然界の法則を無視する事は絶対に不可能である。飛行機が空中を飛び、船舶が河海を航行し、農夫が種子を蒔いて收穫を得、吾人が身心の健康を保つのも、皆な自然の法則に服従してこそ始めて爲し能ふのである。故に彼等は幼い時から家庭において一定の規律に従ひ、秩序を守るやうに躰けられなければならないのである。

### 規則は子供のため

家庭教育において躰の必要な事は、前述の通りであるが、實際問題として如何なる躰を、どう言ふ風に與へたらよいかと言ふ事は決して簡單ではない。規律は規律のための規律であつてはならない。子供を叱る場合においても、盲目的にこれは規則だから守らなければならないと言ふのは、徒らに子供の反感を増長するだけであつて、有害無益である。規則や道徳の根本は、決して人間を束縛するためではなくて、その徳を養ひ育てるためである筈である。人間は規則のために存在するのではなくて、規則は人間のために存在するものである事を、忘れてはならない。故に一寸とした規則や道徳についても出来るだけ、何故にかゝる規範が設けられてあるかと言ふ事を、兒童に納得させ、これを守る事が彼等の幸福のために、必要不可欠からざるものである事を、理解させなければならぬ。かく規則は自分のために存在して居るのであると言ふ事が分れば、兒童はこれに服従し、これを尊重するやうになるのである。元來人間には、不秩序よりも秩序を愛好し、偉大なるものに對し、眞理に對して、先天的に信頼と畏敬の感情を披瀝する本能を有して居る。宗教心や信仰などはこの發露で、その好適例である。故に理解と同情とをもつて、正しく指導すれば、彼等は喜んで權威に服従し、秩序を守るのである。

前述のやうに規律や秩序は飽くまで、兒童のためでなくてはならない。處が、實際は必ずしも彼等のためのみでなく、屢々父や母のためであつたり、教師や學校の都合であつたりする場合があるのである。例へば騒がしいからと言つて静肅を要求する場合、邪魔だと言つて叱る場合、部屋や教室や衣服を汚したと言つて罰する場合に、子供達のためと言ふより、多くは父母や教師の都合が主として考へられるのではあるまいか。少くとも兒童に、騒ぐことがなせいけないのであるか、衣服を汚す事がなぜそんなに悪いのであるかを、理解させようと努めない場合が多くはなからうか。甚



だしきにいたつては、同じく衣服を汚しても、母の機嫌のよい時には放任し、母の不機嫌の時には叱られると言ふやうな譯で、子供から見れば、何んのために叱られたのか譯が分らなくなるのである。こんな事が度重なると、遂には父母や教師の權威に對して子供に懷疑心を起させ、恐怖心を與へ、兒童の感情を攪亂し、不従順から反抗心へと導くのである。故に兒童に命令を與へ、彼等を譴責する場合においても、先づそれが眞に彼等の將來にとつて、重大な意義をもつて居るかどうかを考慮し、假初めにも父母や教師の都合が主となつて居つてはならない。

### 親の優越感を除け

従來、自分は父であり母であり、子供を育てるために、種々な犠牲を忍んで來たのであるから、少し位の無理を言つても差支ないと言ふやうな考や、自分の子供を自分で自由勝手にするのは、親の權利であると言つたやうな、一種の親としての意識や、優越感をもつて子供に臨んで來た傾がある。また従來子供は單に受身であつて、家庭においてても社會においても、人から世話になり厄介になるばかりであると言つたやうな見方をして來た。然しこれは片手落ちの考であり、偏見である。家庭教育においては、先づかうした考を根本から除去しなければならぬ。子供はたゞに受けるばかりでなく、精神的に家庭や社會や國家に、多くのものを與へて居る。例へば子供が出來たために夫婦關係が圓滿になり、幼少年者が居るために、

社會が道義的になり、國際間が平和的になるのを見る時、吾人は兒童に負ふ事が非常に多いのを知るのである。かく考へて見ると我々は子供を養育する場合において、たゞ單に彼等を愛するだけでは足りないのである。よく言はれる如く子供は自分の所有物でなくて、神から依託されたものとして、これを尊敬して行かなければならない。父であらうと、母であらうと、間違つて居る場合には子供に謝罪するやうな、謙虛な氣持をもつて居なければ、子供を躰け、彼等の指導者たるの資格はない。

世の中には叱ると言ふ事が躰けであり教育であると思つて居る人が少なくない。然かもそれが所謂教育の熱心家と自分も考へ、人からも思はれて居る人々である。彼等は熱心の餘り神經過敏になり、朝から晩まで子供等に干涉し、自分で勝手に作つた理想や、自分にも行ふ事の出來ないやうな高い道德の標準を兒童にあてはめ、もし我が兒がその標準にあてはまらなかつた場合には、一から十まで細大漏らさず、叱つたり脅かしたりする。かうした教育はよく行つても、消極的人物を作り、何んでも人の言ふなりになる、無氣力な善人を作る外ない。若し悪く行けば親に反抗し、神經衰弱となり、屢々思想的に左傾したり、不良不逞の徒となるのである。

### 輕々に善く勿れ

子供を叱り、子供に刑罰を與へる事は決して容易ではない。なぜそんなに